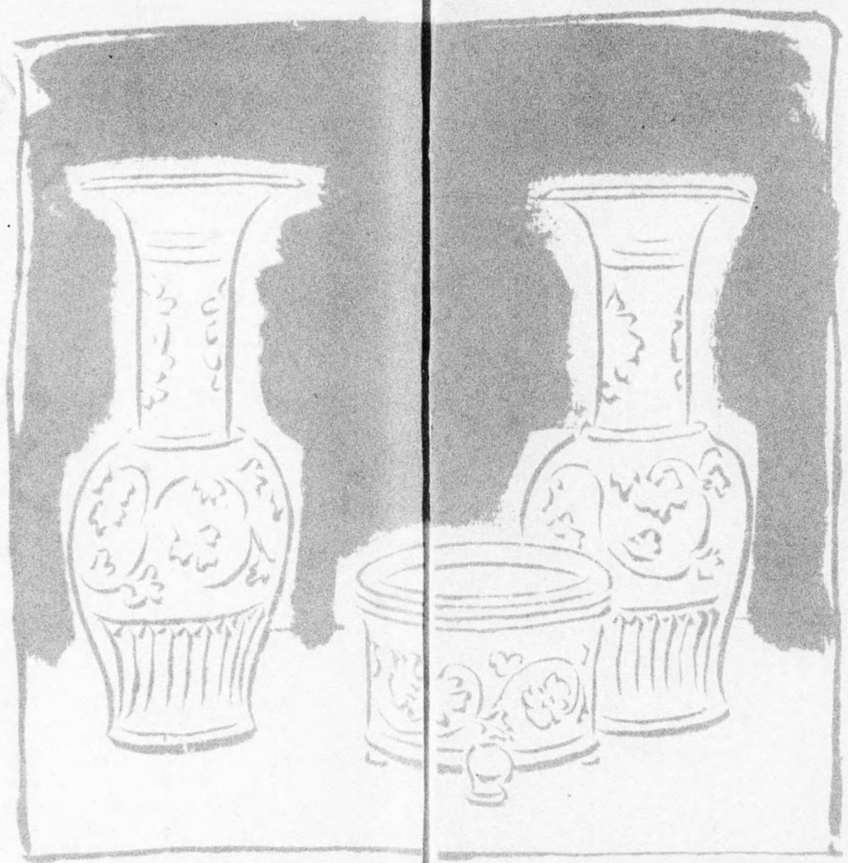
郷土教授資料

特258
961

始



青磁花瓶及香爐（国宝）

鑁阿寺藏　鍾一字

特258
961

帝國圖書館藏

郷土教授資料

第二輯

栃木縣立足利中學校

昭和九 帝國圖書館藏

陸軍大將奈良武次閣下題字

栃木縣知事　萱場軍藏閣下題字

天長
地久

萱場軍藏書

亀ヶ淵架橋碑

放生會碑

鶴山先生碑

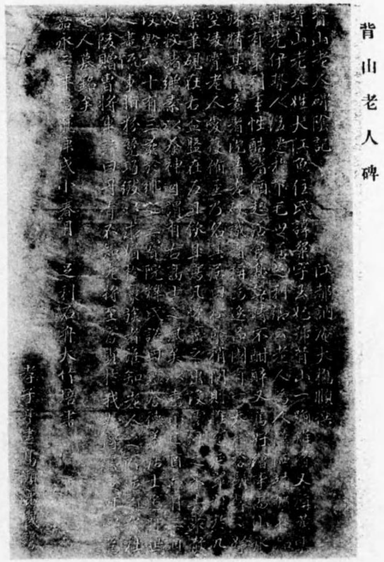
神明宮碑（其ノ一）

神明宮碑（其ノ三）

神明宮碑（其ノ二）

近藤兵助墓

近藤兵助墓



背山老人碑

小佐野茂左衛門句碑

鈴木瀚齋墓

櫻花歌碑

默庵古志碑

俠民碑

鈴木敬哉碑

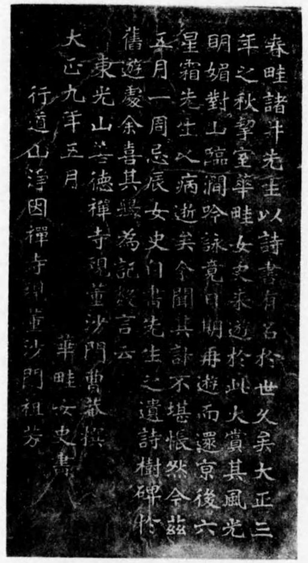
二重坂碑

瀬北詩碑

田崎草雲碑

田崎草雲碑

柳糸句碑



行道山詩碑

阿部茶村碑

山下允升碑

序文

足利中學校が鄉土資料第二輯を編纂するに當つて余に序文を乞はれた。鄉土があらゆる意味に於て人間發達の母胎であり、敎育の出發點であると信じてゐる余は喜んでこれを引受けたのである。思ふに何れの鄉土にも特定の自然があり、鄉土の先人が苦心と努力とを捧げて創造した文化がある。而してこの文化は等しく鄉土民心の特徵として奥底深く浸潤し、次代民心の中核を形成しつゝ鄉土をして悠久の生命を保持せしむる精華である。善良にして有爲なる鄉土民たらんとするものは、先づ鄉土生活の基礎として正しく其の自然及文化を研究せねばならぬ。斯くてこそ初めて鄉土民としての資格が養はれ、鄉土の振興を通して國家の興隆に寄與する人間になり得る

のである。洵に鄉土を愛する人物は國家を愛する人物であり、鄉土をして偉大ならしめる人物は國家をして偉大ならしめる人物である。足利中學校が此處に着眼せられ、敎育の資料として本書の編纂を企てたことは實に卓見であると言はねばならぬ。由來足利の地は多彩多色なる文化を以つて世に聞えてゐる。勤王の志士、足利學校、美術建築物等之を調査するだけでも容易の努力ではなかつたことゝ信ずる。況して敎育の資料として編纂の運びに至る迄の苦勞は實に察するに余りある。本書を繙くものは宜しく此の意を体して精勵怠らず、學校が生徒諸子に期待する所に副はんとする覺悟がなければならぬ。乞はるゝ儘に一文をものして以つて序とする次第である。

昭和九年十月二十七日　　栃木縣學務部長　菊地角馬

序文

嘗ては藝文發祥の學都足利より今や市況旺盛の煙都足利に至るまで約千年に垂んたる歷史變遷を有するが故に我が大足利市及其の附近は研究するには幾多豐富なる文獻史蹟のあるあり又は市勢の意義深き躍進を考察するに於ても全國稀に見る鄉土研究の好地とも謂つべき處である

抑も敎育は即生活であり生活は即敎育であると云へるが如く敎育は生活の指導であり生活を離れて敎育はない生活は土地を離れて存せず土地は即ち鄉土愛の根柢であり鄉土愛は即ち愛國心の根源である

即今教育實際に於ける一革新として教育の鄕土化社會化地方化實際化等を高調せらるるにあたり玆に此の鄕土教授資料第二輯を發行する所以のものは生徒をして鄕土環境のもつ文化現象自然現象を調査せしめ正しき鄕土觀の認識を深め愛鄕心を養成せしめたき微意からである

もとより鄕土教育の意圖は單なる鄕土を知るのみのものでなく偏狹なる愛鄕心をそそる爲のものでもない教育の最も徹底した大乘的具像をこの教育の姿の中に顯現せしめたいと念願するものである

本輯は本校鄕土教育研究の紀要にして鄕土の文化的社會的歷史的地理的理學的各要素を鄕土科學としての觀點に綜合し調査研究

せるもので教師生徒の共同勞作によるものである

時正に昭和第九年の秋　天皇陛下には兩毛の野に大演習を御統監せらるるにあたり特に本市に　聖駕を駐蹕遊ばされ親しく民情をみそなはせ給ふ宏大無邊の皇恩に吾人は感激措くあたはざる處である

この佳き秋に際し本誌を上梓し得たるは誠に以て意義深きものであると信じ聊か教育報國の一端ともならは幸甚である

昭和九年十一月

栃木縣立足利中學校長　黑澤正三郎

和名類聚鈔

下野（之毛豆介乃）國・國府在都賀郡行程上三十四日下十七日

菅九（田三万百五十五町八段四歩正公各三十万束本穎百八万六千九百三十五束雜穎三十八万六千九百三十五束）

足利（阿志加々）梁田（夜奈多）安蘇

都賀（國府）寒川（佐無加波）河内

芳賀（波加）鹽屋（之保乃夜）那須

鄉土教授資料

目次

題字……奈良陸軍大將

題字……萱場栃木縣知事

口繪（寫眞）

募化修放生會碑——龜か淵架橋碑——鶴山先生吉野君之碑——
兩社神明宮之碑——近藤兵助芳寛墓——背山老人碑陰記——
小佐野氏句碑——瀚齊鈴木先生墓銘——鈴木敬哉之碑——
默庵古志君墓碣銘——詠櫻花歌之碑——足利二重坂路記——
梁田郡俠民碑——瀬北翁之遺詩——柳糸句碑——
山下允升之碑——草雲畫伯田崎君之碑——阿部茶村之碑——
春畦居士詩碑——

序文……菊地學務部長
序文……黑澤足利中學校長
我等の鄉土……上野一二……〔一〕
碑文集……大菅文治・同町暢夫・大島伊勢松・若月芳夫……〔二七〕
地質學的觀點より見たる足尾山塊附近の構造……井上重一……〔七三〕
足利地方の自然界……新田勸……〔二七〕
足利市火災報知機に就いて……小林保二・淺村菊次郎……〔一四九〕
足利と美術……吉田福一……〔一五九〕

我等の鄉土

歷史教室　上野一二

緒言
I 我が鄉勤王の士
一、贈正五位青木彥三郎先生について
二、鈴木家の勤王
II 鄉土の誇り足利學校
一、足利學校概觀
二、足利學校沿革
三、足利學校とは如何なる學校なりしか
四、足利學校について傳へ置きたきこと
1. 學規三章
2. 文化三年十一月の條

緒　言

郷土の偉人や傑士幾多郷土の歴史的事實に就ては、單なる過去の事實を話したり記憶させたりするに止まつてはならぬ、よく其の精神にまで喰ひ入つて考へて見なければならぬ。

まこと歴史は人間の血液であり、郷土に生命を與ふる原素であり、國家の精神的活動の源泉である。

燈臺下暗しといふ言葉の通り郷土の偉人や貴重な幾多の歴史的事實に對して、郷人は案外手を觸れぬものである。郷土に生命を與へ郷土愛の精神を鼓舞する上より、最も適切であり又最も大切なものである。

殊に我が郷土よりは幾多の勤王家を出してゐる。是等の志士の墓前には命日を期して香を手向けたい。然して我が國を生かした、君國に盡した永遠の生命に對して冥福を祈りたい。

又我が郷土には我が國最古而も唯一の足利學校がある。其の由來を知り内容を辨へ我等のこの學び舍に「かへりて建てり吾が學舍」を回想して、この精神を採り立派な人材の輩出に務めねばならぬ、茲に我が校の貴き使命が存在してゐるのである。

I 我が郷勤王の士

一、贈正五位青木彦三郎先生について

碧血錄にいふ、「春方君草莽の一布衣を以て皇室の式微を慨き、幕府の專横を憤つて尊攘の大義を唱へ、西岡邦之佐の假稱を以て筑峰の義軍に投じ、上州隊二百人の將として常總の野に轉戰し、時利あらずして雄圖敗れ、古河城内獄庭一滴の朝露と化す、其の刑に就くの前、指を咬んで懐紙に血書し、義擧の顚末を叙して戰爭始末大略書といふ。縷々三千字、讀去り讀來つて人をして思はず襟を正さしめ、更に其血字碧變の跡を看ては、頑夫懦夫をして省み羞ぢ且つ志を起さしむ。

報國丹心三尺劍　碧血五十三星霜　深夜叙到當年事　落月斗牛燦有光

碧血錄と題する所以也。

「血書文字年處を經て一部碧色に變じ、一部褐色となり一部は褪消して僅かに其の痕跡を留むるに過ぎざるも猶推讀に難からず」と吾々はこの殉難烈士の忠魂義魄、躍動せる遺血の中に脉絡相通ずる日本人の大精神を後世に傳へたい、との念願から本校郷土研究校外教授の日(昭和九年九月二十七日)を期して、山前の青木信三氏に手紙にて血書の撮影を是非願ひたき旨申し上げたところ、

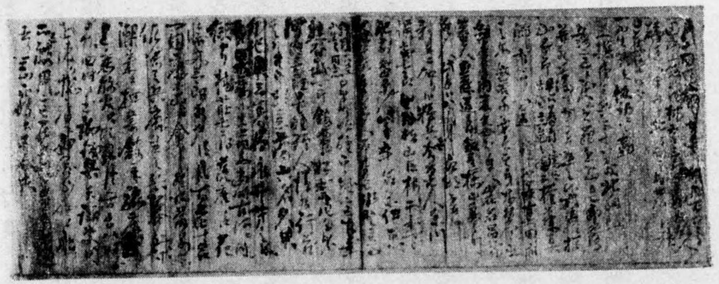
「御申越の故彦三郎翁血書の儀最早血痕微弱となり寫眞に撮影すること至極困難と察せられ候も御希望ならば當家に於て撮影せられても苦しからず候」云々との快諾を得左に掲ぐることを得たのである。

然し實物を拜見した時、寫眞屋も「これでは到底物になるまい、「殘念だ」と歎聲をもらした程であつたのに、案外よく撮れましたので實に嬉しかつた。

掲ぐる處のもの古河の藩獄に拘留せられた、元治元年(甲子)九月九日の夜から三十七日間在獄中に、愈々死期の迫れるを覺り、私に指を咬み鮮血淋漓而も獄中筆硯無きの故を以て揉紙を筆とし懐紙に書したるもの、あの頃の紙、變り果てた血色「此の一句を讀んで感憤せざるものは神州男兒に非らず」と言はるゝが、一目みた丈けで最早や田夫野人と雖もこの義烈に感動せざるものはあるまい。

血書の字句以外に特に寫眞版を載せたる意は實に茲に存する譯である。

一小生共素志者尊王攘夷之外他事無之尤贋日持久者必然瓦解之基本と申事洞察罷在候所事故是迄種々苦心百計相求め候得共時到らざる也何分にも衆心一致無之漸々瓦解之勢に成行終に者筑波山を引拂烈公神輿を小川館に遷し兵衆悉く府中小川玉造等に屯罷在候松平大炊頭殿當中納言殿之爲目代人數三千余人に而前八月上旬水城に繰込之刻御駕籠目懸奸黨ゟ炮發危難を御脱し夫より彌奸徒追討と御決定筑山勢へ加勢御頼相成藤田小四郎其外出陣數日大合戰終に大勝利に而岩船山を燒討引續那加湊を拔御殿並反車爐等に立籠り候奸徒悉敗走誠義勢滋々熾に相成候内追々幕兵相迫り候形勢に付一ト先波山勢ハ引揚一統評議之上除奸之事は大炊族に相讓り波山勢者一と先各目的之所へ押向ひ候決議



ニ而田丸稲之右衛門竹内百太郎田中愿藏林五郎三郎○其外千余人磯濱へ押出し北ニ向て出發し候積り○藤田小四郎小生共者假初にも勤王攘夷之兵に而空敷北向致し趣意に戻るの罪を恐れ外藩並水藩も少々者有之候大略櫻山三郎是

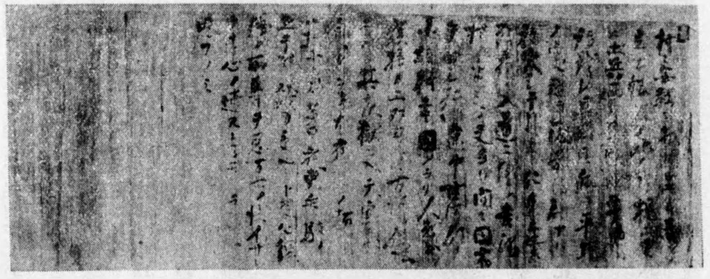
ハ幕府の儒臣吉野圭藏の嫡子權藤眞郷有馬の人なるべし確と不分明眞田範之介劍客千葉之高弟木村久之丞劍客ナリ内藤文七郎水人岩名昌藏幕人武藤道之助劍客横山良之助水人此手は八月中江都を發し新たに加り候精兵に而合百二十人餘川俣茂七郎出羽松山臣梅村新一郎肥前島原人此手五十名餘伊東益荒島原人百二十名水野主馬結城大夫小生と同志昌木晴雄宇都宮左衞門熊谷誠一郎舘林臣松本廉之介竹内三郎星野々人清水行藏其外宇都宮藩六名久貝外記奥三春臣永井芳之介是は水藩小生と同志當時古河に同獄なり林莊七郎薩摩臣花輪又三郎水戸臣凡百三四十名一同鹿嶋に會し候處最早佐倉之兵麻生之兵幕兵等潮來に押寄舘並旅店に至迄悉く放火す、頃者九月二日晝八時より夜四時に至誠義兵者評決川を渡り總房に押渡らんと船二三艘用意罷在候處水主共逃去り甚窮すなれ共

二、九月六日朝湖を渡り延方村に着す其勢は神武軍櫻山之手坤武軍西岡之手二百名計り跡勢渡らんと用意中麻生之方より四艘程迅風に帆を揚乍に押來右二軍へ向て炮發す二軍陸にて砲發す折しも湖水溢民家庭迄水押上り歩行甚困と雖も惣勢熾んに打立つ故舟一艘を奪ひ敵二三人を打取敵あたり難く引退き鹿嶋之大船津村なる湊に屯し候伊東川俣之軍へ打懸る陸よりは幕兵奸兵水陸共に責懸る身方之勢も防戰甚勉む、其中船を調へ延方に渡る梅村新一郎討死す、潮來之寺に勢を集め猶川渡南發を議し船を調然るに水手なく渡べからず其節は牛堀村に引移糗を用ひ夜に入る故籌を曉夜半に決議し惣勢悉陸行に而小川より片倉府中

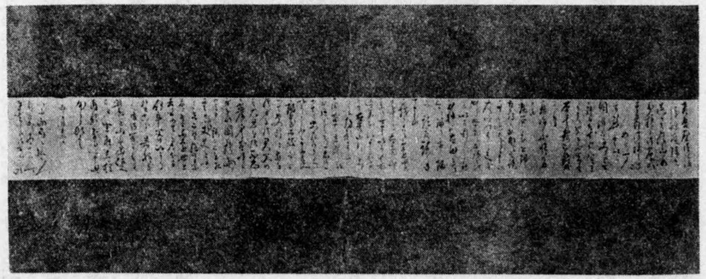
波山麓を越し絹川を渡り武州へ押出さんとす然るに暗夜の事郷導を失ひ伊東の手は先んじ進み小生の手は前後を見合せ候中に皆紛擾し櫻山の手も麻生之邊にて後れ纔に殘兵百人に不滿最早夜も明け候處土兵共鐘をつき立候故追々群集し炮打懸ける身方防戰麻生も不尾擊引上げ途中土兵追立々々片倉宿に至る夜四ツ時なり此所にて土兵を追ひ竹原宿に到着す、惣而此邊り誠議士之宿等を致す民屋打毀ち又放火し且又幕命にて男子は不殘竹槍等を持所々に屯し稼穡の事等は更に顧ることあたはず實に憐むべきの甚きなり、總而小川館玉造館潮來館等烈公御取立之館ニ不殘放火す其他誠議に加はり候民屋不殘左之通りなり水藩は最甚敷よしなり七日朝竹原宿發し府中へ來る途中土兵悉相集る依而應接す斗雖も炮發す故に身方苦

戰す敵前へは二三段に備へ前後左右敵數千前なる土兵散亂す跡より百目の野戰筒を打立何方兵共不知數千人槍を揃突懸る身方苦戰乍に突破て大炮を奪取引續て府中口之兵を追立難無く府中を通り市川へ至り休す、其時府中之兵逃

て志筑に入り志筑も動搖の樣子なり時に暴雨あり土田村より一の矢村江押行途栗原村のへんにて土兵あり土浦の兵乎數十名打懸る身方手追其戰士少く殊に大雨にて炮難用其上川を越し藥を濕し纔に一人之炮手竹内左門打たり依而死を決し兵器を捨苦戰敵長く不尾擊其夜水海道へ來り舟にて渡り飯沼弘敎寺にて粮を遣ふ、



村々金鼓を打立候に付寺を立出飯沼の北の方の堤にかゝる土兵雲集炮發槍にて迫る防戰し且闘且進て平塚之突越を渡前後敵なり放火して引上仁連邊悉く戰夜に入道に紛れ吉沼村の邊に至夫より間々田をさし行く途中古河領分小堤村にて固めより人數出て應接の上双刀のまゝ古河役所に至る、其夜獄に入て空敷臭名を殘尤應接の趣意拙等赤心幕府吏辯駁の上にて斧鉞を受べしと決心縲絏之耻辱を忍び万世の後いさゝか赤心の達せん事もあらんやと思ふのみ



次に同志青木九祐に贈りし一書に曰く

拜啓愈御清勝珍慶陳者過日は推參毎度種々御厚情其節御談事之人物今に一

人も着到無之いよ〳〵因循にて夫に而も宜强而すゝめ候事に而は決て不宜候間否貴報被仰越可被下候

一鐵ぼう慥に相屆き申候

一粕谷之儀を歸り相尋候處外にも談事之上などゝ申は大いつはりにて全だしぬけに右樣之次第いかにも〳〵不埒至極に候太田へ參り今に歸り不申歸候はゝ屹度談事可申候

一我々共も不遠四五日中には太平山へ參り可申いかにも取込委細得貴意兼候間太平山引上げの後拜顏可申候

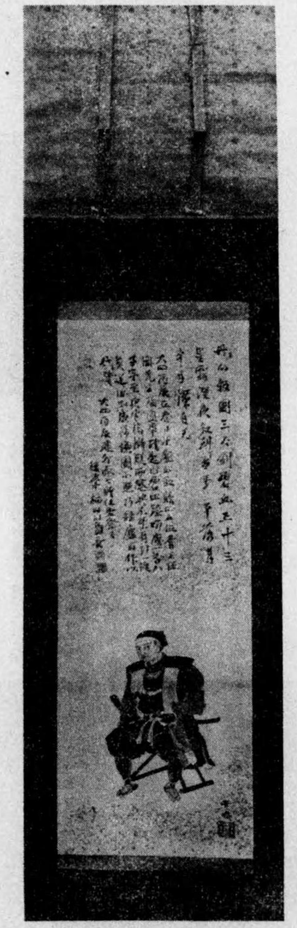
一同苗大立腹之段至極尤之儀に者候しかし小生も決心罷在候上はいかよふ被申候共決而歸宅等致し不申候間小生決斷は家を捨身を捨君父の大恩を捨不忠不孝之身と成唯々身を以國難に當り候と申趣意を相貫き死後に丈夫と呼れ候こそ拙の素志に候間不遠世を去り候小生之身に候間何卒父のいかり暫くこらへ呉候樣幾重にも御宥可被下候

此趣意小嶋伯父方へも宜敷賴上候猶拜顏万々可申述候

五月二十二日

二白當局も追々人數相加り夫々さかんに相なり申候御安心可被下候　以上

匆々頓首



青木彦三郎肖像及詩

血書といひ、書簡といひ一に憂國の大文字假令縲絏の辱を受くるも甘んじて一身一家を犧牲として顧みず、明治維新回天の大業はかゝる幾多の同志の赤心の結合に依つてなつたもので、この精神こそは誠に我が大和魂の結晶である。

聖德六合に洽く大正四年十一月十日登極大典の日畏くも故青木彦三郎先生御贈位の恩命に接した。在天の靈並に遺族は天恩に感泣、國民等しく天日の光りを仰き奉つた誠に畏こき極みである。

終りに一言して置きたいことは青木先生の平日耽讀の書は大日本史と日本紀であつたことである。

玆に想ひ起すべきことは符節を合せたるが如き京都の氣分空氣である。

後土御門天皇(一〇三代)の御時「日本紀」の研究が始められたこと、公卿一條兼良は其の時代に於ける第一流の學者であるが、この博學の士を召して日本紀の講義をなさしめ親王、攝政、公卿百官悉く陪聽を仰せられたこと。

次に式微の時代後奈良天皇(一〇四代)の御時には吉田兼右をして同じく日本紀の講義を申し上げたこと而して日本の國体の眞相を知りこの京都の氣分が次第に地方に傳へられたこと。

更に五條宣賢が日本紀の研究を地方に傳へた最も功ある人であるが、かゝる事で大名も初めて日本の國体を知つたのである。そこでよく我が國体を知る樣になつて初めて國体を重んずる樣になり、式微の極にあつた皇室に對し奉り費用を献ずる樣になり伊勢大神宮の改築の費用を献ずるとか凡て之れ日本紀の研究の結果が齎らしたのである。これ元より我が國体の精華ではあるが、水戸藩の大日本史、青木先生の日本紀研究、京都の日本紀の研究等脈絡相通ずる日本精神の研究がよく維新回天の大業を成就せしめたることを想へば國史を教授するの任にあたるものその責任の重且大なること〻至誠奉公戮力協心殊に鄕土の殉難烈士の遺德を偲び且つはこの光輝ある榮譽を吾等鄕土人として益々發揚することに務めねばならぬ。

附　記（附記事項は福田字松庵氏の研究によるもの記して以て謝意を表す）

茨城縣古河町の本城寺墓域に

「水戸藩　故永井芳之助外四名假埋葬之迹

翠　洞　書

水戸藩元治甲子の變に方り永井芳之助道正は正義派に屬し那阿港に在りしが更に四方同志の士を糾合せんと欲し下總國葛飾郡小堤村に至り、古河藩警固の士の捕ふる所となり、幕府の命を以て刑場合野屋に於て斬られ此處に埋葬せらる。當長久山の過去帳に竟順、因究、消全、了善、光安各靈とあるは即ち其一行にして實に元治元年十月十六日なり、後水戸の地に改葬せられ聖恩枯骨に及び勤王の士を以て、許されたるも、尚追憶に禁へざるものあり、茲に古河史績保存會の斡旋に依りて、此碑を建つ。

昭和八年十月十六日

女　弘　川　冬
孫　永　井　一　郎
甥　永　井　道　明
外　親　族　一　同

なる、石標ある處は即ち青木兄弟を埋髪せる處、其五名中明治三年永井外一名は水戸市に改葬せられたるも、他の三名はまだ、改葬の儀をとらせざるものと思はれるが、然れば即青木兄弟埋骨の迹にして而かも其青木兄弟のこと其碑面に明記なきを以て或は其堙滅に至らんことを恐るゝのである。

苅谷三郎先生

鈴木敬哉先生

峯岸園子刀自

我等の郷土

二、鈴木家の勤王

長沼牛翁―鈴木千里（翰齊）―
- 敬哉
- 姉（三郎氏姉ニテ辻文次郎氏母堂）
- 鈴木三郎（苅谷無隱居士）―鈴木一男
  - 弘化元年足利ニ生レ明治四十三年三月五日逝ク。京都相國寺ニ葬ル。足利德正寺ニ分骨シテ葬ル。元治元年尊王攘夷ノ論沸騰スルニ及ビ藤田小四郎等ト國事ニ奔走。大正七年十一月贈從五位。
- 峯岸その（現在足利に存命）

牛翁ノ七子幼ヨリ慧才同藩ノ士鈴木氏ノ嗣子トナル。暨ヲ學ビテ藩暨トナル。嘉永、安政ノ國論擾沸ノ際ハ尊王ノ旗色ヲ鮮明ニス。水藩ノ志士藤田小四郎等ト通ズ。時ニ幕府ノ忌憚スル處トナリ、江戸追放更ニ足利ニ來ル。安政六年七月五日歿ス本城三丁目德正寺ニ葬ル。大正十三年二月十一日贈從五位。

德正寺の門前の花崗岩に刻まれてある、

「此寺に勤王の志士刈谷無隱居士の墓あり」

幾回も通つたのに氣が付かなかつたと屢々聞く言葉である。一度氣が付いた以上は國民としての勤王の士に對する、まごゝろを表はして貰ひたい。

以下の記錄は先年我が校に於て郷土展覽會を開いた折小生親しく峯岸その子刀自の謦咳に接し鈴木家勤王に關する事實を聞き、それを同展覽會に於て講演せしものを今回原稿を補正したものであります。何分にも當時(三年前)八十三歳の高齡に達してをられたので耳が遠く、こちらからは餘程大きな聲でないと通じませんのと、それに仲々速口に申されますので書きおとした點も多くありませうが以下書き綴ります。

園子刀自は昔ながらの女丈夫其のものゝ如き凛とした姿、徐ろに口を開いて、曰く、

「千里の父牛翁から申しませう」と

「牛翁がそも〳〵勤王の初めである、牛翁は米澤長井町の者で長沼牛翁と稱した。牛翁は蘭學を修め蘭醫となる。そして諸國を歩いて、當時勤王の士を訪ふ。其の志を繼いで父の千里が勤王の爲めに盡したのである。

父の千里は米澤藩の鈴木氏に養子となり、鈴木を名乘る。夫れより米澤侯の命に依り江戸に出でたのである。處が米澤侯の江戸の屋敷と長州侯の屋敷とが隣り合つて居た。そういふ譯で長州侯に父の千里は厚く知遇を受けた。かういふ關係から江戸表で勤王の士を集めては樣々の謀をしたのである。處がその事が次第に世に知れたので父千里が將軍樣から江戸拂をさせられた。

それで長州侯が心配をして足利侯即ち戸田長門守へ依頼して呉れたのである。

何しろ長州は大藩でありますから依頼通りになつた。之が足利へ落付く緣である。そして足利藩の客分となる。そこで是から窃かに足利の地で勤王の士と往復して語らうことになつたものである。

然しまだ此の地方では、かゝる事に目を附けなかつた。そこで蘭學者であつたから漢學の先生とか、國學の先生とか稱して、五六人位づゝ玄關に書生が居たものです。全くこの邊では一向に勤王の事などに心をとゞめる者がなかつたのである。

かゝる間に父は私の十才の時亡くなつて仕舞つたのです。

それから兄の鈴木敬哉が後をとつた。而し此頃となつては世の中が愈々騷がしくなりまして、どうしてもこの儘にしては居られぬとて、勤王の士と往復しては畫策する事となる。かゝる關係から私が十三の五月十七日に羽生の代官に呼ばれた。」

話がこゝまで來ると如何にも感慨深げに何とも言はれぬ面持となる。自分も遂に其の感に誘はれて感激の涙が出ました。

しばらくすると、この事は後で述べませうとて次の事に話頭を轉じた。

「其の中に田中愿藏（水戸の醫者にして栃木の燒打ちをした人）藤田小四郎等もやつて來て、何時までも、かうして忍んでばかり居られぬ。日本中の人等は此の際天子樣の御爲めに一命を捨てねばならぬ。それには兄(敬哉)は殘つて弟たる三郎は出して呉れまいかと申した。(田中、藤田）二人の兄（敬哉、三郎）の申すには私等は豫て承知して居る事故、何卒母に話して呉れといふ。すると藤田と田中の二人は母の前に來て「誠に言ひにくけれど、國家の爲めに三郎の命を呉れてくれ」と言ふと、母は元より覺悟の上である。「國家の爲め殺して呉れ」と、窃かに水盃を取かはして、皆さんと三郎とが出て行つた、而して此の兄は此の地方の連絡係として家に殘る事となつた。

かゝる間に筑波山事件が起つた。もうこの頃は大分騷がしくなつて來て、軍用金の如きも、どし〳〵集める樣になつて來た。それから栃木は足利戸田の領地で陣屋等もあつた。そこで栃木へ行つて、勤王軍へ參加する樣にと相談をする。時勢を

知らぬ連中であるから中々應ぜぬ。そこで火をかけて栃木を燒いたのである。この火事を愿藏火事といつた。すると栃木の陣屋から足利の戸田の屋敷へ知らせが來た。それで戸田家の客分となつてゐた兄の敬哉が軍醫として召集された。それで兄も栃木へ出軍した。こゝにあるのはその時の藥籠箱である。とてそれを指さした。「この頃はまた鎧甲にて繰出したのである」と一句一語當時を躍動せしめる。「處が兄の敬哉は弟の三郎がこの火事(愿藏火事)に加はつてゐた事が明らかとなつたので牢屋に入れられる事となつた。

實は打首といふ事になつたのに、此時戸田家の家老川上才助といふものあり。非常な俊才であつたから已に王政復古の事なども承知してゐたとのことである。夫故に戸田家に色々と進言をした。今敬哉を打首にするよりも一ヶ年の閉門にする方が宜しい。すると勤王側の樣子も分かるし、却つて其の方が都合がよい。兎角打首にする事は利益にならぬから、閉門が宜しいと、(即ち謹慎させること)諄々と說いたから、その通りとなる。栃木の事件が鎭まつても兄の敬哉が中々歸つて來ない。それで今の伊勢町の處へ見に出た。しばらくすると敬哉兄は罪人の乘る籠に乘つて歸つて來た。それで私と妹とは非常に驚いて急ぎ家へ歸り、母にこの事を告げると、

母はそんな事はあたり前だ、敬哉も定めし喜んでゐる事であらう、と涙一つ出さぬ。

夫れから私は毎日握り飯を運んでやつた。夫れからといふものは段々と取締りが嚴重になり、遂に私の家には家宅搜索にやつて來るといふ始末。すると母は私の家は上杉藩で、この足利には客分である。夫故上杉の方からならば兎に角、足利藩からでは家宅搜索は受けぬと、きつぱりことわつた。左樣な譯で母に威張られて、家宅搜索のことはとう〳〵止めとなる。それだからこの時分といふものは、明けても暮れても安い心とてはなかつたのである。

それから一ヶ年の禁錮(兄敬哉)が明けると、所追放となる。ところが足利は小さな藩で、江川は他の領分であるから、それまで行けば夫れで宜しいのであつた。

江川の名主に齋藤源十郎といふ者がある。此人は別に勤王家といふ程の人でもないが、男氣の人であつたので此人のおかげで江川に住む事になつた。すると德川の方からは岡引を江川に住み込ませて、その動靜を窺ふといふ有樣であつた。處が神のお助けといふものか、その岡引の妻が私共の籠昇の娘であつた。夫故に將軍家からの一々の事が皆手に取る如くに通知される事になつた。夫だから勤王家の往復が自由となつたのである。かゝる間に大切な母が亡くなつたのです。

夫れから新田義貞の後裔と稱する上野の新田滿次郎を大將として一族擧げんと勤王の士五百余人が前橋城を取つて戰はうとする事になつた。處が新田の家來は之は大變だ。そんな事をすると、殿樣がつぶれて仕舞ふといつて、將軍家へ密告した。かゝる譯であつたから、寄り集まつた五百余人の者共も一時散つて改めて集まる事になつた。

兄の敬哉は私を呼んで、こゝではだめだから江戸へ行く。私の事は一切誰にも告げるな。と、すぐ馬に乘つて江戸に出發した。そして三田の薩州の浪人の群に入る。すると將軍家の方から打手が向ふ。その時兄は馬を乘りつぶしたのであつた。

私は羽生の代官所に召出されて吟味される。それはとても殘忍極まるやり方で、丸石の上に座らせ水を飲ませ、せめ道具でせめる。二人の兄の行衞を……

私は豫てから天子樣の爲めに殺されるのを名譽と心得て居たので、始めから殺される事と覺悟をしてゐた。私は兄等は決して私共には何事も申しませんと堅く口を閉ぢた。かくの如く毎日、毎日石ぜめをされたのです。すると江川村の齋藤源十郎氏が仁さん(その子刀自の幼名)は可愛想だ、病氣だからとて、自分が代つてやつてやると、それからは源十郎氏の事は少しもせめなかつた。私はそれから江川の家をたゝみ東京の本所相生町に牧野と申す旗本あり、この奥へ御奉公する事となり、そこで御一新を待つて居たのである。」

大變疲勞をした御樣子でした。この邊にしませうとて止められた。

苅谷三郎先生について

前に妹の峯岸園子刀自の述べたる如く種々なる苦心の後江戸に入り勤王の事に盡したのであるが、何しろ幕府は之等正義の士を搜査すること甚だ密にして逮捕に之れ努めたので備さに艱難辛苦を嘗め、竊かに同志を糾合し目的を貫徹せんが爲めに流離困憊東走西奔尊王の大義を論じ臣子の本分を述べ粉骨碎身、奉公の誠を致し死生の間を往來すること四年、已にして幕府も時勢の趣く處を察し政權を朝廷に奉還し玆に王政維新の大業の大目的を達成する事を得たのである。

明治四十三年元旦次の一詩を賦す。

病体初輕神氣新　又迎六十七年春
君恩江海深何比　我亦聖朝一介臣

同年三月五日溘焉として逝く。京都相國寺に葬る。同年五月その分骨を本市本城三丁目なる德正寺に葬る。

大正七年十一月本縣下に於て曠古の大演習を行はせられ　天皇親しく御統裁遊ばされ給ふや苅谷三郎に對し維新の際に於ける勳功を聞召され特旨を以て、從五位を追贈せらる。天恩優渥枯骨に及ぶ勤王の勳績愈々明かに奉公の至誠玆に彰はる。地下の英靈正に冥すべきである。

II 郷土の誇り足利學校

一、足利學校概觀

大正十一年五月史蹟に指定された足利學校趾は昌平町にある。通一丁目から「足利學校遺蹟」の碑が目標となる。そこを眞直に通ると肉太に、

「史蹟　足利學校趾　內務省」の標柱がある。すぐそこが外門で(靈星門といふ)「入德」の扁額がある。德川齊順(紀伊大納言)の筆である。

次の中門には「學校」の扁額があり明人蔣龍溪の書である。

其の門內に入ると左方に遺蹟圖書館がある。大正四年十一月御即位大禮紀念事業として設立せられたもので吾等の常に利用してゐるもの。現在三万冊の多數の書籍を有し、足利人の知識の庫である。

圖書館に續いて足利學校舊藏の書冊古文書等を保存する庫がある。其の一隅に一部の由緒深き貴重書がガラス戸を通して參觀することが出來る。庭の東邊隣りに明治六年の創立にかゝる小學校がある。元足利學校の境域であつた。この學校にあやかつて建てられたものであらう。聖廟に向ふときに目につくのは一本の松の木である。三代目とのことだが所謂「字降松(カナフリマツ)」でこの學校の最も盛大であつた九華庠主時代に學生が難かしい文字があると紙に書いてこの松の枝につるして置く。すると庠主が其の解を傍に書いてやる。かうした勉强の方法もやつたといふ。事の眞疑は兎に角當時を偲ぶ材料である。次の四足の廟門は杏壇門で「杏壇」の額がある。德川慶勝(尾張大納言)の筆である。

この門內が聖廟で「大成殿」の扁額が掲げられてある。尊超法親王(智恩院ノ宮)の筆に成る。

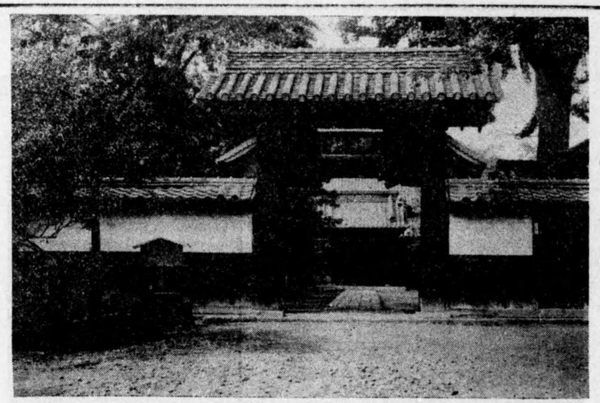
聖廟内に入ると其の正面に孔子の座像がある。此の像は漢土傳來のものと傳稱されてゐるが、「天文三年正月甲申之日初刻之明四年秋八月上丁忌畢矣」とあるから四百年前の作であることがわかる、右手に何か物を執つてゐる形である。「羽扇を持ちたる姿なり」と掲載の寫眞（現足利學校所有）は蓋し其の眞を語るものであらう。像の左右に、顏、曾、思、孟の神儀あり其の右側に（向つて）小野篁の衣冠束帶の座像が祀られてある。之等孔子像、篁像及顏、曾、思、孟の四子の木主を安置し並に杏壇、入德、學校の額を掲げたるは第十三代傳英庠主時代寛文八年（一六六八）である。尙廟内

孔子の像

谷文晁聖像（二十六頁參照）

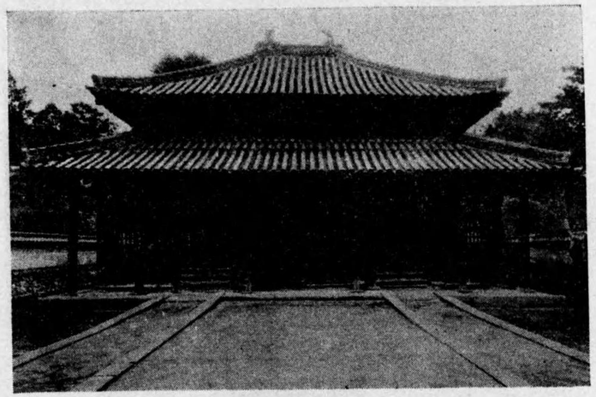
にある器として簠、簋、籩、豆、俎、罇罍、象罇、犧罍等の祭器がある。七絃琴は一名仲尼琴ともいひ朱舜水の遺物で人見竹洞の寄進にかゝるもの、瑪瑙の琴台は人見竹洞の愛藏のものなりしを其の子泝の寄贈せしものなり。樂器の最初のものとして十二律がある。

釋奠は德川時代に盛に行はれたが其の後中絶の姿であつたが明治十四年より十二月冬至の日に執行しつゝありしに大正四年より十二月二十三日に改む。明治四十一年以後町祭として（大正十年市制施行後は市祭）この日は名士の講演がある。この學校を偲ぶよすがともなる。聖廟の裏には庠主の墓石がある。

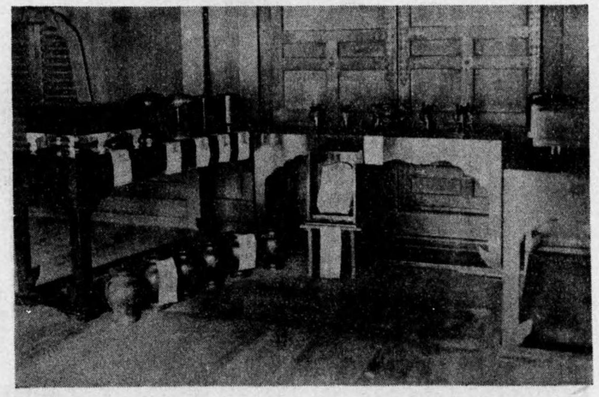


足利學校中門

杏壇門



聖　廟



釋典祭用器

二、足利學校沿革

(1) 創設者

足利學校の創設に就ては古來幾多の文献、多くの學者に依りて種々の説をなすものあれど、未だ定説を聞かず。されど小野篁が講書の地としての因縁を以てこの地に學校の基礎をなせるもので、もとより此の時已に學校としての存在ではなかつたのであらうが、篁は文章博士であり、參議の高き位にあり、當世無双の大學者でありしことを思へば、篁の奥州下向の折〔承和九年六月爲陸奥太守秋八月入拜東宮學士。(文德實錄)とありて篁が陸奥守となりて下向の途中足利驛を通過せしこと之は京都よりの通路として必らず疑ひを容るゝ餘地なからむ〕當足利驛にて講書の事ありしことも想像せらるべく、又此事あらば之を記念する爲めに又何事か後世に殘されるものがありとせば、學問に關係づけられる事即ち足利學校の搖籃が茲に胚胎したものと考へられるのである。

小野篁

聖廟の中央孔子の座像の右に篁の像がある。吾々はかうした意味に於てこの像を拜したい。

(2) 位　置

足利學校の現在の位置、昌平町は應仁元年(一二二七)足利庄の領主長尾景人に依つて舊地から移轉せられたもので、其の

理由とするところは「渡良瀬川の洪水を避くる爲めと一つには勧農城下の兵禍を避くる爲めなり」と、然らば舊位置は何處といふに現足利市東南の方向にあたる「岩井村(現毛野村となる)に字「學校地先」といふ所あり今は大かた渡良瀬川敷となりたれど折々布目附たる瓦を掘出す事あり古へ學校のありし地なりと傳へたり。しかるを洪水川缺の爲めに今の地に移したるものと見ゆ」云云と(川上廣樹著足利學校事蹟考)右は足利興廢記にある記事を引用しての論である。蓋し信憑すべきものであらう。

三、足利學校とは如何なる學校なりしか

足利學校創設より第一代庠主快元以前即ち上杉憲實再興以前に就きては學校の內容に關して詳細に徵すべきものがない。勿論其後でも學校の盛衰に伴うて消長隆替は免れないが、記錄によりて知る得るのである。

歷代庠主が僧侶であることから考ふれば佛敎の敎育を爲したかに見られるが、しからず、全く儒敎の敎育に始終したのである。當時の學問を有するもの亦僧侶を措きて他に求め得なかつたのであらう。

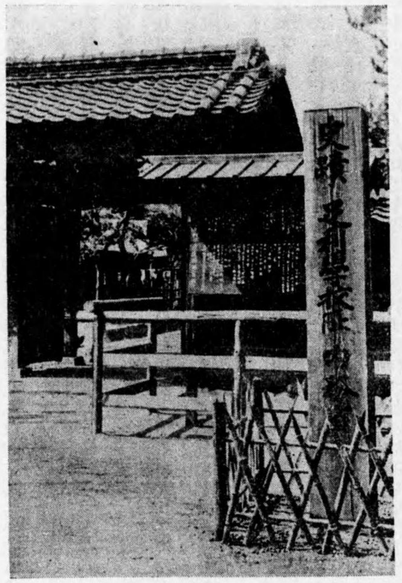
かくて上杉憲實が足利庄管理者(永享十一年二〇九九)となるや、足利學校の復興に着手して先づ學田を寄附し、經書の寄進をなし、而して碩學快元を鎌倉圓覺寺より迎へて第一代の庠主とし學徒を敎授せしめたのである。鎌倉大草紙卷下に次の記事がある。

「此の度(永享十一年)安房守(憲實)公方御名字がけの地なればとて學校領を寄進して彌々書籍を納め學徒をれんみんす。されば此の頃諸國大に亂れ學道も絕えたりしかば此所日本一所の學校となる。是れよりなほ以て上杉安房守憲實を諸國の人もほめざるはなし。西國北國より學徒悉く集る。」と、上杉憲實の活眼識見を伺ふことが出來る。

次に庠主二十三代中特に傑出した而も學校を盛大ならしめたるは第七代の九華(大隅の人)である、庠主として三十年、全くこの學校をもつて生命とし、殊に易に於ては他に比儔を見ずといふ當時の博學多識學校の隆盛古今に比なく學徒集まるもの三千と號した。北條氏政が金澤文庫本を寄進したのも此の時である。

第九代の庠主元佶(肥前の人)三要と號す。易を以て名あり。德川家康に仕へ家康より朱丸に學の旗指物を賜はる。かゝるを關係より、家康は二百餘部の書籍と數十万顆の木製活字並に學田を寄附し廟宇を修理せしめた。

かくの如く二十三代の庠主に依つて學校は經營せられた譯であるが此の當時敎授せる學科は經學、醫學、易及び兵學であつた。坂東の綜合大學として面目を施するに至り、就中第七代九華庠主の時代が最も隆盛で、而も歐洲人にまでも其の有樣が知られたのである。



入德門

歐洲人がこの足利學校を稱せりと。眞に其の意を得たりといふべきである。

要するに足利學校は參議小野篁の講書の地としてより、其の後の史實明らかならざりしも上杉憲實の再興に依りて、名實共に備はり學校として大

四、足利學校につきて傳へ置きたきこと

1. 學規三章

一、論語孟子を先とし、詩書を修め、それより、歴史に渉り人倫日用を本領とし候其の餘博覽詞章藝事の類其才力に隨ひ專可心懸事。

一、德行を本として、才藝を務無用を省候事。

一、平正親切を宗として奇僻を戒め惣て不可求捷徑事。

實に立派な學規である「人倫日用を本領とし候」と人倫と日用を本領とするあたり學校の面目躍如たるものがある。「日用を本領」とは蓋し頃日盛に用ひられる教育の實際化に非らざるなきか。この當時已に教育を實學としての本領を發揮せしめたのである。

次には「德行を本とし」とこれもとより其の處なりといへども、而して「才藝を務めよ」と何といふ名言であらう、殊にこの地方の現今の教育にもこの「德行を本として才藝を務むる」信條こそ最も緊喫事であると信ずる。徒らに才智にのみに走つた輕薄才士の輩では重大な責任を負擔する國民として誠に心細い感じがする。この條項を我が學校に十分活かしたい。

最後の「不可求捷徑事」世の中が忙はしくなればなる程「急がば廻れ」といふ立派な教訓が失はれる樣に思はれてならぬ。あまり早廻りばかり考へて足が浮き立つてゐる樣では立派な教育は出來ぬ。幾度も幾度も繰り返し繰り返し然して決して速路をせぬ處に眞の教育が存在してゐるのではあるまいか。かくては日暮れて途遠しと歎ぜられるかも知れぬが、力强く大地を踏みしめして一歩一歩急がず、あせらず、確實に歩ませたい。速効肥料式でなく「不可求捷徑事」蓋し現今教育の欠陷を補ふ鐵案ではあるまいか。

2. 文化三年十一月の條

「足利郡内學校領の分家數四十七軒、四十七軒の内十二軒は勝手方相勤め殘る三十五軒にて御聖堂並に御書物倉火の番四人つゝ順番にてつめきり相勤め風烈しきの節は增人差出し出火の節は例へ私共宅類燒仕り候とも右には相係らず右御聖堂並御書物倉火消人足相勤め」云々と誠に貴い文字である、かうした力が足利學校の貴重書が保存せられ學校の名をなさしむるの根本であつた事を十分に辨へなければならぬ。殊に「例へ私共宅類燒仕り候とも右には相係らず」云々と何といふ貴い大きな文字でせう。我が足利の住民にはかうした公に奉ずるといふ、尊い精神、犧牲的精神を持つてゐた事が發見された譯である。何といふ愉快な、そして力强い事であらう。我々の間にも亦この血液が流れてゐる筈であると自ら悟り、自ら目覺める時我々は大きな國民としての誇りを感ずるのである。

青葉廟光り輝く朝の雨　北泉
聖廟や梅の老木もなほ若き　松堂
三代の字降松や文のあと　三耕
聖廟や字降松の伸びの樣　香州
五月雨に入德門は烟りけり　字降庵
右とれは細雨に烟る杏壇門　溪水
學苑も古りて四邊の茂りかな　二水
時雨るるや御眼鋭く孔子像　木鯨
聖廟や若葉明るき石甃　百花

杏壇や青き滴る朝の庭　溪水
秋雨の何を秘めてか杏壇門　松堂
下闇や庠主の墓碑の苔古りて　字降庵
おとなへは杏壇門や風薰る　二水
廟守の昔を語る日永かな　百花
杏壇に三千の弟子偲ひけり　三耕
學代々に杏壇門や松朧　木鯨
聖廟や門をとざせる日の麗　香州
炎天や敷石白き廟の庭　正木堂

谷文晁足利學校聖像圖解

谷文晁足利學校聖像之圖ハ寛政八丙辰年(文晁三十三歳)足利ニ來遊ノ際寫生セラレタルモノニシテ同時ニ揮毫セラレタル水墨山水ノ幅學校ニ保存セラレ今尚存ス

此幅谷家ニ傳來セシモノナラン余偶々之レヲ獲テ秘藏セシモノナリ今學校ニ寄附シ以テ永遠ニ傳フ

昭和八年五月

荻野萬太郎

難波潟田みのの島に舟よせて
うきね重ぬる五月雨の空

渡良瀬の川瀬の浪の音はかり
そこに流るる朝きらひ哉

玉ほこの道の長ちの柳原
末は綠の空につゝけり

山かけに咲くや室生の桃の花
風さへうとき盛をそ見る

梓弓おのか春邊の樺櫻
散るや矢はきの里の朝風

奥河内清香

碑文集

例言

一、本號碑文集は生徒の金石文研究の資料に充つべく、足利市及び其の附近の新古の石碑に就きて調査せるものなり。

一、本號碑文集は主として生徒の蒐集せる石碑石塔の碑文にして、考古的見地にのみはよらず國漢教授の參考に供すべきものを收錄せり。鰐口、鐘銘等は次號に讓れり。

一、碑文の句讀訓點字句の註釋は教授上の都合により之を省略せり。

一、拓本及び寫眞は校外教授の折に親しく指導し實際生徒の手拓撮影せしものなり。

一、碑文の排列順次はその碑石の建立年月に從へり。

一、本號碑文の編纂については丸山瓦全氏、山崎鳩堂氏其他有志諸賢の御教示と足利市史、大日本人名辭書等に據れり。

國漢教室
大菅文治
同町暢夫
大島伊勢松
若月芳夫

碑文集目次

募化修放生會碑（寛延二年）
東山松川君墓表（寛政八年）
龜か淵架橋碑（文化元年）
鶴山先生吉野君之碑（文政十年）
兩社神明宮之碑（文政十二年）
近藤兵助芳寛墓（弘化二年）
背山老人碑陰記（嘉永三年）
小佐野氏句碑（嘉永三年）
瀚齋鈴木先生墓銘（萬延元年）
勤王志士鈴木敬哉之碑（昭和五年）
默庵古志君墓碣銘（萬延元年）
詠櫻花歌之碑（明治四年）
足利開鑿二重坂路記（明治十一年）
下野國梁田郡俠民碑（明治十四年）
瀨北翁之遺詩（明治二十年）
下山先生之碑（明治二十六年）
揮描院瀨譽溫雅勝翁居士（明治二十七年）
柳糸句碑（明治二十八年）
借宿堤防碑（明治三十一年）
山下允升之碑（明治三十七年）
力士之碑（明治三十八年）
草雲畫伯田崎君之碑（明治四十二年）
阿部茶村之碑（大正元年）
贈正五位青木彦三郎之墓（大正九年）
春畦居士詩碑（大正九年）
追遠碑（大正十年）

募化修放生會碑

所在　足利郡山邊村縣社八幡宮

慶道上人

神宮寺廿一世中興法印權大僧都慶道上人は德川九代十代時代の住持にして八幡宮の別當職たり。當時八幡宮の衰運甚しく爲に上人は放生會の再興、拜殿の再建等に盡力し、その難局に不退轉の精進を示し、以て今日の盛觀を成せるものなり。上人は在世中明和八年に寶篋印塔を建立して直に墓石となしたり。其の墓石に刻せる文に曰く

于爰野州梁田郡八幡神宮寺第廿一世慶道上人者同國安蘇郡並木村須賀氏產也弱冠初能孝順父母雅染後切奉事師長神知天發解義無滯寛去溫和也不幾三十有六歲當院回祿地住殿堂拜殿無所殘造營其外世具法具全備了安永六年迄住職四十有二年世壽七十有七

募化修放生會碑

崇當社八幡宮者往昔準如于洛陽男山鎭座特源家尊重之勸請也年舊記取勒祭祀之取傳凡百六坊之供僧且三家之神職而其頃者年中月次之祭奠神事整然驗矣就中八月十六日祭禮并勤修放生會七社之舞樂其間二百九十餘年也中曁延文之頃祭祀寢廢故供僧神職徒存名耳然去延享元甲子年予竊詣社塔之日出覩金壹兩奉之山主原此一志再命企放生會予雖慙菲薄之資頻恭業弘濟之指示自勸同志之信侶更欲募化充其料則金兩積翌丑八月十六日年々神事進修之日放生會竝行益祭尊之莊規者有深淺則時運也雖然祭禮復古又幸哉希將來此祭會確乎無欠斷則神德光遠耀萬民快樂焉因爲後鑒銘石以垂不朽云

第千慶歡相繼　僧正見龍識

と。因に第子の大阿闍梨慶歡上人は慶道上人の意を繼ぎ、極力奔走專心社運の復興につとめ、鳥居の建設或は大門敷石の奉納に盡力せり。上人の教化亦深く信侶に及び、今に至り神宮寺の墓に參詣して諸願を祈るもの多し。

所在　足利學校聖廟構内

松川東山

松川世德は漢學の一青年學徒にして足利學校の興隆に盡力せしが享年卅二にして寛政六年二月學校内にて疾歿す

太田元貞

有名なる儒者にして名は元貞、字は公幹、錦城と號す、加賀大聖寺の人なり、幼より頴異

右

寛延二己巳歳十一月吉日足利本町

願主丸山相學謹立之

左

八幡宮廣前

別當　神宮寺慶道代

東山松川君墓表　加賀　太田元貞公幹文撰

君諱進脩字世德姓松川系出千葉介常胤葛西氏之據奥也世事之爲右族葛西氏亡不復仕隱其東山父名奉親字養哲君幼好學從鄕人岡充始授論孟古承及長貫綜典訓茹涵古今磨礱淬厲刳精鉢心雖然不屑童句慨然有大志以經綸爲己任年二十五始游江戸内謁惇師魁儒遍與之交與予最親厚後寓于弘文學舍方此時賢相當國剗祓姦

五歳にして字を識り十一にして詩を作り十三にして經史を講説せりと傳ふ。勵精刻苦終に大儒となる。その著述多し。文政八年四月江戸に於いて歿す。行年六十一。

回薦擢忠鯁國政秕荒芟鋤幾盡君躍然奮發日是曠世一時也上封事條陳當世要務退而俟者踰年不報乃去游平安周旋諸儒莫當其意遂歸故山羸服菲食不願豐侈寓情水石縱懷林壑高風雅韻輝暎鄕里雖然君惡遁戢不出銷聲幽藪耆貽中島希髣書問江戸近事蓋其憂國憫民雖在遐陬不少渝也君歸後有命禁弘文學徒非宋學者名曰異學於是正異之辨紛騰譁沸君聞之不悅投其門友某書爭之不報君於是憤然欲面辨之林祭酒矣其友岡本正成寓書之蓋以其事出於　朝旨非一介微生所得挽回也君是以不果來後小野秀中寓其家切劇閲歳勸其南游君乃再來江戸下帷城西聚徒教授無幾或告足利學校衰廢君傷之有意隆興乃與秀中及濱中咨詢偕造其地與其主祭者謀營爲計畫展力殫慮略爲端緒黌舍將脩絃誦將講會

疾不果寛政甲寅二月歿于足利學舍享年三十二病革君謂旁人曰死得葬于孔廟側學者之榮莫甚焉死亦奚憾談笑而逝於是秀中經理後事奉其遺意葬于郷校旁君爲人寛厚孝友稱於親串忠信顯於交遊坦衷高懷與物無忤喜酒自豪意濶如也不爲峭行偉節聳人視聽不爲小廉曲謹投俗耳目與人相與不修表襮無親疎誘之以善唯恐其不從蓋其悃愊發於至誠與之相對和氣可掬是故雖麁獷猾險不可誨者一再相見薫然心醉久而益愛敬君初爲學奉仁齋氏鑽研多年後遊兩都雖交諸儒聞其緒論未肯革其舊以從之其奉仁齋至死不變居恒語人曰學則與博而寡要寧約而有用文則與浮華而巧寧核實而拙行則與拘束而嚴刻寧閎肆而寛厚蓋其志如此倘天假之年其所造詣豈止此乎惜哉君所著有松隠閑話松隠詩草其於辭章舒

寫情性牢籠物態□意粉澤然其□爽之氣湧溢於行墨之間寸楮風發天眞爛熳可傳者亦不少云　寛政八年丙辰夏五月

所在　助戸新山町富士見橋畔

龜が淵架橋碑

僧　昭　惠

發願主昭惠は武州足立郡加納村の人にして此の地に駐錫し、龜ヶ淵の交通不便なるを遺憾として、架橋を發願し助戸新山の三十戸を初め近縣同志の淨財を募りて千年橋を竣工す。碑はその記念に建つるものなり。

夫物成者天乎物不成者亦天乎□□冬徒杠而通夏蓑衣而涉一度驟雨連日浸乎絶來往願衆人治橋之日已久矣僧昭惠□駐錫於龜淵乞丐於四方□年□致懸金以□造化之□□□一境三十家相暴悅相感荷拔山疊石穿巖爲徑一郷之人和以群近縣之人來助不招寄木不請進財□千人之力□□成矣地曰龜淵山曰松兵因橋名千年銘曰

百尺虹橋　出一鉢中　巖堤石路　千歳無窮

文化元年暮春　武州足立郡加納村

所在　足利市四宮町高德寺

吉野鶴山

鶴山は南總の人にして風骨奇特の儒者なり。其の子女滿子は孝女にして碑陰にも該文字あり。この碑の外に更に一基の墓石あり。文政十一年戊子二月廿日孝女吉野滿立の文字を刻す。吉野家は廢絶して碑石は空しく無緣壇にあり。

鵬齋老人

亀田鵬齋は江戸の儒者なり。名は長興、字は穉龍、鵬齋はその號、幼にして學を好み井上金峨につきて學ぶ。性豪放雄邁にして世儒を蔑視す。仕進の志を絶ち詩酒に放浪し晩年臨池の技を好み特に高雅なる草楷を善くす。越後の草聖良寛禪師と並稱せらる。文章また流暢にして歐蘇の風韵あり。文政九年三月歿す享年七十三。

發願主　僧昭惠

導師　定年禪寺大山叟

願主　新山三十家當郷中

補助

同　近縣同志家衆

植木知昭誌

鶴山先生吉野君之碑

吉野士考南總之産也幼年去國游於東都長而好遠游焉所到之地皆假人之廡下而居焉其爲人好書又能作字僦居所託足之地聚兒輩而授句讀而餬口有妻有子雖衣食不足常晏如也若倦其地則輙違而適它邦復借人之廡下出月租而集之不敢住着於一所猶蝸牛也然而非負殼而移歩之類也其不爲樂土所拘束者如此余素識其人某歳遇於某地其後余游上毛而遇之爾來十年而今茲己巳歳游於下毛足利而邂逅于此十數年之間轉移不停跡僑居如飄蓬實非直也人吾謂是非葛天無懷之民則几蘧居巢之民耶嘗自謂曰吾無爵無祿何必着心於居處隨便逞志而可也若死則吾埋其地而安焉耳

鵬齋老人興題幷書

（碑陰）

文政十丁亥年三月二十日卒享年五十有七

法諡　春山鶴翁信士

孝女滿子受業生若干　建之

所在　足利郡梁田村大字福富御厨神社

平田篤胤

和學者なり。氣吹廼舍と號す。鈴屋大人の著書を見て大に古學の志を起し、艱難流離のうちに研學大に努む。熱烈なる皇國主義を持す。天保十四年鄉里秋田に歸り九月病歿す。享年六十八明治十六年正四位を追贈せらる。

天照皇大神
豐受皇大神　兩社神明宮

この二柱の大御神の御神德の廣く大きに御坐すことは今更に云べくも非ず古は國々に御厨とて神領多かりしこと神鳳鈔また神領目錄なとを見て知べし即この處はしも同書ともに下野國に二宮築田御厨とありて絹布綿なと献れる御領にそ有ける故是を以て當昔より此兩社を勸請して神明宮と稱し今に築田十八箇村の總鎭守と稱し奉り來り此村を神明村と云ふこゝに村長なる岩井田甚五右衛福救い古の道に志深く其由を石文に記し建年と世に其事しるしてと請ふまゝにかく記せる時は文政十二年八月なり

平篤胤謹述

男平篤眞謹書

所在　足利市巴町法玄寺

詩佛老人

大窪詩佛名は行、字は天民、詩佛と號す。常陸の人にして江戸に居る詩を以て名を海内に馳せまた草書を善くす。畫も氣韻あり、好んで墨竹を畫く。市河寛齋、柏木如亭、菊池五山と併稱して江戸の四大詩家とす。性酒を嗜みて狂逸多し。天保八年歿す。享年七十。

大竹　培

足利を代表する書家なり。蕭塘と號す。別號を石舟、小舠といふ。寛政十二年足利郡助戸村に生る。植木金哉の子なり。幼より書道を好み、文化十二年江戸に出で朝川善庵の門に入り、後、卷菱湖に就きて研鑽を重ぬ。大竹彦五郎の養子となる。

日本

近藤兵助芳寛墓

大清道光九年　揚覺三書

此足利近藤舟助尊人壽藏之表也道光九年當文政十一年也揚覺三書妍美可愛也

詩佛老人大窪行題

(碑陰)

近藤翁諱芳寛号僊路稱兵助晩改七右衛門下毛州足利人也天資淳樸寧靜不喜浮華態獨者國風短謌居恒寄情於唫哦之間文政戊子欲營壽藏屬崎奥譯官使清人揚覺三題墓碣其襟懷如此豈與世之壽考貧生忌死者可同日而語哉翁以弘化二年乙巳七夕終于家齡七十有五塵魄

當時菱湖門下の双璧とし、澤雪城と并稱せらる。安政五年三月歿す。行事五十八。辭世の句に曰く、雨風はなくとも花は二三日。

於郷之法玄精舍浮屠追号曰善譽享調根忠居士頃者孤子舟助新立巨石以勒楊氏書更使余記其略蓋所以成翁之遺志而慰其神於九原也弘化丁未孟夏江都大橋順識

足利大竹培書

（窪世升鐫）

所在　足利市通七丁目　三寶院

大橋順藏

字は周道、訥庵と號す、志氣倜儻讀書を好み、博く經史詩文を涉獵せり。宇都宮戸田侯に仕ふ。勤王の志篤く王事に奔走す、文久二年幕吏に捕へられ下獄す。敕使大原重德東下して獄を解かれ、藩邸に幽せらる。偶々疫を患ひて歿す。文久二年七月なり。行年四十七。明治廿四年從四位を贈位せらる。

背山老人碑陰記

江都訥庵大橋順撰

背山老人姓大江魚住氏諱粲字玉妃號背山一號雉翳又稱黃雲其先伊勢人後遷於下毛世居足利紹云老人爲人瀟洒靖曠下知世有榮利事性酷嗜酒起居食息無時不酣醉又篤好繪事而山水殊精其得意者沈着老硬識者稱爲逸品園有一大松蒼髯欝々拏空凌霄老人愛護備至乃名其居曰松蔭稍間則推窓延翠影於几案筆硯在右盃盤在左且飲且寫凡峰巒之出沒雲煙之來去聚散必收諸縑素以養神可謂有右高士之風矣以嘉永己酉六月三日沒齡六十有三葬於郷之三寶院釋氏諡曰鑑譽德善居士嗚呼世之畫流事脂粉競巧緻以求媚於豪族者誰知老人之取造詣哉杜少陵贈曾將軍詩曰丹青不知老將至當貴於我如浮雲是可以爲老人墓銘矣

嘉永三年倉龍庚戌小春月

足利石舟大竹培書

孝子亭建（高瀬鹿藏錐刀）

所在　足利市鑁阿寺

小佐野茂右衛門

機業家なり。寶暦十二年足利に生る。諱は稲

小佐野茂右衛門之句碑

來し方の日は入りにけり稲雀　眞砂岐居士

（碑陰）

秀、俳諧を好み、眞砂岐居士又は槻庵と號す。足利小倉の特産品を創織せり。天保十一年四月歿す。享年七十九。

頭陀をかけ藜杖を曳き旅行に遊ぶは雅なりはた古人を友とし書に目をさらし生涯をかみ送るも雅にあそぶ心は同じからずやこゝに足利の眞砂岐居士は遙に寶歴の産なり若きより蕉門のほそみを味ひ世の名家にも交はり頓て此道の數寄人に算へられしがありと知られんもうるさければにや槻庵にひき籠り自の發句おもみだりにさたせず風月に老を養ひ閑に光際を送りかくて八十歳を壽として終りぬしかあれば其教によりし誰々おもひらく碑面に居士の一句を殘さば永く教受の報恩にもならめと文窓雪堂の二子をさきとしておの〳〵深志を發起す又ちかきころ此道に遊ぶ風士こゝろざしを同ふし好めるみちの手向草にもと追福のむしろに膝を屈し終に一碑成就せりと其あらましを述べうなづきて樗聲舍嵐齋しるす

嘉永三仲秋

辱知 合敬建之
從遊

蔣塘生培書寫

所在　足利市本城三丁目　德正寺

鈴木瀚齋

米澤藩士にして江戸に於いて蘭學醫者として令名あり。瀚齋は西洋學者の故を以て江戸を追放せられ益々勤王倒幕の志を抱き畫策する處あり。足利に移り門生に教授し深く水戸藩の浪士と交り國事に奔走す。安政六年病歿す。大正十三年二月特旨を以て從五位を追贈せらる。この碑文は當時の

瀚齋鈴木先生墓銘

瀚齋鈴木先生以安政六年七月五日病歿享年五十三葬下野足利德正寺中既塟之後其孤敬哉請余文銘墓余與先生穫交有年熟悉其爲人故不辭而銘之先生姓長沼氏諱汪汪字千里號瀚齋家世以醫仕米澤父諱多仲號牛翁通和蘭方技之術一時以其學顯若靑池休宗等皆出於其門性好遊所至紀其所見聞有八十餘卷名曰中涎有子十一人女二人先生其第七子也出嗣鈴木氏故稱鈴木氏以

事情により尊王に關することは記さず。瀚齋の長子、敬哉及び三男贈從五位荊谷三郎共に父の志を繼ぎ王事につくす。足利に於ける幕末の勤王家として吾人はその高風を欽慕してやまず。

病致仕寓于江戸業醫後徙于足利先生之幼也牛翁敎之讀書先生終日危坐對几不倦翁絶愛之撫其脊曰他日顯我者此兒也及長學醫於坪井誠軒鋭敏過人一時及門之士皆以爲不可及誠軒深器之刀圭之事至一任之性好讀書善通和蘭之書其他經史子集莫不旁通而方伎之書尤極其精遂能以其術有名于世是以人信牛翁之能知子也夫世之以醫名者同讀其書同講其術其用力未嘗有異也而至其術之精者則若先生甚窓何也盖先生天性至厚其接物處事皆出於至性之不可已而不假修焉故其視人之病也不獨其父兄子弟親戚故舊雖嘗無一面之識一語之歡者戚戚焉憂形於色方其投劑也焦神覃思必究病之所源患之所存然後敢投一七一刀未嘗苟故其治病百無一失如龜卜而鑑照此皆至性不可已之所致不期其精而精

者也彼世醫之營々怕名利之視視人之生死若無與者此非其用力有然異其天性有厚薄之異也先生事親孝承意和氣之事莫不竭其道一家相和雍雍如也其在江戸家道頗乏人或勸仕先生辭曰余求仕有米澤在唯其多病故致仕故國且然況他封乎誠軒告病則走視之道聞其訃哀痛動人善盡心喪之禮尤急人之艱難人之貧困無給優資而用之者至此豈非出於至性不可已乎自古忠臣孝子異行奇節之士卓卓度越千千古者無他皆出于至性之不可已耳今先生之至性既如是矣則優其得遇時遭主而行之則其仁新民於無窮者不爲難而以區々一小方技僅仁一方之人者於先生未爲盡也先生白晳長身鳳眉隆準眼光射人一見知其爲有爲人矣平生無戲動親知故舊欽酒談笑亦未嘗出一戲言子弟有過直詞正色不少假借以此子弟

罔不棘然斂飾然色溫氣和言語惇惇未嘗爲叱咤之聲久而後覺如坐春風之中浴千頃之水此又可以見其至性娶島林氏生三男三女長則敬哉次則麟次郎早夭曰三郎女尙幼銘曰

嗚呼非醫乎而不欲以醫傳蓋其天性至厚德器粹然使其得其位而施之於斯民斯民之生可以有少全既不能得其位而施之而醫一方之民斯民之病因有以痊則亦不以醫傳故銘而鐫之其所不銘者自銘外傳稱庶幾有以慰先生於黃泉

萬延元年九月

佐倉文學田中參撰文　上毛川島達書并題額

所在　足利市本城三丁目德正寺

鈴木敬哉

勤王家菊谷三郎の家兄に天保八年米澤に生れて父に隨ひて足利に移住す。父の歿後足利藩の勤王家となる。敬哉、利念と共に活躍す。三郎元治元年捕縛せられて放火の件に坐し、涙を呑んで閉門一年に處せらる。後大阪に奔り薩長の志士と往復せり。維新後官途につき明治八年東京向島に於て病歿す。

刈谷三郎

敬哉は刈谷三郎の弟にして弘化元年江戸に出て仲町に生る。足利の新田に久しく學舍に入り、轉じて昇平黌に學ぶ。元治元年四月小田原の攻撃に參加し、戰後江戸に歸り、更に京に入り、西走して東奔し、新撰組に入れられたり。後は大業に從ひ、或は門人となり、世道の教化に盡めたり。明治四年三月病歿す。十三年三月京都に於て敬哉の墓碑を建つ。

故鈴木敬哉ハ贈從五位鈴木千里ノ男ニシテ贈從五位刈谷三郎ノ兄ナリ明治維新回天ノ大業ニ方リ家ヲ捨テ、勤王ノ事ニ奔走シ具ニ辛酸ヲ嘗メ幕兵ト戰ツテ遂ニ右腕ニ重傷ヲ負フ明治八年八月三日病歿ス享年三十有九本會ハソノ忠烈ヲ永ク世ニ傳ヘント欲シ此ノ碑ヲ建ツ

昭和五年五月十八日　鈴木敬哉勤王事蹟顯彰會

このいしふみは大人の世に有し時みつから物せられたるを明治四十年餘三とせといふとしの三月五日にみまかり給ひしかは三郎君はをさなき時よりいまはにいたるまてみ國の爲につくされたるかた

す。足利德正寺の墓域なり。長途行脚云々の地と生前定めて郷關を出でしものなり。心懷壯烈なること想見すべし、大正七年特旨を以て從五位を追贈せらる。父子三人共に王事につくす。誠に以て足利の誇とすべき處たり。

みのかけもしのはれていとをしくやかておくつき
にとて袖のしつくにふてをとりてかくなむみはか
は京都にあり

我が長途行脚の出發點豫定地

無隱居士

所在　足利市巴町　法玄寺

今尾默庵名は祐廸、寛政九年足利新田町に生る。仁醫にして遠近その德風を慕ひ、患者は祐廸の名を念ずるのみにても病癒えしと稱せらる。默庵また名利の念に淡く敢入頗る多かりしも悉く之を一族にあたへて顧みざりしといふ。また以て其の風格を知るべし。

默庵古志君墓碣銘

江戸大橋正順撰文

古志默庵君歿嗣子遙集介近藤樵香屬墓銘於余余性懶事殷負諾者三年而其請愈勤何其篤摯也乃撥百忙表其隧道曰君諱克字永世古志氏默庵其號又號母自欺齋稱祐廸下毛州足利人考諱篤信妣古志氏家世爲戸田侯醫員君蚤歲喪姑獨與母居善承其歡心弱冠負笈西遊師事吉益南涯岡本遜齋二翁悉究其潭奥又來江戸讀書於善

庵朝川氏之門數年學識大進既歸則遠近求治者群然麕至乃能生死愈痼而執贄受業者亦陸續不絕君爲人溫厚沈靖不修邊幅待人以誠凡有延請其治者吐哺投筯竭蹶起趨之無貴賤貧富必彈其心力一歲所入頗饒而皆散與之宗族鄉黨不顧生產儋石屢空晏如也平生未曾駕肩輿病家或有寄舁夫錢以謝之者亦峻卻而不受其志操如此稍暇則端坐一室賦詩臨古帖欣然以娛其詩典雅婉暢妍而不窕巧而不纖視之專門作者不多讓而絲毫無滿假之色是以人益稱其德云君以安政三年丙辰五月既望歿齡六十有六葬干鄉之法玄精舍配荻野氏生一男三女男卽遙集襲其疇業嗚呼近世以醫成家者率皆鳶肩羔膝婞阿富豪惟名足利是逐而君則不然是豈可不謂中流砥柱雞群野鶴哉乃係以銘曰

所在　足利市通二丁目
八雲神社

奥河内清香
文化二年足利新田上町に生る。江戸に出て橋守部の門に入りて國學を修め、歌道を學ぶ。天保三年郷に歸り門生に教授す、著述及び寫本に專念す。明治六年四月歿す享年六十九。
因に人あり曰く、足利の櫻花吟三絶あり。一は清香のこの「囀るや云々」一は勤王畫家田崎草雲の誠心隊司令として凱陣せしときの愛宕山の詠「ものゝ具も脱かで愛宕に來て見れば風にうち散る山さくら花」一は足利隨一の書家大竹蒋塘の辭世の吟「雨風はなくとも花は二三日」なりと。

起廢肉骨　貧羸惟撫　功高身謙　德不慚古
萬延紀元歳在庚申仲冬　雪城澤俊卿書并題額

詠櫻花歌　奥河内清香

囀るや唐にはあらぬ　大倭國のはたてに　咲き匂ふ
櫻の下は　立ち寄れは老さへ忘れ　花見れは憂さへ
忘る　その花の咲の盛りは　貴人も賤の荒雄も　む
ら肝の心同じく　酒飲めは酒さへすゝみ　歌よめは
歌さへ浮ぶ　此處もへは奇しき花ぞ　敷島の大和島
根に勾ふ櫻は

明治四歳次辛未
夏五月良辰建之

北猿田河岸
石工　高瀬喜三郎

所在　足利市通七丁目
切通

三條實美
天保八年二月京都に生る。維新の變亂に處し克く大業を補贊し、柱石の任に當り國家の元勳たり。天皇巡幸毎に之に供奉せざれば則ち必ず留て百政の委任を奉ず。明治廿四年二月薨ず。

巖谷修
書道の大家なり。天保五年二月生る。儒學を中村栗園の門に修め官途に仕ふ。一六居士の雅號を以て普く人に知らる。

川田剛
字は毅卿、甕江と號す。備中松山の藩士にて山田方谷に學び、後昌平黌に入る。維新前後藩の爲に盡す所多し。召されて東京に住し、帷を下して英才を教育せり。諸官を累進して

足利開鑿二重坂路記　一等編修官從五位川田剛撰文

從五位鍋島君令橡木縣之七年政通人和風化大行是夏
下野足利區長戸長與富戸好義者數十人連書建言日邑
西二重坂爲赴上野桐生必由之道而嶄岩聳立中通一線
奇嶇險隘行旅病焉方今四海一家世趨文明道路之不修
運輸之不便吾儕士人不得不任其責今興開鑿民田當塗
者給貨和買隣里協議無有害凡此經費醵金辨濟上不糜
官財下不煩民力伏請吸府幸賜允許君嘉納使其支廳長
内田祐宣董役乃從坂頂今福郵交界處南走二十餘武爆
硝劈石刊去兩旁高各七八尺若一二丈以拓舊路加潤一
倍自此東地漸降漸平新開一路砌以石礎廣四間長七十
間透迤匂折爲偃月狀至連岱橋西復與舊路合於是險爲
夷隘爲寛而車韡馬駢步者走者杖者負擔者提携者絡驛

貴族院議員に敕選せられ、文學博士、學士院會員となる。明治廿九年一月歿す。享年六十七。

去來歡呼不已是擧也積工一萬閱日二百經始九月告竣於明年四月長七十間可謂敏且勉矣夫中興以還百廢俱擧設庠序修道路築隄防造橋梁土木之役無地無之然氓之雖視爲煩擾而有司或急乎立功百方勸誘繼以威令賦工起徒動輙不免於怨讟而此獨不然蓋所謂足利學校者數百年來多藏經史其名遠聞海外青衿聚散雖古今不同而耳目所觸智識隨開土俗之美自異他方是以上意下達不待督責而成此偉業豈可嘉尙乎祐宣與衆謀具狀來請余文乃記顚末以鐫石使來逞於此者毋忘功德所自焉

太政大臣從一位勳一等　三條實美題額

太政官書記官從五位　巖谷　修書

明治十一年九月建之　（宮龜季刻字）

所在　足利郡御厨町
御厨尋常高等小學校

伊達宗城

伊豫國宇和島の藩主なり。文政元年八月江戸に生る。積年憂國の至誠を捧げ、屢叡感を賜る。明治四年欽差大臣として清國と修好し、また修史館副總裁の任に就く。明治五年十二月薨す。特旨を以て從一位に敍せらる。

秋月種樹

日向高鍋城主種任の三男にして天保四年十月生る。昌平黌學問所奉行より家茂將軍の侍讀となる。明治年間要職を經て、錦鶏間祗候を命ぜられ貴族院議員に勅選せらる。明治廿七年十月病革まるに及び從二位勳二等に叙せらる。

日下部東作

字は子暘、鳴鶴と號す。

下野國梁田郡俠民碑

從二位勳二等伊達宗城篆額

從四位　秋月種樹撰文

明治二年秋氣候乖戾米穀不登下野國河漲隄潰齊被巨害而梁田郡爲特甚村民相謀訴之日光縣請檢田減租廳差吏檢之時霖雨未歇禾稼濕潤米粟膨張吏以爲非凶歉村民皆曰檢以濕粟如有所餘納以乾米有所不足我輩何以得活又往訴之廳不聽於是二十二村人民暴起各擔蓑笠屯于御厨一本楡將迫而再訴須藤貞藏等大驚要之於川崎村曰夫理雖直行之不順則歸于曲汝等愼勿騷擾衆從之事聞縣廳疑貞藏等煽之捕石橋內藏之助木村勘十郎稻村安右衛門阪田丈助室田治右衛門渡邊喜太郎須藤貞藏吉田源兵衛石川利十郎九人下于獄日光土地高

舊彦根藩士。維新の初徵されて史官を拜す。幼より學を好み詩文を善くし、尤も書法に工なり。清の楊守敬に師事す。更に金石碑帖をさぐり精究す。その流は漢隸書風の所謂鳴鶴流と稱せらるゝものにして、支那に遊びしときの如き、東海の書聖來ると稱揚せらる。勅命を奉じて大久保公神道碑を書す。大正十一年一月病歿す。享年八十五、特に從四位に叙せらる。

寒況囹圄新成墻壁未完上漏下濕百疹交發九人者前後
皆病而安右衛門以十二月廿七日死年五十二內藏之助
年六十五勘十郎四十八丈助五十九偕翌廿八日死治右
衛門以三年一月三日死五十二喜太郎以同月六日死四
十六貞藏以二月廿七日死六十一疫氣傳染甚劇如貞藏
家族故舊致死者三十餘人至于舁柩者亦斃可謂慘矣其
能得免者源兵衛利十郎二人而已偶事情暴白遂得放歸
源兵衛以本年二月廿二日死年六十七唯利十郎今猶存
云梁田郡村民集金將建碑致祭會余遊野州衆請余記之
余因曰內藏之助等固俠者也無罪人也而繫獄病死眞可
哀也盖不幸當時武門餘習猶存法律殘刻所以致此慘狀
不必深咎吏之虐也幸使其事在今世必得盡其辭假令一
時寃枉治罪愼重決不致死也雖然身爲一鄉死有餘榮

所在　足利公園

成瀨　溫

書家なり。名は溫、字は子直、遠州の人なり。書法を家祖に受け、後東京に移る。勅命により、王羲之の聖教序を臨摹し之を奉る。天皇嘉賞して尙方の御硯を賜ふ。實に楠正成の軍神に奉りし名器なり。依りて是より賜硯の二字を以て其堂に扁す。書名も亦一世に高し。明治卅五年二月歿す。享年七十六。

死者亦當無遺憾矣

明治十四年十一月　　正五位　日下部東作書（井龜泉刻字）

瀨北翁之遺詩

醉來穩睡覺來詩　頤斯餘年獨忱悚　移菊小庭春雨後
投竿淺瀨晚晴時　三常省士宗仁義　四不出身疎禮儀
本匹直錢周孔學　長輝似王屈陶詞　富如金谷終烏有
雅至西國久被知　天下千端圓缺月　世間萬事漏傾器
九重室不過容膝　一盌糧猶足忍飢　臨興放歌麟鳳舞
乘間沈嘯鬼神悲　既於自己忘榮辱　何向他方論是非
奉教偏欽府縣別　揮毫儘拂二王規　戇懵畢竟無人忌
賤劣又安遺物羈　杜撰腐陳從意述　華晨雪夕事揚厄

東京賜硯堂成瀨温書并篆額

飯塚瀨北翁遺詩碑陰記

托跡於醉鄉寄身於詩國理亂不知黜陟不聞優遊卒歲者
非功成名遂而身退則數奇不遇失意干當世如唐太白樂
天是其尤者也故一斗百篇一醉一吟洋々灑々自肺腑中
流出調穩境切氣豪神爽載下俾人想見其風度韵致飯塚
瀨北翁以詩酒爲性命吟花嘯風斟月醉雪一年三百六十
余日靡日不醉靡夜不吟抑謫仙元再生耶將醉吟先生之
後身耶夫玩物喪志人情之所難免而翁儼然以師道自居
循々不倦三十年如一日比之嵇康阮藉輩縱飲昏醉不事
事者也間焉往歲芳野金陵先生來遊翁賦排律一篇以就
正先生不敢删一字直書紙尾日朗誦數回大慰旅況奇矣

此境有此韵士云云翁後授之門人關根金藏金藏裝潢爲
軸以珍襲焉即表面所鐫者之也通篇不假雕琢自然超妙
而夢身世雲富貴遁世無悶之意自溢筆端誦其詩可以知
其人矣翁詩才敏捷咄嗟成篇故不自愛惜隨賦逸所存幾
何也門人深惜之相與戮力建碑欲以傳不朽余屬記其陰
翁諱某飯塚氏號瀨北駿州志多郡助宗村人考稱常右衛
門世農翁幼好學及長入佛後蓄髮歸儒弘化年間來下毛
足利開塾授徒前後執贄者一千余人明治十九年一月九
日病歿享年七十三葬干邑北三寶院塋域嘗賦一詩其落
句曰米法露英足畏双刀自是換裂裟寄托慨然其中所蓄
不可掩豈徒賜耽詩酒者乎哉

明治二十年春三月

森保定撰　東京賜硯堂成瀨温書

所在　足利郡三和村松田

金井之恭

書家として世に知らる。天保四年上州に生る。勤王の志を抱き兵を擧ぐるや捕へられて投獄さるゝ事數年なり。時に官軍碓氷峠に至る、之恭等脱獄して岩倉公より大隊旗を受領し各地に轉戰す。維新後仕官し元老院議官、錦鶏間祗候を命ぜられ貴族院議員に勅任さる。特旨を以て正四位に叙せらる。明治四十年五月病歿す。享年七十五。

川上廣樹

足利藩の和漢學者なり。天保九年江戸藩邸に生る。勤王の志あり、田崎學雲等と謀り誠心隊を組織し、壓死生の間に出入す。維新後藩の庶政を統理し、藩學求道館を足利學校に合せ、學校の藏書を補修し釋奠の儀を復興し、教育に盡力せり。維新後は種々の學校にて教育に從事し、また大日本人名辭書等の纂纂にあたれり。其他自著數種あり、明治廿八年病んで東京の寓居に歿す。享年五十七。

所在　足利市通七丁目三寶院

新井勝重

足利本町に生る。幼より繪を好み父について畫法を修め佛畫を善くす。日光廟修理に從ひ令名あり。性俳句を嗜

下山先生之碑

從四位勳三等金井之恭篆額　川上廣樹撰

先生名一英氏下山通稱文兵衛號雲庵祖考曰七左衛門考曰又左衛門妣柏瀨氏其先出於甲之宿將穴山信良之族某武田氏之亡也避難於身延山麓下山村因氏焉後有故移居于下毛足利郡松田村先生以文政五年五月十三日生資性明敏好學善書年甫十三遊于上毛大間間街之儒士諷齋先生之門勤苦多年學術大進然不幸會先考大故歸葬爾來躬治家事家產大興矣且閭里童蒙來受教者百數十名先生循循誘之後擧村吏處事寛厚公正能捐私財經營村務故人皆服其德一鄕稱治明治五年官發教育令村建鄕黌先生卒先鞅掌學務大擧政府持賞其功矣後以老辭職好俳歌自遣興悠優以養天直哀哉明治十三年十二月七日以病卒享年五十有九今玆門人相謀建石於村社之傍以行靈祭傳先生之鴻恩於不朽銘曰

將家之裔　隱在草莽　講學興家　施及鄕黨
德如山高　澤如水浥　德可以仰　澤可以汲

明治二十六年歲在癸巳夏六月

藤本周三書（神佳納刻字）

揮描院瀨譽温雅勝翁居士

明治二十七年三月八日　孫二巳也建之

金樑齋新井氏諱勝重晩稱勝翁幼名政之助瀨陽其別號也明治廿六辛巳年以一月廿日終於家距生文政四巳年正月廿日得庚七十三其死也與其生日同年月日時又可謂奇

み五村と號す。勝重は文政四の巳年に生れ明治廿六の巳年を以て歿す。而してその出生は正月廿日にして、その歿日も正月廿日なり。奇縁と謂ふべし。遺稿を「巳のとし草稿」といふ。

矣翁豫知其死期乎先死四五日前日々訪親戚故友盡歡而歸命家人日親戚故友將有來宜整頓家具家人潛思有其約謹從命及翁之逝也果知其言之驗也翁之父勝房能畫母者足利町左十右衛門之女翁以其長子承家翁性順良寛雅自幼好畫隨父勝房受畫法終日執筆不撓不倦故於佛畫之緻密者尤之極其精巧被知名天保嘉永年間日光宮殿有修繕之事也受幕府之命從事於丹艧之事白象黑象等光彩倍舊者翁之功與有力云翁嘗憂皇國地誌之無精確者欲試之實踐畿内東海東山山陽山陰之諸道之區畫其所經歷悉盡其精微明治七年下野色分繪圖成上之縣官依之受木杯之賞繪畫之盛行也兩京之共進會博覽會等之有開設也展之受褒狀者屢翁不關世利之事有間則灌園以培養花卉爲娛佛氏所謂以形骸爲死灰犒木

所在　足利市公園

高橋泥舟

舊幕臣なり。勝海舟、山岡鐵舟と共に幕末の三舟と稱せらる。槍法を以て當時隨一とうたはる。講武所師範役となり、從五位朝散大夫伊勢守に任ぜらる。幕府諸浪士を集めて新徵組を組織するや之が隊長となる。維新の際は專ら恭順に力む。後出でて官につかず、明治卅六年二月歿す。行年六十九。

乎如翁者眞可謂知身之本旨又得雅味之眞趣者也哉

辭世　咲たよ利影の清さや池の梅　五郎

柳糸句碑

靜さの果や耳うつ露の音　柳糸

爲囑　泥舟書

（碑陰）

居士通稱儀平相模國小田原之人明治九年移住足利町設水車于渡良瀬河岸以爲業傍嗜誹句頗有所造諸號夜養庵柳糸今茲乙未春偶得疾四月二十五日歿享年五十有九

明治二十八年秋九月

渡良瀬連社中

所在　足利郡山邊村大字借宿　圓滿寺

借宿隄防碑

栃木縣知事正五位　千頭清臣篆額

明治二十九年九月霖雨浹旬渡良瀬川洪水兩岸隄防崩壞者數十所兩野之間濁流汜濫渺茫如海而山邊村借宿膺水勢激漲之衝隄防悉壞田畝陷沒被害最劇於是縣廳計畫築隄三十年三月起工九月又水工半而止三十一年一月再起工六月告竣隄長四百六十七間直高馬蹈各三間護岸高四間沈床幅三間至三間半大走幅一間至二間援土於里東之一孤丘九千二百余步役夫二十万五千三百余人費金五万二千四百余圓堅牢無比無復曩日之害矣噫乎一條之隄以擊斯民之休戚冀存諸悠久隄既成將建碑謁余文余察其情乃不辞作之銘曰候此長隄民命所繫旻天有識護諸萬歳

明治三十一年六月

栃木縣足利郡長正七位勳六等　小山滿峻文

正七位　戸田香園書

同志者建之

所在　足利市公園

山下允升之碑

蹉跎華甲歳　於世嘆無功　疇昔懐壯志　薄技作雕蟲
大材斷厭小　實學愧踈空　才不合時宜　拘泥乏變通
行藏與用舍　有命付蒼穹　已灰青雲志　漸成白髪翁
肩負一瓢酒　手抉三尺筇　世事渾不開　都付一笑中

歳庚子春仲　雪窓允升自述

山下先生碑陰記　越前　松田直人撰

先生諱淳良字允升號雪窻山下氏初稱太一郎家世々仕館林藩祖考諱供睦娶粕谷氏無子養從子恒幸爲嗣配第三女擧三男一女先生其仲也先生幼從藩儒田中泥齋及長博通經史尤喜詩文又善書泥齋能知先生薦爲藩校助教藩之改學政先生與有力焉明治二年任文政官權少史四年任權大主記五年辭職自此絶意仕途歷遊于四方留上毛桐生後移足利到處問業者常滿門三十五年八月五日病歿于足利僑居享年六十又四葬干東京谷中信行寺先瑩之次配江原氏生一女先生嘗賦一詩以述懷及其歿也門人原田雪香等相謀勒其詩於碑面建諸足利公園而以余辱先生之知使余記其梗概嗚呼師道之廢也久矣師不知所以教弟子不知所以學朝則師弟夕則路人而先生歿門人不能忘遂有此擧則先生之德之盛可以想見矣

明治三十七年八月　　下野藤本周三書（井龜泉刻）

所在　足利郡山前村山下

力士之碑

力士有乳山下野足利郡山下村人初名八三郎姓須藤氏父三右衛門母某氏元祿三年生少而有怪力聞干遠近出江戸入力士群無幾以其技壓儕輩大將軍德川吉宗召使鬪技而觀之仆數十人吉宗感賞賜名八八既而周遊于海內其名遂達於雲上中御門帝亦召觀其技賞與有乳山之稱及錦囊寶玉等子孫傳以爲寶存至於今八八死後百三十餘年鄉隣有志相謀爲相摸會以表追善之意而欲傳其蹟於無窮乃來請文余自幼聞八八之事熟矣而亦有此請焉可辭以不文哉乃敢識斯石佐藤大道曰一藝之士皆可

語余恨不與八八同世而接風丰耳

明治三十八年十二月　　木村桐北撰并書

草雲畫伯田崎君碑陰之記

所在　足利市公園内白石山房南庭

田崎草雲

近世南畫壇の畫聖。草雲は文化十二年十月江戸戸田藩邸に生る畫道を谷文晁等につきて學び大成す。人と爲り剛直にして俠氣あり而して名利に恬淡なり。勤王の念篤く誠心隊を組織す。明治六年の富嶽六景の佳作以來畫聲頓にあがる。明治卅一年九月白石山房に於いて病歿す。行年八十四。大正四年十一月、特旨を以て從五位を追贈せらる。

草雲田崎君氣節之士也其技卓絶等輩亦宜矣君弱冠讓家弟辭藩專意繪事歷遊相武房總二毛間後寓江戸與一時名流往來就谷文晁春木南溟等有所質超然獨悟心期南北合法運奇思干天才神韵自出時流之表矣後往足利會明治中興擲筆蹶起結忠士勤王事遊說上武之間明順逆定方向召募農兵警衛鄉閭迨海内治平卜蓮岱山一宇衡茅復親筆硯以終焉君畫無所不能尤推山水喜描富嶽點綴雲煙離合變幻闡前人未發之秘東京設美術展覽之

小野湖山

詩人なり。名は長愿字は侗翁、江州の人。江戸に出で梁川星巖の門に入り頭角を現す。慷慨奇節あり。幕末國事に奔走し、功に依り從五位に叙せらる。官途に就かず優遊詩酒に適意す。大沼枕山、鰻松塘と共に明治の三代詩人として推さる。明治四十三年三月千葉縣にて病歿す。行年九十七。

碑陰記撰者小野正弘は小野湖山の息なり。

會君每得優賞皇居造營君奉命畫戸障十二年巴黎萬國博覽會二十六年悉我古大博覽會並得褒賞二十三年帝室技藝員君又好國風善上代文字通本草學君足利藩士父恒三母某氏三十一年九月二日病歿享年八十有四葬足利町西宮長林禪寺塋故舊門人設蓮岱會者捨與田園供香火于無窮越十二年又欲樹碑令鄉子弟有所長挹遺風以家嚴與君有三十年之交請書其名字遂囑碑陰記于弘弘深感於氣節之能令人與技俱超然一代又有能繫人心於永遠者不忍以不文辭其請承旨家嚴書以與焉

明治四十二年九月　　東京　小野正弘撰

下野　藤本周三書

碑面「草雲畫伯田崎君之碑」は小野湖山の書にして門

人小室翠雲畫伯の梅花の圖を配す

所在　足利市公園内白石山房南庭

阿部茶村之碑

阿部茶村ぬしは足利の人なり刀劍の柄卷ことをもて業とす若き時より風雅なることを好み田崎草雲の門に入り不丙といひ又痴空とも云へり後に茶村と改む安政三年の頃より四十五年間翁のもとを離れす恰も愛子の親につかふるか如く仕へたり翁の世を去りし後五年を經齡七十三にて身まかりぬよく常を守り行正しかりしを誰かはたたへさるへきぬしか如きは稀なる人とこそ云ふへけれ

海上胤平（小林鶴雲刻）

所在　足利郡山前村大前　自性院

青木彦三郎

諱は春方、通稱を西岡邦之佐といふ。尊王の念やみがたく元治元年水戸の志士藤田小四郎と共に筑波に擧兵し討幕の狼火をあげしも敗れて捕られ刑死す。享年四十。春方の獄中碧血を以て手書せしは有名なり。大正四年十一月特旨を以て正五位を追贈せらる。

青木彦三郎之碑

元治元年十月十六日殉國

贈正五位青木彦三郎之墓

通稱西岡邦之佐春方

正三位子爵實吉安純書

元治元甲子歳　享年四十歳

大正四年十一月十日　被贈位記

明治十年四月二十七日子傳平建之大正九年十月十六日孫利三郎修之曾孫信三請師海軍軍醫總監實吉安純先生改書碑側如故

君諱春方青木氏通稱彦三郎其稱西岡邦之佐者盖脱走

後之姓名也君生下野國足利郡大前村父曰春芳母岡田氏君仕幕士土井備中守好讀書慕精義專以尊王攘夷爲志與水戸藤田小四郎田丸稻之右衛門等戮力同志欲以繼烈公攘夷之志據筑波山募近旁之同志當是時有唱和議者世謂之姦黨朝比奈某市川某是也與攘夷黨相爭互擠排水戸爲之大騷松平大炊公爲黃門公目代往鎭之姦黨炮擊公駕不中公大怒出追討姦黨之令且馳使筑波山求援乃赴援大戰數日姦黨大敗遂火船山拔那賀湊二所皆姦黨之屯所也於是相議日追討姦黨之事宜托之大炊公而筑波山之兵當姑散於是田丸等欲從磯濱北向去藤田及君等不肯曰吾儕苟攘夷之奚也而北向去則忠得背初之罪不可於是一同向鹿島既而諸方兵來襲大戰凡十數回君等預知戰難欲南渡德房無舟不得渡從延方陸行

所在 足利郡北鄉村月谷行道山淨因寺

至土浦往水海道夜至古河爲守兵所捕獲君雖陳愬攘夷之志吏不敢信初君變姓名暗踪預似知今日之事嗚乎惜矣哉傷矣哉事遂不果噫君年四十也

杉魁撰　杉於菟書

春畦居士詩碑

半天懸鐵鎖　人踏白雲行
佛臥巉巖上　恬然視衆生

春畦居士詩　華畦女史書

春畦諸井先生以詩書有名於世久矣大正三年之秋挈室華畦女史來遊於此大賞其風光明媚對山臨澗吟詠竟日期再遊而還京後六星霜先生以病逝矣余聞其訃不堪悵

所在　足利市本城三丁目　德正寺

杉浦重剛

安政二年三月膳所藩に生る。天臺道士と號す。貢進生として大學南校に入り、明治九年英國に留學し化學を攻む。歸朝後官途につき教育行政にあたり、或は私學を興して人材の育成につとむ。後、東宮御學問所御用掛、良子女王殿下御學問所出仕となる。崇高なる人格は一世の瞻仰するところなり。大正十三年二月病歿す。從四位勳二等に叙せらる。享年七十。

小野鵞堂

名は鐵之助、字は間金、斯華の家と號す。文久二年駿河國に生る。少年時江戸に出で、成瀬溫の熟に入り、國漢の學を修め、書道の研鑽につとめたり。明治二十三年に筆蹟を皇后宮に献上し、後、東宮職御用、女子學習院教授となる。その書法を鵞堂流と呼び、和樣書道の大家にして假名書の權威たり。大正十一年十二月病歿す。享年六十一。

然今茲五月一周忌辰女史自書先生之遺詩樹碑於舊遊處余善其擧爲記數言云

東光山善德禪寺現董沙門曹菴撰

大正九年五月　華畦女史書

行道山淨因禪現董沙門祖芳

追遠碑

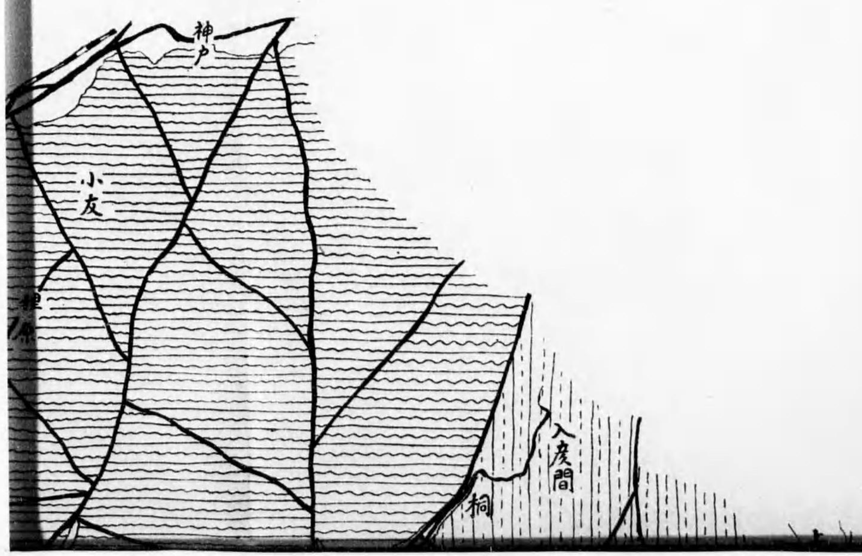
海軍少將從三位勳三等功四級伯爵　佐野常羽篆額

足利內田仁三郎翁介人携書一卷來請曰是我家系譜也願得先生之文表彰祖宗之德以傳諸不朽且爲後昆庇賴之資焉按翁家素山內氏住相州鎌倉其族分稱內田氏遠祖出于下野大椽鎭守府將軍贈正二位藤原秀郷故家紋用三柏云後徙于下野足利賴母之亮勝之始仕足利城主長尾憲長領地於上野菌田莊只上村其子平龍稱庄之亮有膽略小田原役從其主顯長援北條氏殉之平龍子曰彌六勝元隱遁爲農永祿中渡良瀨川氾濫五箇鄕民皆流失其居大極因殆乃新選地于足利本町之東彌六等具狀請之館林侯侯聽之因墾蕪劃街長八丁悉徙其氓舊新田街是也其後九世亦出奇材曰文右衛門平勝幼俊穎每與羣兒嬉戲或爲佛塔或書文字長氣度超群身體魁偉亥臥丑起常崇奉神佛自寫經曰夕誦之尤信辨財天屢詣相之江島至誠禱之遂被其可護家道益豐爲藩侯戶田氏多出資享保中以侯命救恤窮餓傍敎導子弟遠近來學者履常滿戶外自平勝至于翁七代其間亦異材輩出家系連綿益赴隆盛既十九世是祖宗積善所致固無足怪者宜矣翁之追遠仰慕而不已建碑以表彰之乎嗚呼爲翁之後嗣者庶幾

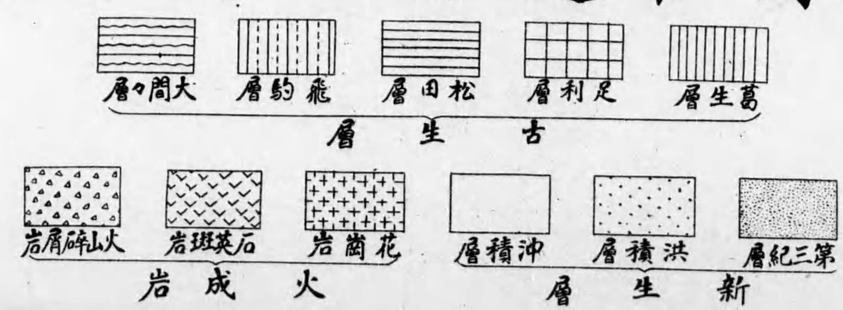
其有鑑于斯焉銘曰　内田之祖　出繇秀郷　始則武弁
後則農商　厥澤維遠　厥裔維榮　千古不盡　山高
水清

大正十年四月

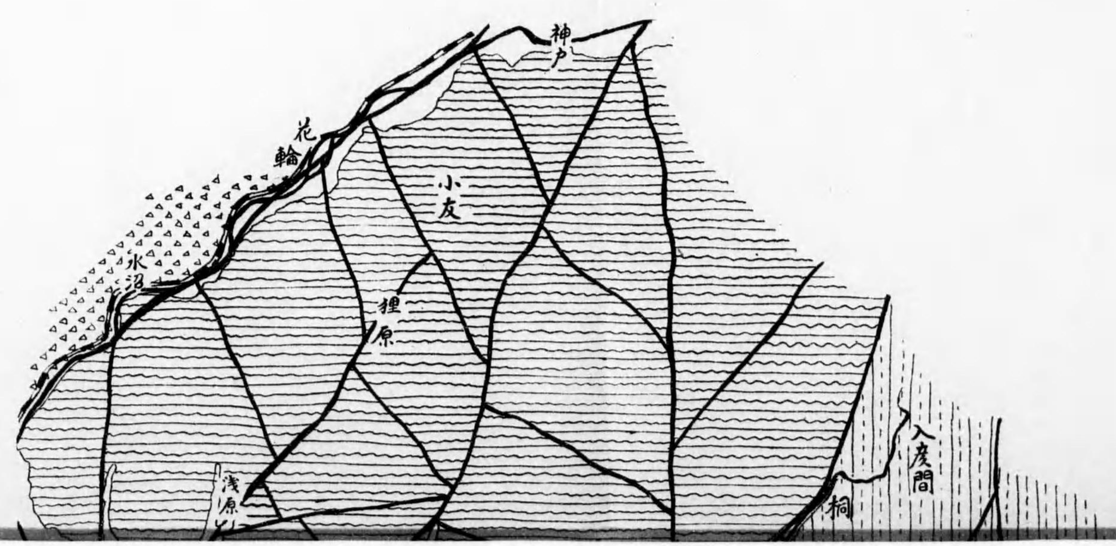
従四位勳三等　杉浦重剛撰文
従五位勳五等　小野鶯堂書丹

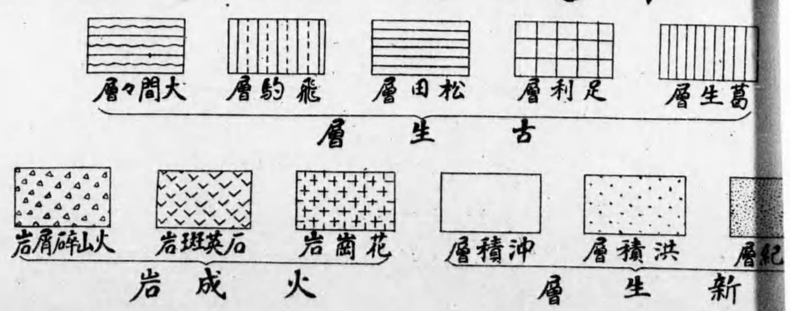

神戸
小友
桐
入度間

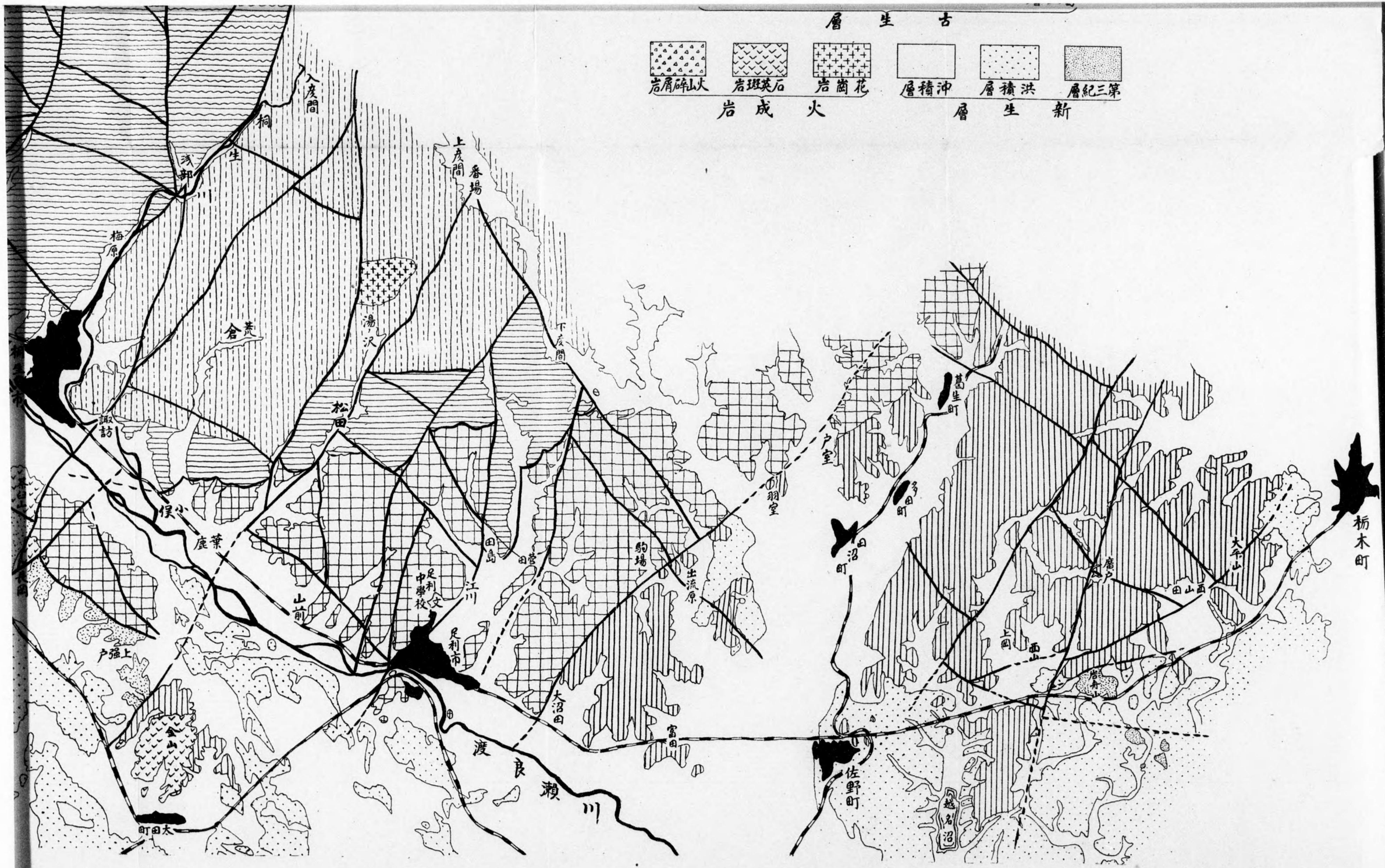
足利市近傍地質略圖

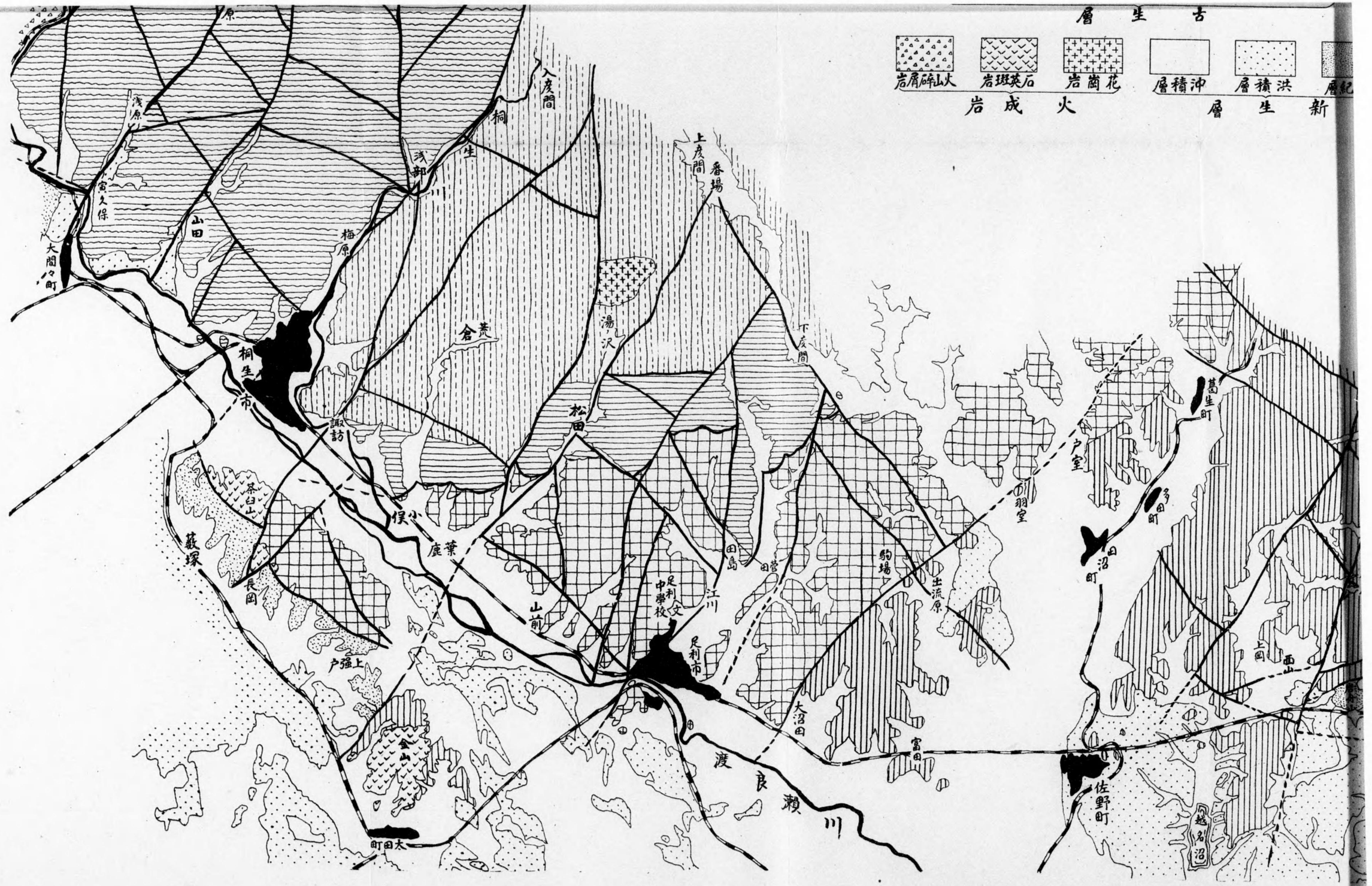

大間々層
飛騨層
松田層
足利層
葛生層
古生層
火山砕屑岩
石英斑岩
花崗岩
沖積層
洪積層
第三紀層
火成岩
新生層

利市近傍地質略圖


神戸
花輪
小友
水沼
狸原
浅原山
入度間
桐


大間々層
飛騨層
松田層
足利層
葛生層
古生層
火山砕屑岩
石英斑岩
花崗岩
沖積層
洪積層
紀層
火成岩
新生層


古生層
火山碎屑岩
石英斑岩
花崗岩
火成岩
沖積層
洪積層
第三紀層
新生層
入度間
桐生
浅部
梅原
荒倉
上度間
番場
湯沢
下度間
諏訪
松田
小俣
鹿葉
田島
足利文中學校
江川
山前
足利市
上強戸
金山
太田町
大沼田
駒場
出流原
富田
渡良瀬川
佐野町
戸室
羽室
葛生町
多田町
田沼町
廣戸
越名沼
上岡
西山
田山西
大平山
岩舟山
栃木町


古生層
火山砕屑岩
石英斑岩
花崗岩
火成岩
沖積層
洪積層
新生層
原
浅原
寅久保
大間々町
山田
梅原
桐生
浅部
入度間
桐生市
諏訪
倉兼
湯沢
上度間
番場
下度間
松田
田島
田嘗
駒場
出流原
足利文中學校
足利市
江川
山前
小俣
鹿葉
茶臼山
藪塚
長岡
戸強上
金山
太田町
渡良瀬川
大沼田
富田
佐野町
戸室
羽室
葛生町
多田町
田沼町
上岡
西山
越名沼

地質學的觀點より見たる足尾山塊附近の構造

地理教室　井上重一

目次

一、緒言
二、足尾地塊の地形概觀
三、地質
I 古生層
(A) 層序
(1) 葛生層
(2) 金山々麓砂岩層
(3) 足利層
(4) 松田層
(5) 飛駒層
(6) 大間々層
(B) 古生層中の化石
(C) 化石の地質學的時代
II 第三紀層
III 第四紀層
(1) 洪積層
(2) 沖積層
IV 火成岩
(1) 三和村花崗岩
(2) 金山石英斑岩
(3) 茶臼山石英斑岩
A 赤城火山
B 日光火山
C 高原火山
D 足尾銅山
四、地質構造線
五、結語

地質時代表

- 新生代
  - 第四紀
    - 冲積世
      - a II
      - a I
    - 洪積世
      - du II
      - du I
      - dl II
      - dl I
    - ……（圓礫ローム）
    - ……（關東ローム）
  - 第三紀
    - 鮮新世
    - 中新世
    - 始新世
    - 曉新世
    - ……（岩舟層・鷲塚層）
    - ……（足尾鋼山鑛出）
- 中生代
  - 白堊紀
  - ジュラ紀
  - 三疊紀
  - ……（三和村花崗岩・金山石英斑岩鑛出）
- 古生代
  - 二疊紀
    - 上部二疊紀
    - 下部二疊紀
      - Saxonian
      - アルチンスク層……（足利層・飛騨層・大岡々層）
  - 石炭紀
    - Pennsylvanian
      - Uralian……（蔵生層・松田層・金山々麓砂岩層）
    - Mississippian
      - Mosovian
    - アルソン紀
    - シルリヤ紀
    - オルドヴイス紀
    - カンブリヤ紀
- 原始生代

一、緒　言

從來地塊構造、特に斷層の走向等を論ずるに主として取られたる手段は、地表面にあらはれたる地形を見て、それによつて內部の構造を想像するに過ぎなかつた。勿論廣範圍にわたる所の構造を、短時日にまとめ上げるには之によるが最も便利であり、且取るべき手段も他になかつたのである。しかし例へばこゝに所謂『斷層地形』なるものを取つて見るに、大部分の斷層は河川の浸蝕により山中に略直線狀の溪谷を刻むか、或は山地と平地との境界をなすものであつて、その斷層の落ちなかつた側は鷲足式に傾斜が急に增加する三角面、所謂斷層崖を持つものである。斷層の確かに存在する場合にはこの樣な地形になるのが常であるが、此の如き地形を持つたものすべてが斷層といふ事が出來ない。種々の他の條件によつて地形的には斷層と區別し得ない樣な狀況を呈する事がある。地形學者が現地の地形をよく觀察しての後に於ても、この誤りには極めて陷り易いものである。況んや祿々その地の踏査をもせず、唯地圖上にあらはれたるもののみを見てその構造を論ずるは、後輩に誤りたる先入感を注ぎこむのみにて、その弊害の大なるはむしろ戰慄すべきである。

世の地形學者中には斷層線は所請斷層谷の中央部即ち最底の河流の位置にある如く考へて居るものがある。又所謂斷層崖が斷層の滑面そのものと考へて居るものもある。之は大なる誤りであつて、斷層線は通常斷層谷の中央を通つて居ない。又實際の斷層の滑面は斷層崖より遙かに前方にあり、斷層崖は斷層と平行して唯それの存在のみを示すのが通常である。即ち斷層線崖ともいふべきである。この樣に極めて精密に斷層の位置を知り、その構造を明瞭にするにはその地の地質を確實に調査する外はない。筆者は昭和八年一月足利中學校に赴任して以來、日曜日その他の休日を利用して調査する事一年半余に五十余日、調査の濟みたるはわづかに足尾地塊の南端の一小部分に過ぎない。この研究の遲々として進まざるは實に筆者の愚鈍の致す所では

あるが、地質學的調査が研究室の仕事に比しはるかに多大の日數と努力が要する事は言を俟たない。地理學者の大部分がこの地形のみを主として構造を論じようとするのは地質の根本をしらべるの煩を避けんが爲である。

地形學は極めて大切なる地理科の一分科である。然れども筆者敢ていふ『地質の調査をせずして何の地形學ぞ』と。地形のみを以て構造を論ずる時は一度誤りを犯せばその誤りを眞實らしく説明する爲に尙多くの誤りを敢てしなければならぬ樣になる。短時日に廣範圍にわたる事を研究し得るにしても、それが誤り居るからには、小部分に極めて長時間をかけても正確に調査されて居るものに比し劣る事萬々である。唯怨むらくは地質調査には多大の日子を要し、該努力に對しての發表內容が極めて貧弱に見へる爲、之に專念する人が非常に少ない。故に日本全國の精密調査の終へるのは何十年後とも想像がつかない。地質調査にて一部の構造を明確にし、地形學的にそれを演繹して他を想像するは全く無意義な事ではなからうかと考へる。この意味に於て筆者は地質調査により、明確にされた南方の部分を説明し、のばして全足尾地塊の構造を論じようと思ふのである。

二、足尾地塊の地形概觀

抑々足尾地塊又は足尾山塊と呼ばるゝものは關東山地の東北方に利根川洪函の低地帶所謂利根川地溝をへだてゝ同樣に秩父古生層より成るものゝ稱で、その南部及び西部の境界は凡そ渡良瀨川の流路を以て決定し得られる。東方の八溝山脈との間は、鬼怒川の流路たる鬼怒川地溝を以てへだてられ、北方は中禪寺湖、大谷川の線を以て日光の火山群に接して居る。即ち足尾・大間々・桐生・足利・佐野・栃木・宇都宮・鹿沼・今市・日光 の諸都市にかこまれたる山地の稱である。

今第四紀に噴出せる火山配列の狀態に鑑み、那須・白山兩火山脈を對比して、フオツサマグナ成生以後に行はれし東北日本の西南日本に對する移動量を推定するに、その差約七十粁に及んで居る。即ち北上・阿武隈の古期山地西側に那須火山脈の噴出する狀況が中國・近畿・北陸の古期地塊北側に白山火山脈の噴出する狀況に類似する事を重要視すれば足尾山塊及び岩越の古期山塊は移動に遲れたる爲此處に止まり、那須火山脈を生じたる東北日本の最も重要なる斷層が地下深所より成長し、地表の古期地塊の存在を無視して之を中斷して淺間山に及んだものと解される。之に反し白山火山脈の東端では岩漿の上昇が行はれるに至らなかつたと解釋するのである。此の如く同一存在たりし岩越及び足尾山塊が之を截斷する那須火山脈の上昇力により火山脈に臨む方の高くなれる傾動地塊になる事は當然である。

從つて足尾山塊に於ては北西部に高くてこゝに横根山（一三七三米）地藏岳（一二七四米）氷室山（一一五四米）椀名條山（一〇五二米）根本山（一一九七米）三境山（一〇八八米）鳴神山（九八〇米）の諸峯が並び、漸次南東に向ふに從ひ低くなり、嶽山（七〇五米）大戸谷山（六九三米）高鳥屋山（五一四米）多高山（六〇八米）赤雪山（六二一米）仙人ヶ岳（六六三米）深高山（五〇六米）等何れも六七百米或はそれ以下である。これ等の諸山の間を流るゝ河流は東方に於ては傾動の方向に北西—南東に、即ち利根川・渡良瀨川の地溝の走向に略平行に流れる。滑川・黑川・大蘆川・荒井川・南摩川・粟野川・粕尾川・永野川・秋山川・野上川・彦間川 等がその代表的のものである。南方、南西方に於ては鬼怒川地溝に平行、即ち前述のものに全く直角なる方向を取る河川が多い。その代表的のものは渡良瀨川上流及び桐生川であつて、秋山川・野上川の下流、松田川・山田川等はその例である。これ等河川流路走向は北東—南西のものは主として構造線に關係のあるものであるが、北西—南東線は全然それと無關係のものがある。但し之は筆者の狹範圍の調査の結果なれば精密なる事は尙將來の研究によらねばならぬ。

足尾町の東方數粁の所にはやゝ廣大なる傾斜の緩やかなる部分がある。此處を基として北西—南東河川の浸蝕に殘されたる幾多の小浸蝕山脈の尾根は、ほとんど高低なくして、然もその各所にやゝ廣き平地を殘す所より見て、前記

足尾東方地區及び各尾根の頂上を連ねる面は、略淮平原の遺跡と考へられるのである。但し足尾東方の所は未調査區なれども大体に於て花崗岩より成る樣であるから、此の如き緩傾斜地形の成因は地質的根本相違より生じたるものとも考へられるのである。

三、地　質

1 古成層

足尾地塊の主要部分をなすものは、所謂秩父古生層であつて、筆者の調査したのはその南端のみであるが、その所に於ける堆積時代の古いものより説明しようと思ふ。

(A) 層　序

(1) 葛生層

筆者の葛生層と名付けたものは主として足利郡毛野村より下都賀郡栃木町迄の兩毛線々路以北の標高四百米以下の丘陵に發達する地層であつて、この地層以西に發達する足利層とは、主として斷層で以て境されて居る樣である。岩石は主として白色花崗質砂岩・堅牢黝綠色砂岩・軟質黃色砂岩・白色珪岩・角岩・赤色輝綠凝灰岩・白色及び黝黑色石灰岩より成り、頁岩・粘板岩が極めて少ないのが特徴である。

地層は北四十五度東の走向を持ち、北西方に五十度乃至八十余度の傾斜をなして居る。しかし之は單斜層ではなく幾多の小褶曲をなして居るが、最も主要なるものは小野寺村三谷より皆川村大皆川に通ずる一線であつて、この線にて葛生層は一大背斜をなして而も全体として北西の傾斜を取つて居る樣である。この事は三谷・大皆川線の北西と南東の岩石の配列順位が略同一である事よりしても明瞭である。

この層の最上部は赤見村出流原より三好村戸室・葛生町・を經て寺尾村鍋山の方に至る多くの化石を含む事にて有名なる石灰岩で、多少の赤色輝綠凝灰岩を伴ふ。その下部は砂岩のみにてほとんど他の岩石を含まない地層であり、その下方は極めて厚い白色硅岩・黝綠色角岩と砂岩との互層よりなるもの、更に下方は又砂岩を主とする地層にて兩毛

線富田驛南方には多少の礫岩さへある。その他少量ではあるが、粘板岩・頁岩を含むものになる。更に最下方即ち三谷—大皆川の背斜線の所には粘板岩・頁岩を主として、砂岩・珪岩・角岩をほとんど含まない地層になる。尙前述の礫岩は花崗岩・角岩・砂岩の直徑五糎以下の礫より形成されるものである。

兩毛線々路以南の安蘇郡犬伏町と下都賀郡岩舟村の境界に存する小丘陵三毳(みケ)山は主として頁岩・粘板岩より成り僅かに角岩・珪岩を含むものであるが、之は犬伏町西浦と岩舟村下津原の線にて背斜をなして居る。この事より見てこの三毳山の地層は葛生層最下部の粘板岩層に相當するものと考へられる。唯西浦・下津原背斜線は三谷・大皆川の背斜線の延長より幾分東方の樣であるが、之は斷層によつて移動したものと考へられる。

赤見村赤見東方小丘陵には白色石灰岩の小露頭がある。全体として結晶質にて化石は發見出來なかつたが、出流原・葛生の石灰岩より層序的に下方に位するものと考へられる。

出流原・葛生・鍋山の石灰岩は最も厚い戸室附近にて厚さ約六七十米、その色は純黑のものより白色のものに至る種々の階級あり、又黑白小斑紋をなすものも多い。純黑のものは炭化物に富み、不純であり、白色のものは通常結晶質粗粒である。又黑白斑紋をなすものは海百合の莖の小破片に富むのが普通である。尙又あるものは四五寸の厚さの板を重疊せる樣な薄い層理をなして居るものもある。特に著しいのは、石灰岩層の中に珪岩質の不定形岩塊が含まるゝ事である。その色は通常黑色であるが、稀には灰色の事もある。表面は甚だ凹凸に富み、周圍の石灰岩と明瞭なる境なく、其或物は著しく石灰質であるが、他のものはほとんど角岩と外觀上異なる事がない。又この珪岩質岩塊の中には石灰岩と全く同じ化石即ちフズリナ・海百合の莖等を含む事がある。尙鍋山附近の石灰岩は分析の結果炭酸四二・九九%、石灰五二・八〇%、諸酸化物一・六三%、不溶解分〇・七二%となる。

Productus punctatus Martin

Meekella eximia Eichwald forma majuscula Hayasaka

Orthotetes simensis Tschernyschew

Schizophoria resupinata (Martin) Davidson

Spirifer aff. rockymontanus Marcou

Reticularia lineata Martin

之等は内部構造が不明の爲、外形のみで判断して記載されたものだが、その後内部構造をも見得る良好なる化石を得られ、前記のものはすべて誤つて居るといふ事がわかつた。即ち Productus punctatus は Productus (Echinoconchus) defensus (Thomas) であり、Meekella eximia Eichwald forma majuscula は Meekella gigantea Hayasaka といふ新種であるといふ事がわかた。殊に甚だしいのは Schizophoria resupinata (Martin) と考くられて居たものは種のみならず屬まで異なつたものである事がわかつた。即ち之は Orthotichia japonica Hayasaka といふ新種であつたのである。かくして前に發表されたものは皆名稱が改められ、尙他のものを追加して次の種類が發表された。

Orthotichia japonica Hayasaka

Orthotichia japonica subsp. striata Hayasaka

Enteletes acutiplicatus Hayasaka

Streptorhynchus sp.

Meekella gigantea Hayasaka

Orthotetina Planoconvexa Hayasaka

Orthotetina eusarkos subsp. lata Hayasaka

(？)Daviesiella comoides subsp.

Productus (Echinoconchus) defensus (Thomas)

Spirifer acutiplicatus Hayasaka

Squamularia sp.

Martinia sp.

之等はすべて上部石炭紀を代表するものである。之等の上部石炭紀を示す腕足類は、下部二疊紀のフズリナ石灰岩のすぐ下部に存するもので兩者の間には斷層もなく不整合もない。かくして見る時は此の石灰岩は石炭紀末より堆積を初め二疊紀の初期まで沈積し續けたものと考くる事が出來る。

この石灰岩中の化石は今迄矢部長克・早坂一郎兩博士により研究されたもので、記載されたるフズリナ科化石は

Neoschwagerina sp.

Fusulina japonica Gaembel var.

Fusulina sp.

Fusulina kairimizuensis Ozawa

で特に最後の Fusulina kairimizuensis Ozawa は葛生附近に於ては最も多い。之等はすべて下部二疊紀を代表するものである。

フズリナ以外の化石では常磐村窪倫に於て Londaleia に屬するらしい Anthozoa の破片が記載され、三好村和田より Waagenophyllum と思はれる珊瑚が得られた。しかし之等は示準化石でもなく、又明確な種の決定も出來ないので時代をきめるには役立たない化石である。

最近に至つて面白い研究は早坂博士による腕足類化石の調査である。即ち同博士は寺尾村大字鍋山字門澤のフズリナを產する石灰岩の下方より嘗て次の化石が發表された。

葛生層は今迄述べた如くすべてこの石灰岩より下部に位置し、換言すればそれより尙古い堆積物である。從つてこの石灰岩の中央より上部のフズリナを產する所を除き、他は皆上部石炭紀の堆積物である。最下部の三毫山及び三谷—大皆川線に出る粘板岩・頁岩層は或は中部石炭紀かも知れない。唯フズリナを產する石灰岩の上部のみは下部二疊紀のものである。尙化石に關するくはしい說明は後章に讓る事にする。

葛生層とその西方足利層との間は斷層で境される事は前にのべたが、この斷層は毛野村大沼田、赤見村駒場、同村出流原の線に於て明瞭なるケルンコルの斷層地形をなして居るのは面白い。

【註】斷層の存在する場所に於ては、斷層線にそつて淺鹽行は

れ、その所が直線狀に溪谷と峠との連續をなす事がある。この峠が即ちケルンコルであつて、ケルンコルの峠の前方には丘陵がある。之がケルンパットである。葛生層と足利層の境界に於ては大沼田より駒場の方向への直線溪谷は斷層線を示し、馬坂より駒場に越す所謂越床トンネル南方の峠は一ケルンコルである。赤見村の駒場と西根との間には三つのケルンパットが明瞭に指摘せられ、その延長は出流原の石灰岩丘陵で、更にそれは羽室の石灰岩につゞくものである。羽室以後は地形的には斷層の位置はやゝ明瞭を缺き、船越より常盤村高原への老年谷がこの斷層の延長を示すものとも考へられる。

かくしてこの斷層は、先づ地形的に見て斷層の存在を豫想し、然る後地質調査により明らかにその存在を知つたものである。

(2) 金山々麓砂岩層

太田町北方金山は全山ほとんで石英斑岩から成つて居るが、北麓及び東麓には尙幾分かの古生層が殘つて居る。岩石は主として黃色軟質砂岩、及び風化せる頁岩より成り、

北方の足利層とは全く相違した岩相である。むしろ岩質より言へば葛生層の石灰岩の直下に當る地層のものと或る一致を見るのである。然しながらこの地層の走向北四十度東を延長すれば、足利層の現存する位置に到達するのであるが筆者の考へではこの地層は勿論足利層のものではなく、層序學的にもつと下位のものであつたが、石英斑岩の上騰によつて、それに接する古生層と共に持ち上げられ、今日の足利層の位置まで上昇したものであらうと考へられる。

この古生層は通例北西に三四十度の緩傾斜をなして居て、石英斑岩の岩漿に接觸せる時幾分か燒かれて變質し、ホルンフェルスに變つて居るものもある。くはしくは後章に述べる事にする。

尙この砂岩層の西方は北北東—南南西の斷層線（東武電車桐生支線三枚橋驛より三和村松田、飛駒村番場の方に延びる斷層）によつて西方の第三紀層（後述藪塚層）とは境されて居る。

(3) 足利層

足利層は兩毛線小俣驛以東、毛野村大沼田に至る鐵道線路以北に主として發達し、東方は大沼田—羽室の斷層によつて葛生層に接し北北西方向よりしての松田層の衝上は小俣驛—葉鹿町彦谷—三和村粟ノ谷—同村熊野—北郷村田島宮ノ入—同村田島—同村菅田—名草村名草—新合村下彦間の線にて足利層の上に乘り上げて居る。

走向は足利市以西に於ては主として北六十度東乃至北七十五度東であるが、足利市以東に於ては北四十度東が通常である。地層は二三の褶曲をなして居るが、大部分は北西への傾斜を持つ。從つて北西の方向は大体に於て新しい地層を示すことになる。主なる褶曲軸を示せば

イ、葉鹿町—行道山淨因寺—北郷村菅澤—同村田島宮前（向斜軸）

ロ、足利市—北郷村樺崎—新合村芝本（背斜軸）

以上二つが足利層中の主要褶曲軸である。岩石は上部は白色角岩・硅岩・赤色角岩・黝綠色角岩・黑色頁岩より成り、

中部はそれ等以外に幾分かの黃色及び黝綠色砂岩がまじつて來る。下部は又砂岩の量を減じ、略上部と同性質のものとなる。只下部は石英岩は塊狀となり、層面不明のものが多いに反し、上部は厚さ數糎の層面を明らかに現はすものである。

上部の硅岩には黑色のマンガン鑛を各所に伴ふが、その分量は極めて少なく、表面を僅かに堀ればその鑛石の行方を失ひ、鑛山的價値の少ないものと考へられて居た。しかし筆者の調査によれば從來マンガン鑛として採掘せるものは內部にてその延長のなくなるものではなく、赤褐色の炭酸マンガンに變ずるものである。之によつて考ふれば、從來のマンガン鑛たる酸化マンガンは、むしろ變態のものにて、原石は地下內部の炭酸マンガンである。この炭酸マンガンが空中の酸素により酸化せられたる鑛石が地中何處までも連續すると考へるのは誤りにて、如何なる大なる表面の露頭があるとも、それは空中の酸素のとゞく範圍、即ち十米程にてなくなつて炭酸マンガンに變ずる事は火を見る

よりも明らかである。將來は酸化マンガンの消失により失望せず、更に下部に必ず存する炭酸マンガン鑛よりマンガンを採取する方法を講ずるのが最も重要である。然らずして只地表面のみに產する酸化マンガンより多量のマンガンを得んとするは、木によつて魚を求むるより尙困難な事である。

足利層の最上層の成層角岩は、規模極めて大なるものにて、その一端は行道山淨因寺に大露頭となつて居る。角岩は通常奇巖を造り、風光絕佳となるものである。行道山の栃木縣下十二勝の一に數へらるゝのも偶然ではない。

足利市西方に於ては、赤色硅岩の中に石英脈が入つて居て、所謂赤白硅石となつて居る所がある。昭和八年に足利市には足利金山なる小鑛業所を設け、石英脈附近を盛に採掘して居た。この事業は凡そ半年にて止み、金鑛の實際に出た事も聞かず、金高値に浮かされたる山師的事業として最早世人よりは一顧をもされない狀態になつて居るが、この赤白硅石はむしろ金鑛以上に有利なものではないかと考へる。即ちこの岩石は耐火煉瓦製造に使はれるものにて、耐火煉瓦は又兵器製造その他强火力を要する工業に必要欠くべからざるものである。從つてこの赤白硅石を採掘する事は唯採掘者個人に經濟的利益を與へるのみならず、非常時日本の兵器工業上に、大いに貢獻する所があらうと信ずる。

赤白硅石は方解石脈がその中に入る時には煉瓦を作りし時の耐火度は極めて減少するものであるが、足利市附近に於ては方解石の浸入度は極めて少ない樣で、その點より見ても、この岩石の價値は相當大であらうと思ふ。この岩石は足利市西方のみならず、足利層及び後述飛駒層の各所に多量に存在するものである。

渡良瀨川をへだてた對岸の小丘陵の中、金山附近のものを除いたものは、岩石的に見ても位置より見ても當然足利層に屬するものにて、特にその最上部に相當するものと考へられる。然しながらこの層の走向は全く變じて北七十五度西より東西のものが多い。幾多の褶曲はあるが毛里田村吉澤と强戸村入長岡との間の向斜は最も著しい。この向斜軸は成層角岩より成り、葉鹿町—行道山—北郷村の向斜軸(イ)を形成する角岩に似て居る。之よりしてこの地層は足利層の最上部に相當すると考へられる。

足利層とその東方の葛生層とは斷層を以て境されて居るとはいへ、その層序的位置より見れば整合の關係にあつてその上方に直接に乘るものと考へられる。足利層最下に整合的に存する葛生層最上部石灰岩の上部が下部二疊紀である事より見て、足利層はやはり二疊紀の下部を示すものと考へられる。

【註一】 葛生層、足利層を說明するに當り筆者は褶曲、背斜(背斜軸)、向斜(向斜軸)といふ言葉を使つた。今之を簡單に說明する。地層堆積の最初に水平に堆積せるものが今日我々の目の前に傾斜せる地層となつて露はれるのは多くの場合地層が橫壓を受けて褶曲して居るからであつて、兩側に地層の傾いて居る波の頂きの部分では地層は背斜構造をなすと言ひ、傾斜した地層の會する谷に當る部分では地層が向斜構造をなすといふ。而してこの波の頂上或は谷の底部に當る所を貫ぬいた方向を夫々背斜軸及び向斜軸といふ。この背斜軸及び向斜軸は狹範圍に於ては略直線狀に續くものであるが、何處迄も繼續するものではない。又一層廣い地域の地質構造に着眼すれば此の如き背斜及び向斜の多數の波が、全体として大背斜或は大向斜を造つて居る事も屢々ある。

【註二】 整合、不整合といふ言葉をも使つたが、これは後章第三紀層の最後にくはしく說明する事にする。

(4) 松田層

この地層は前述小俣驛—葉鹿町彥谷—三和村粟ノ谷—同村熊野—北郷村田島宮ノ入—同村菅田—名草村名草—新合村下彥間の線にて北西より足利層の上に衝上げて居る地層である。この露出範圍は割合にせまく北方は境野村諏訪—三和村粟ノ谷—三和村松田原向田—飛駒村中木戸の線にて整合的に飛駒層に接して居る。

この衝上斷層は極めて緩傾斜にて足利層の上に乘り上げたらしく、この事は足利市—北郷村江川—同村田島—名草村田澤の方向に走る東落斷層により、それ以東に著しく南

方まで松田層の發見せらるゝ事によつても明らかである。

走向は西方境野村附近に於ては略東西に近く、東すれば北六七十度西になり、更に東方は北六七十度東に轉移する。傾斜は南方へのものも多いが主として北方のもの多く、北郷村田島—新合村須花の間には明らかな背斜軸がある。

岩石は主として黄色軟質砂岩、黝綠色堅牢砂岩・白色花崗質砂岩であつて僅かの霜爛頁岩・粘板岩及び角岩がある。砂岩地帶の特性として層面不明の箇所多く、調査には非常なる困難を感じた。唯その中に少量含まるゝ角岩及び霜爛度の少ない頁岩により、僅かにその構造を知つたのである。

松田層の時代については化石を含まない故に全然決定は不能であるが、岩質的に見て極めて葛生層に類似せる事を見るのである。而もこの地層の直上に整合的關係にある飛駒層の下部には名草村勘定谷戸、三和村深高山南方に石灰岩を産する。之等は花崗岩に接近せる故にほとんど皆結晶質即ち方解石になつて居て、化石の存在は認められぬが、前述葛生層と足利層の境界たる出流原、葛生、鍋山の大石灰岩と同層序ではなからうかと考へられる。例へ純粋の同一層といふ事が出來ないにしても、地質時代の眼點よりは同一と見做して差支へないと考へられる。かく考へる時には松田層は葛生層と全く同樣に上部石炭紀を代表するものであらうと思考される。

【註】地層が一度斷絶して他の位置に再び露はれる事がある。この斷絶面は二種に分類され地表に起伏がある爲に生じたものを「地辷り」と稱し、地球内部に原因のあつて生じたものを斷層と稱する。斷層の最も一般的の運動の仕方は地層の張力の爲、一地塊が斷層の相對的運動に於て垂直乃至之より小なる傾斜面を辷り落ちた樣に見へる場合であつて、之を正斷層といふ。之に反して壓力を受けて決裂した時には九十度を越え、押し上げた形に見へる。之を逆斷層といふ。逆斷層が極端になり一地層が薄く他層の上に押上げられたる時は之を衝上斷層といふ。地層は通例古い堆積にかゝるものが下方に位置するが、衝上斷層による時には古いものがむしろ新しい地層の上に乘りかゝるのが普通である。足尾山塊

南端に於ける衝上斷層は、新堆積層たる足利層の上に古い松田層が乘つて居る。

(5) 飛駒層

之は砂岩を主とする松田層の上部に整合的に乘る地層であつて、前章にて述べたる樣に、その境界は境野村諏訪—三和村栗ノ谷—三和村松田原向田—飛駒村中木戸の線にて松田層に接して居る。全体として幾多の褶曲をなして居るが、最も主要なるものは菱村宿島—同村小友—仙人ヶ嶽南方—赤雪山—老の越路—飛駒村番場に續く背斜軸にて、之以南は走向北七八十度東なるに反し、背斜軸以北は北四五十度東になつて居る。この背斜は松田村湯の澤より西方に走り、仙人ヶ岳南西方に於て急に方向を變じて北東方仙人ヶ岳より飛駒村皆澤南方に連る大角岩層を追跡すれば明瞭にわかるのである。

この大背斜軸の南北には略々之と平行な幾多の小褶曲がある。この小褶曲を列記すれば左の樣である。

イ、菱村上小友—小俣町森出—同町岩切

（小背斜軸）

ロ、菱村一色—小俣町荒倉北方一粁—三和村湯ノ澤

（小向斜軸）

ハ、菱村宿島—同村小友—仙人ヶ岳南方—赤雪山—老の越路—飛駒村番場

（前述大背斜軸）

ニ、菱村菱平—仙人ヶ岳西方—穴切峠—飛駒村皆澤

（斷層を伴ふ小向斜軸）

飛駒層の西方は桐生市—湯澤—二渡—入彦間の斷層、即ち略桐生川の流路によつて西方の大間々層に接して居るが、この斷層の落差は可なり大なるものと考へられる。

岩石は主として白、赤、黝綠色の角岩、硅岩及び黑色頁岩、粘板岩より成り、少量の黄色軟質砂岩と黝綠色堅牢砂岩が之に伴つて來る。之等の岩石が足利層のものと一致するのみならず、硅岩にマンガン鑛を多く附隨する事、及び石英脈が入つて所謂赤白硅石になつたものが可成り多い事等足利層に近似して居る事が大變多い。しかのみならず飛駒層の下部には前にも述べたる如く名草村勘定谷戸及び三

和村深高山南方に石灰岩を産し、尙下方に主として砂岩より成る松田層(葛生層に類似)の來る事より見て、飛駒層が足利層に對比さるゝ事は疑ひを入れない。從つて飛駒層の主要部が下部二疊紀を代表する事は勿論である。但し化石を欠く故に明確なる石炭・二疊紀層の境界は不明であるが、下部飛駒層は或は最上部石炭紀かも知れない。

三和村湯ノ澤の北方には小規模であるが花崗岩を産する。この周圍の粘板岩はこの火成岩に燒かれて、ホルンフエルスに成り、やゝ離れたものはその中に多くの菫青石を生じ、所謂櫻石になつて居る。櫻石は流されて渡良瀬川原に入り、足利市近傍に於ては何程にても採取出來るものである。

【註】ホルンフエルス、菫青石、櫻石については、後章三和村花崗岩の最後に説明する。

(6) 大間々層

桐生川の谷によつて明瞭にあらはさるる大斷層にて、それ以西と以東とには地層に可なりの相違が出來て來る。即ち桐生川以東の飛駒層には輝綠凝灰岩を全く含まないが、以西の大間々層には各地にその岩石を多く挾んで居る。走向は主として北四十五度東にて傾斜は部分的に幾分の相違あるも、南東に七八十度のものが最も多い樣である。この地層は他の足利層、飛駒層その他に比して可なり大なる厚さを持つて居て、この地層を造る主要岩石は頁岩・粘板岩であるが、それ以外の副成分たる含有岩石により、次の三部に分つ事が出來る。

(A)上部頁岩層　大間々層の東方、即ち相生村蕪町より梅田村山地を貫ねる線以東に發達し、頁岩・粘板岩を主とするも、白色塊狀硅岩・成層角岩・黃色軟質砂岩・綠色輝綠凝灰岩の少量を伴つて來る。唯この地層は頁岩・粘板岩以外のものが極めて少ない故頁岩層といふ名稱を附した。桐生市西堤町の西方には輝綠凝灰岩に伴つて小石灰岩が出るが、之は極めて品質の惡いものにて、化石は全然に含まれて居ない。

この上部層は大体より見て大間々層の他と同じく單斜構造にて北西への傾斜を持つのが普通であるが、桐生市西堤町―同市天神町の間は小向斜軸をなして居る樣である。その傾斜は共に南東方へであつて、唯桐生中學校より桐生市西方丘陵丸山・同通稱富士山・吾妻山に通ずる角岩の廻轉狀態より褶曲の存するのを知るのである。

(B)中部輝綠凝灰岩層。この中部は福岡村淺原・小平・折內・狸原・鳴神山・梅田村鍋足に連る綠色大輝綠凝灰岩層を中心とする地層であつて、幾層もの綠色及び赤色輝綠凝灰岩がその上下に存在する、輝綠凝灰岩以外には白色硅岩・角岩・黃色砂岩を少し含むが尙多量の黑色粘板岩・頁岩がある。之等頁岩・粘板岩は皆幾分凝灰質になつて居て、輝綠凝灰岩に漸次轉移する。走向は主に北四十五度東、單斜的に南東方に七八十度の傾斜を持つて居る。

石灰岩は矢部博士によれば川內村大崩東方同村山田、及び福岡村瀨見附近等に產する如く記載してあるが、之等は筆者の調査の粗漏なりし爲か、或は又皆石灰を取る爲に採取し終へたものか、不幸にして發見する事が出來なかつた。唯川內村川面附近にフズリナを含む小露頭を見たのみであつた。

筆者の未調査區ではあるが、梅田村山地及びその北東六粁の根本山にも石灰岩が出るらしく、特に山地に於てはその厚さ三十米以上の大露頭にて、その中にはフズリナの化石を產すると矢部博士は言つて居られる。この石灰岩は上下共粘板岩に接して居るらしく、その走向より見て、この石灰岩は大間々層の中部輝綠凝灰岩層に屬するものと考へて大差ないと考へられる。

(C)下部角岩層　大間々層の下部は中部輝綠凝灰岩層の北西にあり、西方は渡良瀨川の上流によつて赤城火山その他の火山岩地帶と境して居る。單斜構造なる故走向傾斜は中部層と全く同樣にて走向北四十五度東、南東へ七八十度の傾斜を持つて居る。岩石は中部と幾分かの共通性を持つて居て、粘板岩・頁岩多きも、輝綠凝灰岩の量は極めて減少し角岩・硅岩等硅質の岩石の量は逆に極めて大となる。筆者の命名せる角岩層の名稱は頁岩の多いのは何れの大間々層

に於ても共通にて、唯角岩の含有量が他に比し著しく大となる故にかく名付けたものである。石灰岩にては昔ヘリコプリオンを産した事を以て有名になつた花輪の石灰岩がある。足尾線花輪驛の對岸の所に於ては石灰岩は現今ほとんど見られず、むしろそれより一つ南の停車場たる水沼驛東方八木原に小鑄頭が澤山ある。皆余り厚層ではなく、最も厚みを有する所に於ても十米以下である。

花輪附近の石灰岩中よりは

Helicoprion bessonowi Karpinsky

が産し、之はロシヤの石炭紀と二疊紀の間にあるアルチンスク層に出るものに全く一致する。このアルチンスク層より出る化石の六分の一は二疊紀を示すものなる故、之は最下部二疊紀と現在考へられて居るものである。

花輪石灰岩がアルチンスク層に相當し、從つて最下部二疊紀をあらはすものとすれば、この附近に於て最下部二疊紀を示すものは足利層及び飛駒層である。足利層を見ても飛駒層を見ても、或は又この最下部大間々層を見ても、その下方に石灰岩を持つ事は果して偶然の一致だらうか。かくして見る時、大間々層の下部角岩層が足利層や飛駒層と同層序と考へるのは決して無謀とは思はれない。唯下部角岩層に多少の輝綠凝灰岩を含むのは堆積時の狀況の幾分かの相違の爲であらう。從つて中部輝綠凝灰岩層及び上部頁岩層は、足利層、飛駒層より更に上部の新しい地層を代表する事は勿論である。

(B) 古生層中の化石

古生物に關しては先に各その産する地層中に於て、その名前だけは列記したが、今改めて詳細に之を說明し、その堆積時の狀態をも考へて見たいと思ふ。前にものべた如く葛生層最上部石灰岩中には無數の化石を含むが、之等のものは主に早坂一郎博士により研究せられたものである。寺尾村鍋山字門澤の石灰岩層の下方より産する腕足類は前に一度書いた樣に、次の如きものである。

Orthotichia japonica Hayasaka

Orthotichia japonica subsp. striata Hayasaka

Enteletes acutiplicatus Hayasaka

Streptorhynchus sp.

Meekella gigantea Hayasaka

Orthotetina planoconvexa Hayasaka

Orthotetina eusarkos subsp. lata Hayasaka

(?)Daviesiella comoides subsp.

Productus (Echinoconchus) defensus (Thomas)

Spirifer aculiplicatus Hayasaka

Squamularia sp.

Martinia sp.

之等の化石の中、最も多數に産するものは Orthotichia japonica であつて、初めは内部構造まで判明する樣なる完全なものがなく早坂博士も誤つて Schizophoria resupinata であらうと考へられた事は前にも述べた通りである。その後完全なる化石を得て、之を切り磨き、内部構造が明らかになるに從つて、Orthotichia に屬する事がわかつて來たのである。然るにこの Orthotichia japonica は形が大變大きい。恐らく現在知られて居る Orthotichia 屬の中にて最大のものであらう。尙又 Meekella gigantea も Enteletes acutiplicatus も亦極めてその形態の大なるものであつて、Meekella gigantea は初め早坂博士は Meekella eximia と考へられたが、後者も形は大變大なものであるが、前者はそれよりはるかに大きく、從つてこの二つは異種であると考へらるゝに至つたのである。この形の大きさこそ異なるが本來の Meekellaeximia はロシヤの Donets Basin の上部石炭紀に出るもので、すべて日本鍋山産の Meekella に比し、その形は遙かに小さいものである。Orthotetina eusarkos var. lata は蒙古より産する Orthotetina eusarkos の變種であつて、之又原種にくらべて甚だ大である。

之等化石の特に大なる事は、それ等古生物の生存し居たる時代のこの邊りの狀態を考へる上に興味ある點である。今この事について考察して見よう。

古生代の海棲無脊椎動物の中、他に目立つて大なる介殼

を持つたものゝ化石は岐阜縣赤坂町附近のフズリナ石灰岩層より出る軟体動物である。即ち巻貝の中では Pleurotomaria, Naticopsis, Bellerophon 等があり、二枚介の中には Solenomorpha elegantissima Hayasaka が最大のものである。この赤坂のものも鍋山のものも共に黑色瀝青質石灰岩中に大形化石が含まれ、共に海棲無脊椎動物であるのも興味ある事である。この事はこの黑色瀝青質石灰岩が堆積する時の物理的狀態が、これ等の介の成長に影響を與へたものと考へられる。しかし實際のその間の關係は現在の研究範圍に於ては說明は不能である。

この問題に關しグラボー教授の研究されたる「モンゴリヤの二疊紀」の中の Jisu Hongueг Limestone の中の化石の大變小さい事に考へを及ぼすれば、面白いと考へられる。同教授の實驗によればその時のモンゴリヤ二疊紀を堆積したるペチリ灣の海棲動物は河水によつて鹽分がうすくなり、或る軟体動物はこの灣外に棲んで居た原種より遙に小になつたと言つて居る。グラボー教授は尙又他の二疊紀の腕足類の形の小さいのは、同樣鹽分の減少による變態であると考へて居られる。

廣い意味に於て水の鹽分の多少が生物の成長に影響するといふ事は誰にも考へられる。若しグラボー教授の說が確認され、その逆も亦正しいと假想するならば、海の鹽分の增加が動物の形態を大にする事も考へられる。

モンゴリヤ二疊紀の腕足類について、グラボー教授は他の化石が皆小さくなつて居るにも拘らず Spirifer のみはほとんどその影響を受けて居るとは考へられないと言つて居られる。鍋山產の Spirifer acutiplicatus も他の同屬に比して大きさのほとんど相違のない事より見て、Spirifer は鹽分の濃淡によつて成長に影響を與へられる事の少ない屬であると考へられるのである。

現在に於て南洋方面の海棲動物は大きく重い介殼を持つて居る事が通常である。この事は無論多くの原因によるであらうが南洋地方の氣溫の高い事より鹽分の濃くなつて居る事は考へられ、將來この鹽分と介殼の大きさの關係についての解決の上に大なる光を投げるであらうといふ事は考へられる。しかしながら南洋地方に多い珊瑚礁附近の海中に棲む大きい貝類は海水中の多量の炭酸カルシウムにその原因がある事は考へられる。何れにしてもモンゴリヤ二疊紀と日本の鍋山石灰岩を堆積した二疊石炭紀の海とは、その性質が逆であつた事は想像出來るのである。

(C) 化石の地質學的時代

前述の樣に腕足類はフズリナの出る地層より下部から出で、腕足類を產する地層中にはフズリナの破片すら發見されない事よりして、この二層間に化石の不連續のあるのは確かである。この上部のフズリナに付いての說明は後の事にして、今腕足類について說明すれば前述十二種のものは皆外國の二疊紀から石炭紀までに發見される種に近いものであつて、中には Visean のものとさへ思はれる性質を持つたものもある。

種の大部分は新種であるから、同種の化石を產する外國の地層には對比は出來ないが、Streptorhynchus, Orthotetina, Martinia 等の屬は下部石炭紀より二疊紀迄出るものであり Orthotichia, Enteletes, Meekella, Squamularia は上部石炭紀より二疊紀に出る屬である。從つて之等の化石を全体として見る時はこの堆積時代は Uralian より古くとも絕對に新しいとは考へられない。

大部分の化石は早坂博士の命名せられたる新種であるが、之等の化石の性質を組合はせて見れば、それ等の化石の生活して居た時代の中の古い時を代表する事がわかる。全体としてロシヤの Moscovian fauna に極めて類似したものである。全体より見る時從來日本及び外國に於て二疊紀のものと可成りの相違がある。唯 Orthotetina eusarkos lata はモンゴリヤの二疊化石に密接なる關係がある樣だが、之は僅か一個發見されたるのみにて Orthotetina eusarkos の亞種とするのは暫定的のものであつて或は可なり緣遠いものであるかも知れない。

Orthotichia japonica はスマトラの Podang から出る Dalmanella frechi Fliegel に大變似て居る。唯スマトラの

ものは鍋山産のものに比し身体が小さく、且 dorsal valve の Median sinus があるだけの違ひである。

Enteletes acutiplicatus Hayasaka は Kansas Pennsylvanian から出る Enteletes plattsmouthensis Newell に近い種であるが形が極めて大きい。又Salt-Range に出る Enteletes latesinuatus Waagen にも似て居る。この二つの化石は日本産のものと同様二三の褶襞があるのが特徴である。唯米國産の二種の化石の類似點はむしろ日本産のものと Enteletes ferruginens との類似點より小であるのは面白いことである。この大變褶襞のある Enteletes ferruginens は Waagen によつて Salt-Range より出る種の中、最古の Enteletes であると考へて居られる。又 Glass Mountains から出るParenteletes cooperi King も日本種と同様褶襞の極めて多いものであるが、之は Lower gaptank 即ち Middle Pennsylvanian（上部石炭紀の中部）から出るものである。

Meekella gigantea Hayasaka は非常に Meekella eximia Eichwald に類似する化石である事は欺ひもない。

唯形が大變大である。Yokowlew氏は曾て大きなMeekella eximia を記載されたが、之とて五十五糎の長さしかないものである。この形の大きさや成長の習性について考へて見るに、この化石の生きて居た時の周圍の事情の特別性によるのかも知れぬが或は日本の物はロシヤの生物より古い形であるのかも知れない。換言すれば前者は後者の幾分か祖先に當るのだらうと考へられる。Meekella eximia は ヨーロッパ及び北アメリカにて上部石炭紀としての重要なる示準化石である。ロシヤ に於ては 同時代を示すものに Meekella striatocostata があるが之も亦日本種に可成り類似した形態を持つて居る。又二疊紀であるテキサス州の Glass Mountains から出る化石の Meekella grandis King も極めて近接せる生物であつて、介表面の褶襞やその習性は大變似て居る。しかし介殼面が日本種のものよりはるかに平たく、又褶襞の數も幾分多いのが兩者間の相違である。

Orthotetina planoconvexa Hayasaka は モンゴリヤの二疊紀層より産する Orthotetina ruber(Frech) に幾分かの類似點を持つて居る。しかしこのモンゴリヤ種は極めて少ない材料にてグラボー教授が書いたものであつて、内部構造は少しも見ず、唯全体の形とその曲り工合によりこの種を決定したものであつて、同教授自身も極めて種決定には危いものであるといつて居られる。日本産化石はモンゴリヤ種に密接に關係はあるが、全然他種のものであるといふのは確かである。

Orthotetina eusarkos Abich subsp lata Hayasaka は ペルシヤ及び支那より出ずる Orthotetina eusarkos に極めて類似する爲、その亞種と考へられて居るものであるが、日本種は支那種、ペルシヤ種に比し、はるかに平たい介殼を持つて居る。最近グラボー教授はモンゴリヤの二疊紀層から Orthotetinacfr. eusarkos が出たと言つて居られるが、之は保存のよい化石ではなく、果して本來の Orthotetina eusarkos との間に如何程の類似點があるやは疑はしい。しかしながら日本産化石との關係を考へる上には見逃がす事の出來ないものである。

(?)Daviesiella comoides (Sow) sub. はモンゴリヤの石炭紀層より出ずる Daviesiella comoides に極めて類似する故、その亞種と考へられて居るものであるが、原種の様に平たくなく且形が大變大きい。最近 ベツケルマン氏 はドイツの石炭紀層より Daviesiella comoides var. rhenana といふ變種を記載して居られるが、之は日本種程介表面の裝飾がまばらでない。又デレビン氏は白耳義の Visean 層から Daviesiella comoides var. destinezi (Vaughau) が出ると述べて居られるが、之は日本種より更に丸くふくらんで居る點に相違がある。

Productus (Echinoconchus) defensus (Thomas) の原種は英國の Upper Visean に出るものである。

Spirifer acutiplicatus Hayasaka は コロラドの石炭紀層より出る Spirifer aff .rockymontanus Marcou に類似の化石である。又數年前印度支那の東京の石炭紀層より Spirifer cfr. grandicostatus が出たといふ事は Mansuy

氏が記載されて居るが、之は保存狀態は余り良好ではないけれども形態的に見て英國産の原種に近いものであるが、鍋山産化石とも大變似て居る事は一考を要する。

Squamularia sp は少なくも二種に分けられる樣である。即ち Concentric wrincle の密なものと粗なものとである。前者は Squamularia quadalupensis に後者は Squamularia waageni に類似するも、尙研究を要する。

Martinia sp. は支那の Kweichow の Wangchiapa Limestone から出る Martinia remota Chao に似るも、その外廓に幾分の相違がある、即ち日本種は幾分五角形をなすも、支那産のものは卵形である。五角形の外形をなすものには中部石炭紀層中によく發見される Martinia triquetra Gemm var. pentagona Groeber が最も日本種類似の化石である。鍋山より産する Martinia は前記五角形種の外に形のやゝ長くのびたものがある。この長い種に似た外國種には、下部二疊紀の Guadalupian Fauna の中より出る Martinia rhomboidalis Girty がある。

以上細述した十二種の化石の中 Orthotetina planoconvexa Hayasaka 及び Orthotetina eusarkos Abich subsp. lata Hayasaka の二種のみが二疊紀層の下部に産するものに近い樣であるが、これとて共に新種である故必ずしも石炭紀には産しない化石とは言ひ得ない。その他の十種は皆石炭紀を示すものである。從つて鍋山の石灰岩の下部は最上部石炭紀と見て差支へないと考へられる。

これ等腕足類を産する瀝青質石灰岩の上部には無化石の部分數十米あり、その上にフズリナを産する石灰岩となるのである。こゝより出たフズリナ科の古生物は

Neoschwagerina sp.

Fusulina japonica Guembel var.

Fusulina sp.

Fusulina kaerimizensis Ozawa

である。之等の化石より考へる時は、この石灰岩はウラルの Urtinsk Salt Range の上部及び中部プロダクタス層と共に二疊系のものである。何故ならば Fusulina japonica は故小澤博士によれば下部二疊紀層に限るものであり Fusulina Kaerimizensis はロシヤのウラル二疊紀層より極めて多量に出るものである。他の二種は屬名のみで種名の決定は見ないが Neoschwagerina erahiculiera は何時も Fusulina japonica や Doliolina lepida と伴つて赤坂の石灰岩に於ては下部二疊紀に出るものである。

以上のべた事より出流原—葛生—鍋山にまたがる葛生層最上部石灰岩は下方は最上部石炭紀、上方は最下部二疊紀を示し、從つて葛生層はこの石灰岩の上部を除いては上部石炭紀に、足利層は下部二疊紀を代表する事がわかるのである。尙大間々層の中部輝綠凝灰岩層の中の川内村川面附近のフズリナ及び矢部博士の報告になる梅田村山地の石灰岩中のそれは共に種の決定は困難だが前記下部二疊紀のものに似て居る樣にも考へられるのである。

之等の外前にも一度述べたる裟輪附近より得たる Londaleia sp. や和田より出たといふ Waogenophyllum sp. その他の珊瑚類、鍋山より得たと言はれる Bellerophon sp. 及び各石灰岩に入る海百合の莖よりしては、時代決定は全く困難である。唯 Bellerophon sp. のみは赤坂二疊紀層に出るものに酷似して居て、その二疊紀層たる事を暗示して居る。

最後に重要化石の一つとして花輪附近より出たと言はれるヘリコプリオンについて說明しやうと思ふ。このヘリコプリオンといふ化石は明治二十年代に發見されたるもの唯一箇であるが、時代決定には極めて重要なる化石であつた。即ち之は熔融劑として使用する爲に花輪より足尾銅山に送られたる暗鼠色の石灰岩の中に、海百合の莖の化石と共に出たものであつて、最大莖二十二糎程の薄平たく螺旋狀に三卷余り卷いた黑色の一見中世層に出るアンモン貝に似た形を持ち、初めは或は古生層の鸚鵡介ではなからうかと考へられて居た。故巨智部博士がロシヤに行かれたる時にこの化石の寫眞を持參され、諸學者に之を示されたが全然不明であつた。その後ロシヤのカルピンスキー氏は彼地の地質を調査中、前に寫眞にて見たる日本花輪産のものに

酷似せる化石を發見された。ロシヤ產のものは極めて保存良く、完全なるものであるが、日本產のものは化石の要點の明瞭さをやゝ欠くけれども同種又は少なくも同屬のものであると考へらるゝに至つた。

筆者は花輪產の化石を說明する代りに、形のより完全にとゝのつたるロシヤ產のものをカルビンスキー氏の論文によつて說明しようと思ふ。何故ならば兩化石とも筆者が直接見たものでなく、寫眞によつてその眞の形態を想像するのみであるから、その產地の遠近は問ふ所でないのである。

ロシヤ產のものは外形はアンモン貝に類するも研究の結果意外にも板鰓類に屬する魚類の齒の列にて、カルビンスキー氏は之に次の新種名を附せられた。

Helicoprion bessonowi Karpinsky

この化石の形は平たく、左右對稱の螺旋形をなし、螺旋の卷きは互に接觸せず、その數三回半余である。この螺旋は幾多の鎌形の關節が橫に密に並列して成れるものであつて、各關節は鎌形の曲り目より螺旋の外方に巾廣くなり、

その端は鋸齒狀をなして、鮫齒に似た齒をなすものである。關節の大きさは螺旋の卷が大となるに從ひ增すものであつて、關節の總數は百三十六に達す。其中外部の卷に五十、中部に四十三、內部に三十五ある。この標本の最大直徑は二三八粍ある。關節の物質は全く骨質を交へず、關節の外には所々に微細なプラコイド鱗の集合體がある。

カルビンスキー氏はこの化石の構造を尙顯微鏡的及化學的に研究した後、之は板鰓類に屬する事を結論せられた。而してその齒の魚体に於ける位置關係を想像するに、箇々の齒はプラコイド鱗を有するあの柔軟体の中に挿入し、互に螺旋狀に接合して魚類の上顎に附着し、中央前部に突出した强い攻擊の武器であつたであらうと考へられて居る。

この化石の產地は、ウラル山脈の西側のヨーロツパロシヤのペルム州クラノーフイムスク町近傍の石切場とその他一ケ所に出たもので二疊石炭紀のアルチンスク層に屬する化石と共に發見せられる。ロシヤのアルチンスク層といふのは、石炭紀と二疊紀の間にあつて、石炭紀のフズリナ石灰岩の上に整合的に乘り之は最下部二疊紀のものと考へられて居る。とも角アンモン介だと考へられて居たものが魚類の齒であつたといふ事は極めて珍らしい事である。

かくして大間々層の下部角岩層の最下部の石灰岩はロシヤのアルチンスク層に相當し最下部二疊紀層だとすれば、その中部綠凝灰岩層、上部頁岩層は尙それより上部に當り、皆二疊紀のものといふ事が判つたのである。尙下部角岩層が最下部二疊紀層なる事よりして、前に述べた如く最下部二疊紀層たる足利層や飛駒層に對比さるべきものである事は明らかである。

これ等すべての古生層化石が、海棲動物である事よりして、この地層は海底に堆積せるものである事は明らかであるが、今その岩質より見てこれ等を堆積せる海の狀態を考へて見ようと思ふ。

抑々之等水成岩の粒の大きさは、之を運搬せる河川の狀態にも支配さるゝも、海岸に近接せる淺海には礫岩、砂岩等大粒のものを堆積し、海岸より離るゝに從ひ粘板岩、頁岩等粘土質岩石を沈積するに至るのである。角岩・硅岩・石灰岩等有機質岩は從來深海性岩石と考へられて居た樣であるが、必ずしも深海ならずとも之等は生成し得る事は近時の地質調査により判明するに至つたのである。

かくして見る時葛生層及びそれと同時堆積と考へらるゝ松田層を形成する大部分の岩石が砂岩であり、殊に富田驛南方に少量ではあるが礫岩を產する事より見て、この層を沈積した海は石炭紀末には海岸より余り距たざる淺海であつた事がわかる。この事は葛生層最上部石灰岩中の化石が鹽分の多い海の產である事と考へ合はして、淺海なりし故に水分を多く蒸發し、從つて濃鹹性の海となつたと考へられる。而もこの海の沿岸附近の山地は、主として花崗岩より形成されて居た事は富田附近の礫岩中に多くの花崗岩の入る事、及び砂岩の大部分が花崗質である事より明らかである。

足利層、飛駒層及び大間々層の下部角岩層を堆積した時代、即ち二疊紀の初めには、この海の全体が沈降し、深海

となつた事は、砂岩の減少と頁岩・粘板岩の非常なる增加によつて示される。この頃にはこの邊りの西方に當つて海底火山の活動が初まつた事は、下部角岩層中に輝綠凝灰岩の介在する事より考へられる。足利層・飛駒層にこの岩石の全く入らないのは、この火山活動は極めて微弱にて、遠方迄火山灰を散布し得なかつた爲と考へられる。この火山が陸上にて爆發せるものでなく、海底のものであると考へた理由はこの火山灰が半深成岩たる輝綠岩質であるからである。若し之が陸上火山とするならば、當然玄武岩質とならなければならぬ筈である。

大間々層の中部輝綠凝灰岩層の堆積時には西方の海底火山の活動力益々大となり、こゝに大規模なる輝綠凝灰岩の堆積を行つたのである。この火山活動の激烈さは、その層の厚さより見ても恐らく我々の想像も出來ない程大なるものであり、その火山灰の散布も恐らく數百粁若しくはそれ以上の遠方に迄達したものと思はれる。從つて足利層の上方にも中部輝綠凝灰岩層に相等するものがあつた事は考へ

るに難くない。唯その地層はその後の長日月の間に浸蝕消失してしまつたものであらうと考へられる。大間々層下部と中部の堆積時の間には、地盤の昇降は多少はあつたにしても大なるものはなかつたと考へられる。それは砂岩・頁岩・粘板岩の量にほとんど增減を見ない事より明瞭である。

大間々層上部頁岩層堆積時代になつても海底の深さにはほとんど相違がなく、唯海底火山の活動力は非常に弱り、從つて火山灰の散布も小規模になつた事は、この地層の輝綠凝灰岩の減少によつて知られる。

Ⅱ 第三紀層

第三紀層の分布は極めて少ない。筆者の調査せる範圍内に於ては、下都賀郡岩舟村近傍及び群馬縣新田郡藪塚本町と强戸村附近の丘陵の南西側にやゝ廣く存在するのみである。

1. 岩舟村近傍のものは主として岩舟山に產し、露頭惡くしてその最下部を極め難きも、その基盤たる古生層とは斷層を以て境して居る樣である。走向は東西乃至北七十度東で南に七八十度の傾斜を持つて居る。最下部は凝灰質のやゝ少なき砂岩より成り、中部は凝灰質角礫岩、上部は凝灰質砂岩・凝灰岩及び砂岩を主として居る。最下部のものは所々に輕石樣のものを含み厚さは數十米、中部の凝灰質角礫岩は流紋岩・玢岩・安山岩・瀝青岩等火山岩の碎片堆積凝灰したるものにして、岩舟石の名にて切り出されて居る。この岩石は角礫岩特有の水蝕に對しては堅牢ではないが凝灰質なれば火に對して極めて丈夫である。外觀は余り美麗ではない故に土臺石、階段石として主として使はれる。この角礫岩中には各所に樹木の破片が入つて居る。大部分のものは白色に腐蝕して居て、その種類は不明である。この層の厚さ約五六百米。上部は岩舟山南東部に露れ、中部に比し粒細くなり、やゝ粘土質の所さへある。極めて稀に二枚介の破片を含む。之は非常に不完全なるものにて筆者の採取せしものにては全く種屬の決定は不能である。岩舟山に於けるこの層の厚さ約十米。

この他岩舟山南東方約二粁の同村字靜近傍の數個の小丘陵は岩舟山上部地層に似たる凝灰岩より成り同樣第三紀層のものである。之は位置、岩質よりして岩舟山上部地層より更に上位に相當するものと考へらる。

2. 群馬縣新田郡のものは同郡と山田郡の境界にある小丘陵の南西麓にあり、走向北六十度西、南西に十度—二十度位の傾斜をなす。岩石は主として凝灰岩にて、凝灰質砂岩及び頁岩がその間に累層し各所に雲母安山岩の岩屑、時には直徑三米に及ぶ樣な大片まで介在する事がある。北東の基盤たる古生層及び石英斑岩とは斷層を以て境して居る。この第三紀層中には時に玢岩の岩脈が通過して居る樣な所がある。凝灰岩は藪塚石又は靑石の名を以て石材として藪塚、湯ノ入、入長岡の各所で採掘して居る。用途は岩舟石と同樣階段石・土臺石に主として使はれる。石切場の工夫の言によれば極めて稀に介化石を含むさうであるが筆者は不幸にして一個をも得る事が出來なかつた。藪塚及び入長岡には鑛泉がある。共に第三紀凝灰質砂岩中より湧出

するものである。

以上述べたる二ケ所の第三紀層の堆積時代については肝心の化石の不明の爲、その決定は不能であるが、足尾地塊近傍にある既に時代決定の第三紀層との岩石的對比も無駄ではなからうと想像さる。從來最も多く探究されたものは壚原附近の第三紀層である。

矢部教授等の研究によれば次の如く決定されて居る。

A、關谷層群　礫岩、浮石凝灰岩、玻璃質凝灰岩、砂岩泥板岩互層（之等の間には薄き亞炭層を夾み、海産介化石稀にあり）下底には局部的に發達する厚い礫岩層あり（海産介化石に富む）

〰〰〰〰不整合〰〰〰〰

B、鹿ノ股澤層群　石英粗面岩質砂岩、泥板岩及び凝灰岩（數多の海産介化石層あり）

C、福渡（フクワタ）層群　主として無層理石英粗面岩質凝灰岩。下底に礫岩あり（介化石多し）

鹿ノ股澤層群及び福渡層群は整合關係にあり、この間に少なくも四つ以上の化石帶あり。

Pecten kaneharai Yokoyama

Docinia kaneharai Yokoyama

が特に多く、すべて海産のもののみである。横山博士の化石鑑定によれば、この二層群中より發見されたる化石は三十種、その中五種は鑑定が不充分であり、殘り二十五種の中、四種は新種、四種は今日迄鮮新世の示準化石と考へられて居たるもの、四種は中新世より現世まで現はれ、十二種は鮮新世より現世まで出で、殘り一種が現生種である。即ち現世に知られぬものが八種で全体の三十二%となる。依つてこの地層は鮮新世で、而も中部鮮新世より若からずと述べられて居る。

關谷層群は前記のものに不整合に乘る地層であつてこの中より

Cultellus izumoensis Yokoyama

Macoma optiva Yokoyama

sequoia sempervirens Endl.

Acer nordenskiöldi Nath

Diervilla sp.

が採取されて居る。この層群中には海産化石を産する地層を含んで居るが、全体を通じて見る時は海産化石に乏しく、海岸に近き陸上堆積物を主として居る樣である。藤本氏はこれ等三層群の時代に關し、福渡層群は中新世?、鹿股澤層群は中新世及び下部鮮新世を、關谷層群は上部鮮新世を代表するものとの意見を持つて居らるゝ樣である。

矢部教授は又前記三層群の分布及び地層の傾斜等から考へて次の如き地殼變動のあつた事を述べられて居る。

イ、第三紀層の堆積後地殼變動があつて、本地域内外に若干の主要なる斷層を生ぜる外、現今の那須野原低地の西縁に沿ひ南北の一大撓曲を生じた。

ロ、此の地殼變動で轉位した地層から成る地域には、その後の削剝作用を受けて平夷の陸地面を生じた。

ハ、次いで第二次の地殼變動があり、數個の斷層により若干の地塊に分たれた。斯くて高原火山の基盤をなす第三紀層の地塊はその北方の彌太郎山（一三九二米）の地塊に對し約五〇〇米低下して七〇〇—八〇〇米の高さに位し、更に彌太郎山はその北の大佐飛地塊（一九〇八米）に對し五〇〇米低下した。而して初めの二地塊の境をなす斷層線の位置は大体現今の箒川上流の谷によつて指示される。

ニ、其後暫くして第三次の地殼變動があり、火山の基盤は西北部に稍々長方形の陷沒地域を生じ、壚原化石湖の湖盆を形成した。

ホ、續いて高原火山初期の噴出を見た。

前記の如くにして壚原化石湖は生じ、その中に堆積したるものが即ち有名なる壚原の植物化石であつて、前記關谷層群との間には明瞭に時間的間隙がある。之を壚原層群といふ。壚原層群の化石中には第三紀層のもの極めて少なく、現在これの堆積期は洪積世と考へられて居る故に、嚴密に言へば之は第四紀層として說明すべきであるが便宜上この所で述べる事にした。

鹽原層群は主として遠藤誠道氏により研究せられたもので、化石植物は所謂鹽原化石湖に堆積した薄層理をなした微粒火山玻璃質凝灰岩中に保存せられて居るもので保存狀態は極めて良好である。この化石は通常葉片は層理面に平坦に埋藏されて居る。之は植物化石が遠方から運搬されて來たものでなく、その附近のものが靜かに沈澱して化石した事を示すのであつて、鹽原溫泉の名物七不思議の一として古くから世に知られて居るものである。

遠藤氏の研究によればこの處に產する主要植物化石は次の樣である。

Dryopteris miqueliana Chr.
Woodsia polystichoides Eat.
Thuja japonica Maximowicz.
Juglans sieboldiana Max.
Alnus pendula Matsum.
Betula ermanii Cham.
Fagus japonica Max.
Magnolia obovata Thumb.
Hydrangea hirta S. et Z.
Malus jumi Matsum.
Maackia amurensis Rupr. et Maxim.
Acer diabolicum Bl.
Meliosma myriantha S. et Z.
Berchemia racemosa S. et Z.
Vitis flexuosa Thumb.
Tilia distans Nathorst
Stereulia shiobarensis do Endo
Actinidia polygama Planch.
Stewartia Pseudo-camellia Max.
Araliphyllum naumanni Nathorst
Cornus macrophylla Wall
Clethra barvinervis S. et Z.
Meisteria campanulata Nakai
Tripetaleia bracteata Maxim
Styrax obassia S. et Z.
Fraxinus longicuspis S. et Z.
Viburnum furcatum Bl.

以上は主要なるものを列記したるのみにて從來研究による化石の總額は百三種ある。これ等の中現在絕滅せるものは極めて稀で、大部分は北海道及び本洲東北部の現生種に同定する事が出來る。即ち以上百余種の中、絕滅種及び不明瞭なるものを除いて現在生存せる六十六種の樹木につき氣候に關係ある性狀を見るに、所謂溫帶林に屬する樹木が最も多數で三十五種、次に十九種が溫帶及び寒帶に跨り、五種は暖帶、溫帶及び寒帶の三帶に跨り、十種は溫帶及び暖帶に跨り、二種は寒帶にしか生育しないものである。之によつて見るに溫帶林に屬するものである事は明らかであるが、溫帶だけにしか生育しないものは一種もなく、寒帶だけに生育するものが數種ある事から判斷して、溫帶南部ではなく寧ろ溫帶北部又は寒帶最南部を指示するものと考へられる。尙溫帶と暖帶とに跨つて生ずる多少暖地性のものは前記の如く十種あるが、この中五種は北海道中部に普通の植物であるから、溫帶北部にも生ずる事は明らかである。殘り五種は千五百米の高度を有する日光中禪寺湖畔及び富士山の標高千六百米附近にも生ずる所を見れば、溫帶上部界(溫帶北部)又は寒帶最下部界(寒帶南部)にも生ずると考へて差支へない。此の如く鹽原化石植物の垂直的分布について考へて見るに大体本洲中央山脈に於ける標高千五百米附近に生育する植物群に近いもので、矢部教授が嘗て日光中禪寺湖畔千五百米の植物景觀に彷彿であると論ぜられたものに全く一致して居る。本州中央部に於てはこの千五百米の高距は本多教授によれば溫帶上部の限界であるから、之等の化石は溫帶北部又は寒帶南部のものであるとの意見に全く一致するのである。

以上の材量より鹽原化石植物の指示する氣候は大約北海道の中、南部の氣候狀態に似て居たものと思はれる。而して鹽原化石植物群が堆積した當時の鹽原化石湖の標高は矢部教授によると五百米乃至六百米であつたとの事であるか

ら、この化石が指示する千五百米の高距に比し約九百乃至千米の差がある事になる。これを溫度に換算すると、地表一万米以下に於ては平均約百八十米高さを増す毎に攝氏一度づゝ低下するのが普通であるから、九百米乃至千米にては約五度乃至六度だけ當時の氣溫が低かつた事となる。之は現在宇都宮と札幌の平均溫度の差約五—六度に比較して大体一致する。

次に化石植物の堆積せる時代であるが、化石の絶滅種が全体の一割弱である事から見て洪積世のものと考ふる事が最も適當であると思ふ。併し洪積世のいつ頃であるかは未定であるが最下部ではなく恐らく中部洪積層と考へるのが至當であると言はれて居る。

以上長々と鹽原近傍の第三紀及び第四紀洪積層について説明したが、之等の外に足尾山塊に附屬する第三紀層と或關係を持つ様に考へられるのは關東山地北部及び北東緣の第三紀層である。

關東山地北部のものは鏑川及び碓氷川の流域に可なり廣く分布して丘陵性の臺地をなし、主として粘土質頁岩・灰白色砂岩・礫岩・凝灰岩より成り、上部には亞炭の薄層を挾み、下部には介化石の砂片をふくむものである。尙下仁田の北西中小坂虻田には有孔蟲石灰岩十余枚を含み Lepidocyclina japonica Yabe. その他五種の化石が半澤氏により報告せられ、介化石としては Mya crassa その他五種が横山博士に發見せられ、之等から見て大体下部中新世と考へられて居る。

關東山地北東緣、即ち足尾山塊と利根川の流路をへだてた對岸に在る第三紀層は二百米乃至三百米の丘陵地にて、主に砂岩・礫岩・凝灰質砂岩・凝灰岩より成り、稀に保存の悪い化石が出るが、それによつての時代決定は不能である。前記關東山地北部鏑川流域のものと同時又はやゝ新期のもの即ち瑞穗末期(中新世及び鮮新世)を代表するものと考へられて居る。

以上述べたる鹽原附近・關東山地北部・同北東緣の三ヶ所の第三紀層と、岩舟村及び藪塚本町近傍のものとを比較して見るに、後者は鹽原の鹿の股澤層群及び福渡層群に岩石的に密切なる關係がある様である。又關東山地北東緣のものと藪塚本町のものとの間には藪塚本町のものがやや、凝灰質大とはいへ、ほとんど岩石的に區別する事が出來ない。化石學的には時代は決定し得られなかつたが岩石の上より見て之等に對比するのは無法ではないと考へる。即ち藪塚本町及び岩舟村の第三紀層は共に瑞穗末期のものであつて、上部中新世又は鮮新世を代表するものと考へるのである。尙栃木町北方より宇都宮附近に至る小丘陵は筆者は未調査なれど同様に凝灰質岩石より成り、所々に不完全なる介化石を含むといふ事であるから、之も同時代の海成堆積物であらうと考へる。

以上の事よりして第三紀末瑞穗沈降時代には、海岸線は足尾山塊・關東山塊の麓にあり現在の關東平野は海底下にあつたもので、鹿の股澤層群・福渡層群・宇都宮栃木附近の層・岩舟層・藪塚層・關東山塊北部及び北東部地層は、その時の海岸より余り遠からざる海底に堆積せるものゝ遺跡である。瑞穗の最末期には徐々に隆起を開始し、關谷層群が陸成層として堆積した。この層群中に海成層が局部的に存在するのは、この時代のこの場所は未だ完全に陸地になり切らず、小隆起沈降を繰返し、或時は一部分海となつて居たからである。

その後第四紀洪積世即ち所謂敷島隆起時代に入つて今日の關東平野の大部分は浮び上り、標高五六百米の高所となりたる鹽原に一堰止湖を生じた。之が所謂鹽原化石湖で、この時代にはこの邊は今日より五度乃至六度低溫であつた事は前に述べた通りである。今日では鹽原は凡そ八百米の標高になつて居る事から見て尙その後二三百米の隆起のあつた事はわかるのである。

【註】筆者は鹿ノ股澤層群・福渡層群と關谷層群の關係を説明するに當り、整合・不整合なる言葉を使用した。初學者の爲にこゝに簡單に説明しておかうと思ふ。大体地層は風成層の如き全然水と無關係に成生したものもあるが、大部分は海又は湖の如き水中に川より流せる土砂を堆積して出來たものである。一の地層が他

の地層の上に横たはる時、若し兩者の間に毫も沈積の中斷期間、即ち時間的間隙を持つことなく、互に引き續きて沈積したものである時は兩者は互に整合關係にありといひ、之に反して若し兩層の間に多少に係はらず任意の時間的間隙がある時は兩者を互に不整合關係にあるといふ。即ちこの時間的關隙の間には何等地層の沈積が行はれて居ない。又上層が沈積する以前に下層の最上面が侵蝕さるゝのが通常であるから、不整合は無沈積と侵蝕の二つの要素により表はさるゝものといつてもよい。具体的に最もよく行はるゝ不整合の例を説明すれば、今海中に堆積されつゝあつた地層が土地の上昇によつて陸地となれば、最早堆積が行はれないのみならず、反つて河流風雪の爲に浸蝕を受けるのが普通である。その後その場所が再び沈降して海面下となれば、前地層の上部に堆積が又々初まる。かくして下部地層の上に上部地層が直接に乗るも、その間には陸地となりたる期間の時間的間隙がある事は明瞭である。然らば實際の場合に當つて如何にしてこの不整合を發見するかといふに、通常下部地層の最上面と上部地層の最下部面とは平行をなさない。陸地となりたる時に河川は、人間が鉋を用ひて木をけづる如く層面の走る通りに之を浸蝕する事は不能である。但し狹範圍に於ては稀に上部地層と下部地層とが全く平行し、その堆積の間に一見何等時間的間隙がなく、整合狀態に見える事がある。此の如きものを並走不整合又は僞整合といふ。かゝる場合には上部下部兩層の化石を研究して、その堆積の時期を知り、以て兩者の間に時間的間隙のあつた事を知るのである。

Ⅲ 第四紀層

新生代の最後の區分、地質學的編年の最後の區分である第四紀は、たとへ古い地質時代の一期間に比して甚だ短い期間ではあるが、地球の歴史に於ける一つの興味ある時代である。この時代の初期は歐米に於ける所謂大氷河時代で、昔の哲學者の名付けた洪積期(洪積世)は今日の地學者の漂礫土により代表されるが、第四紀の初期を代表する名稱ともなつて居る。沖積期(沖積世)といふのは洪積期に續く時期であつて、現在では一般に最後の氷期以後を以て沖積期として居る。人類はこの時期が初まると共に繁榮して來たものである。

此の如く第四紀は洪積世・沖積世の二つに分つが地史學の性質上之等二期の更に細い區分が必要となる。此の細分に至つては各國の學者が各自その立場によつて各地に於て異なつた區分を行つて居る。我國の層序學者の中にも色々意見の相違もある樣であるが、最近發表された大塚彌之助氏の第四紀區分が最も科學的であらうと考へる。即ち同氏は第四系(第四紀堆積物の事)を新しいものより a_{II}, a_{I}, du_{II}, du_{I}, dl_{II}, dl_{I} の六層に分けられた。即ち沖積層を a_{II}, a_{I}, に二分し、洪積層を du_{II}, du_{I}, dl_{II}, dl_{I}, に四分せられたのである。

1. 洪積層

扨て足尾地塊及びその近傍に於て、明らかに第四紀の洪積層に屬するものと決定したものに前記鹽原層群がある。一体我大日本帝國は亞細亞大陸の北東部と共に、第四紀氷世に於て歐米大陸の如く一面に氷床に被覆されなかつた爲に、歐米大陸にて見らるゝ第三紀、第四紀の植物界に著しい變遷がなかつた。之が鹽原植物化石が最近に至つて精密なる化石の研究の行はれる迄、第三紀のものなるや第四紀なるや疑問視されて居た最も大なる原因である。

日本の洪積世に氷河がありたるや否やは、目下學界に於ける一大問題であつて、各學者その論據を異にする故、未だ意見の一致を見ないが、唯或特定地區には氷河の存在も認められる樣である。或學者の研究によれば、洪積世に於て凡そ千五百米以上の高所に於てのみ氷河の存在を許したと論ぜらるゝ一方又他の學者によれば、それより下方の平原地方迄その影響はあつたと說いて居られる。之が即ち高地帶氷河說と低地帶氷河說の分れる所である。唯この所にて注意すべきは、現在の地形に於て千五百米以下の低地に於て氷河の遺跡を發見せる故に、洪積世にてその高さ以下の所に於ても氷河存在せりと論ずるのは、極めて早計である。

氷河の影響がたとへ平原迄及んで居なかつたにしろ、高山地方には各地に氷河の遺跡らしいものが發見される。この事實と現在の日本に於ては如何なる高山にも氷河の存在しない事よりして、洪積世の初め頃には可なりの氣候上の

變化があり、鮮新世迄絶滅をまぬかれて來た暖帶、亞熱帶の植物は、鮮新世末の氣候の變化にあつて悉く絶滅し、洪積世に至つてもまだその余寒のつゞいて居た事は、前記盧原植物化石が今日より五度乃至六度低溫を示す事より見れば明らかである。

扨てこの植物化石の堆積時代につき遠藤氏は洪積世の中の中部洪積層であらうと考へられた事は前に述べた通りであるが、大塚氏の分類による du I 即ち洪積層を四分せる上部より二つ目の地層にて、換言すれば中部洪積層のやや上部に相當するものであらうといふ意見に大部分の學者が一致して居る樣である。

最近佐伯四郎氏は足利郡葛生町の東北大叶の二疊石炭紀石灰岩の洞窟中から Stegodon orientalis orientalis Owen を發掘せられた。之は洪積層の最下面即ち dl I 層準を示す化石である。この洞窟からは更に鹿の齒・猿類の頭蓋等の化石も發見せられたが、之等の時代は未だ決定されて居ない。

前記 Stegodon や Elephas の如き象の一種は嘗て歐亞大陸に多數住んで居たものであるが、瑞穗時代から敷島時代にかけて起つた日本群島の擴大に際して、歐亞大陸の氷河による寒さを避けて、比較的氣候變化の少なかつた日本群島に移住して來たものと考へられる。

最も廣く分布される洪積層は所謂關東ロームで、群馬縣邑樂郡館林町を中心に、利根・渡良瀬二大河の間、及び安蘇郡佐野町南東方等に廣く分布して居る。このローム層は關東一圓に廣く存在するものにて、嘗ては支那の黃土と同樣風成層と考へられた。脇水博士はその分布より見て海底火山による火山灰の海成沈積物說を主張されて居るに對し、東木氏はローム層の一部は河水による水成沈積物であると主張されて居る。之は何れもある露領に就いて得られた結論であつて、風成・海成・河成何れも存在する樣である。即ち廣く關東平野全部を見れば多摩丘陵を被覆するロームは各學者とも風成を認め、東京山ノ手臺地の赤土は東木氏の言はれる如く水成である事は確かであらう。更に又このロームは風成・水成何れにせよ植物破片・植物樹根を全く含んで居ない事に注意されて居る。

前記館林附近のもの及び佐野附近のものは尙之より北方に存する栃木・宇都宮附近のものと共に武藏野段丘と後關東ローム段丘の中間段丘であつて、洪積世の最も新しい時代である du II を代表するものである。その成因は淺い海成らしく、敷島隆起時代に入つて du I を堆積せし盧原が既に標高五六百米の高さに迄上昇せし時は、關東平野一圓は（現在關東ロームの存在する臺地の大部）は淺海であつた。この時に起りし海底火山（或は海岸近くの火山爆發）によりこのロームは成生され、その下部には火山爆發により押し流されたる黃色輕石層がある。この輕石層は前述の如くローム層の下部に存し、或は du I に相當するとも考へられて居る。

館林附近のもの佐野附近のもの共に安山岩質火山灰質黝褐色乃至赤色ロームを主とし、粘土・砂土・凝灰質砂を中間に重疊する所あり、各地に於て甚だしき異狀を見ない。所により下部に存する黃色輕石層の見ゆる所もあるが、甚だしくは厚くなく通常數糎乃至二三十糎である。この黃色輕石は各河川の溪谷にも發達する所あり、その量北西するに從ひ增す樣である。之より見てこの輕石は足尾山塊附近のものは海底火山によるのではなく、那須火山脈の一火山よりの噴出物であるといふ感を深からしめるのである。

佐野・館林附近の輕石を今少し觀察すれば、赤褐色に近いものは下部に存し、黃色のものは上部に在る樣である。之は同時に散布された輕石が海水の自然的選擇力により酸化鐵を多く含む比重の大なる赤褐色のものが下部になつたのであると考へられる。かくして佐野館林のものは海成であるが、各河川の谷に存するものは河成であると考へるより外はない。然も足尾山塊の山中を探索すれば五六百米或はそれ以上の山頂に輕石の散布を見る。この大部分は地表面と全く一致せる傾斜を持ち、全然水には無關係に堆積したものと思はれる。即ち之等は火山より噴出されたる輕石が落下堆積したものであつて全く風成層である。

この黄色輕石は水分を多量に含み得る特性を持ち、園藝特に植木鉢用の土として需要多く、その最も多量に産する上都賀郡鹿沼町の名を取つて、通常鹿沼土の名によつて呼ばれてゐる。

關東ロームの浮石は東京・多摩附近のものすべて礫（直徑二粍以上）は極めて少なく、中尾氏の研究せられたる試料七十三の中、礫一％以上を含むものは僅かに十二あるのみ、三％を越えるものは宇都宮の浮石の外に茨城縣額田驛附近の九％があるのみなるに、宇都宮のもの獨り六十四％ある

	礫	粗砂	細砂	微砂	粘土
浮石	64.00	15.35	5.82	3.80	15.03
ローム	0.18	6.25	10.33	19.75	63.49

はそれのみにてもその如何に粗粒であるかゞわかるのである。足尾山塊南部に於ては中尾氏の研究はなきも粒の大きさ宇都宮のものに比べてやゝ小さいのみ、他の關東平野中のものに比すれば極めて大にして、之より見て輕石の大きさは北部に至る程大である事がわかる。

尚中尾氏は、八幡山の同じ試料を鑛物學的に分類せられた。それによれば輕石は鑛物粗成の明瞭なる所は全体の六十五％、ロームは二十九％。この組成の明瞭なる鑛物粒を種類分けすれば

	長石	石英	玻璃	紫蘇輝石	輝石	角閃石	橄欖石	赤色鑛物	鐵鑛物	雲母
輕石	47.5	0	32.5	13.5	0	4.0	0	0	2.5	0 %
ローム	31.0	1.5	22.5	29.5	2.0	8.0	0	0	5.5	0 %

尚之を明瞭にする爲に長石・石英・玻璃の無色鑛物と、紫蘇輝石以下の有色鑛物にまとめ上ぐれば

	無色鑛物	有色鑛物
輕石	80.0	20.0
ローム	55.0	45.0

之を見れば東京附近並に其以西の有色鑛物六七十％、無色鑛物三四十％なるに比して、無色鑛物の極めて多い事がわかる。この中最も著しい事は橄欖石を全然ふくまない事である。（横濱附近のものは悉く五〇—七〇％の多量を含む）中尾氏は橄欖石の有無を以て全關東ロームを二分せられた。即ち北東方關東平野の成田・犬吠岬・水戸・額田・下孫・大甕・宇都宮のものは橄欖石を含まず、南西するに從ひその量増す。又橄欖石を含まざる地方の特徴としては、一般に有色鑛物の割合が比較的低く、有色鑛物としては、紫蘇輝石と角閃石が勝れて居り、赤色鑛物の存在はほとんど認められない。之に反して橄欖石に富む南西のロームに於ては一般に有色鑛物の量が無色鑛物に勝り、角閃石よりも輝石が比較的多いと言つて居られる。館林・佐野附近のものも、この橄欖石を含まないものであらうと考へられる。

此の如く北東・南西兩區域に於て其機械的組成分並に鑛物的組成分を異にする事は、兩區域に於けるローム堆積の環境、堆積の模様、又はその礦源を異にするものと考へらるべく、更に或は時を同じうせざるに因るのであらうとさへ考へられる。而して特に栃木、茨城二縣に見る如くロームの上下を通じて水成因に歸すべき異種の岩礫を含有し、而もその岩礫はその土地固有の岩石であるといふ點から見ても、本地方のロームは水成であつて、淺海に堆積したものであらうといふ事は考へられるのである。

前に述べたローム中に一植物の破片をも含まれて居ない事より古地理學的考察を行へば、現在の關東平野の位置にありし海、即ち關東ロームを堆積せし淺海の周圍の山（足尾山塊及び關東山塊がこの海の周圍にあり有名なる筑波山及び佛頂山脈の如きは海中の一小島であつただらう）は一植物体をも存在せぬ特異な景觀を duII の時期に認めなければなるまい。之はロームに伴ふ礫層のある事より故小澤博士により論ぜられた如く大雨期の直接の結果かも知れぬが、筆者はペンク（A.Penck）が大盆地に於て考察した様に乾燥期の成生物であると考へたい。即ち當時の寒さにより海岸近くにあり勿らほとんど水分の蒸發を見ず、從つて

植物は生育せず、唯微細なるものゝみ山中にあり、之等の枯片を海中に運ぶには余りにも水の運搬力が小であつたと考へらる。

最後に洪積層の所は足尾地塊附近に於ては如何なる方面に利用されて居るかを見るに、通常洪積層は冲積層に比し半米乃至十米程高く丘陵狀をなして居る。從つて水の供給は悪く水田としては不適である。故にこの地層は畑地、特に桑畑に多く利用されて居る。佐野附近に於ては主として麥畑となり、水田と麥畑の境界は全く沖積層と洪積層の境界に一致する。尙一般村落は低濕なる沖積層を避け、利用價値のやゝ少ない洪積層に集つて居る樣である。

2. 沖積層

沖積世に至つて關東平野の大部分は初めて陸地となつた。しかしaI の初めの時期迄は荒川の流路にそつて川越市迄、江戸川・利根川にそつてその分流點迄、及び霞ケ浦・北浦の周圍はまだ淺海であつた。九十九里濱も現在の八日市場・東金・茂原の邊り迄波が打ちよせて居た。この時期に

至つて人間は初めて活躍を開始し、海岸近くに多くの聚落をなして住んで居た。現在發見された多くの貝塚は皆その當時の海岸線を指示して居る。即ち先住民族はこの小灣入又は入江内の貝類を漁つて生活したものであつて、彼等の遺跡が今日の貝塚である。

足尾山塊附近に於ては沖積層は利根川・渡良瀬川・思川・鬼怒川の沿岸にあつて、地形的に洪積層と區分出來る。即ち洪積層より通常半米乃至十米低く、洪積層はその表面に多少凹凸があるに反し沖積層はほとんど水平である。この層は前記諸大川が洪積層を浸蝕して段丘を作り、その後河流汎濫の際に沈澱、累層したるものにして、すべて泥土、粘土、砂土より成り、水平にして卑低なる爲に稻作に適し多く水田となつて居る。足利市近傍に於ては壤土はやゝ砂質であるが渡良瀬川を越えて南すれば幾分黑みを帶び腐植質となる。足利郡富田村より安蘇郡佐野町にかけては砂質細くなりやゝ粒土質を帶ぶる樣になる、この堆積の時期は無論化石もなく明瞭には判明せざれども極最近をあらはすaII であらうと考へられる。

第四紀層を通じて見たる古地理學的現象をまとむれば

イ、洪積世の初期 dII 時代は歐亞大陸の方は大變寒く亞細亞大陸の方より象の類が比較的溫かな日本に移住して來た。

ロ、duI 時代 鹽原地方は現在より五度—六度低溫であつた。

ハ、關東平野は duII の終り頃迄淺海であつた。

ニ、dnII の頃は大變寒く、從つて海水の蒸發少なく、雨又乏しくして、ほとんど植物の生育に適しなかつた。

III 火成岩

火成岩の正しき意味の足尾山塊中に產するものは、足利郡三和村湯の澤北方の標高五二五米峯附近の花崗岩と群馬縣新田郡太田町北方金山及び同縣桐生市南方茶臼山近傍に產する石英斑岩とである。

1. 三和村花崗岩

地質學的觀點より見たる足尾山塊附近の構造

三和村花崗岩の產出區は甚だしく廣からず東西凡そ千五百米・南北千三四米程にして、西方は三和村板倉より深高山東方・猪子峠を經て飛駒村皆澤に出ずる斷層の爲に截斷されて居る。岩質は黑雲母花崗岩にして長石（正長石及び灰曹長石より中性長石位の斜長石）多く、石英はやゝ少ない。全体として白色味多く美麗ではあるが、母岩の表面は雨雪の爲に成分の結合力を失して砂粒に碎壞し、堅硬なるものは割合に少ない。唯溪間に散亂したる岩塊は其質堅硬雲爛の跡なく、之を切截して良好なる石材を得る事が出來る。花崗岩の緣邊に近いもの即ち秩父古生層に接する附近に於てはこの岩石は花崗斑岩に變質してやゝ大粒の鑛物結晶になつて居る。之は深成岩としてこの岩石の母岩たる岩漿が上昇せし時、低溫の秩父古生層に出會つて急激に冷却した事によるのである。この花崗斑岩的變質は西部境界面に於ては全く認める事が出來ない。この事實は即ち西部は往古に於ける花崗岩と古生層との直接々觸面でなく、それ以後に成生せる斷層により作られたる假の境界面である事

を如實に物語つて居る。尙言葉を變へて具体的に述ぶれば、この斷層の尙西方にある赤雪山は、現在こそその表面は古生層ではあるが、將來風雨により百米乃至數百米も浸蝕されし場合は、必ずその下部に花崗岩が露れ出ずる事は明瞭である。

花崗岩が古生層に接觸する時、花崗岩自身その緣邊附近が花崗斑岩に變質するのみならず、接觸部附近の古生層の岩石を極めて堅牢なるホルンフエルスに變化させて居る。花崗岩よりやゝ離れたる粘板岩中には、特有の接觸鑛物たる菫青石を生じて居る。之は六角柱狀の隻晶をなして、一見櫻花狀を呈する故に故菊池安氏は之に櫻石といふ名稱を附せられた。この櫻石は流れ流れて渡良瀨の河原に於ては極めて普通に見らるゝものであるけれども、之を日本國內に探るに、それ程各所に出るものではない。現在に於ては山梨縣道志のもの、京都府龜岡附近の櫻天神のもの、福井縣鳥濱のもの、及びこの三和村より渡良瀨の河原にかけて存するものゝ四ケ所が最も有名である。

扨てこの花崗岩の成生時期についてであるが、古生層に接觸變質を與へて居る事よりして、それより新しい事はいふまでもない。しかし之以外には全然不明である。この花崗岩が足尾地塊より北方に產するものと同時成生物であると假想し、之等の花崗岩が從來考へられて居る如く中生代、特にジユラ紀末の最も岩漿運動の甚だしかつた時の噴出と考へる時、之を立證する材量はないが、何等反駁する證據もないのである。

【註一】 ホルンフエルスにつき今少し說明をすれば、之は前述の如く水成岩と火成岩との接觸により生じたる變成岩であつて、例へば粘板岩が花崗岩・石英閃綠岩等と接觸の爲に變質して生ぜる種々の變成岩を見るに、花崗岩に最も近い所に於ては石英・長石・柘榴石・菫青石・電氣石・輝石・角閃石・磁鐵鑛等の粒狀結晶の集合より成る岩石を生ずる。之が即ち硅酸礬土ホルンフエルスで、花崗岩を距るに從ひ結晶粒は漸く不明となり、唯多量の黑雲母を有して一方に剝げ易い片狀粘板岩になる。尙花崗岩を遠く離るれば、黑雲母は漸次減じて普通の粘板岩に近づき、唯紅柱石・空晶石・菫青石等をその間に撒點するのみとなり、遂には如何なる鑛物とも決定し難い斑點のみを有する粘板岩となり最後に全く通常の粘板岩に移化する。

粘板岩の代りに石灰岩が花崗岩・閃綠岩等に接觸する時は方解石・綠簾石・柘榴石・硅灰石・ベスブ石等の粒狀結晶の集合物なる硅酸石灰ホルンフエルスを生じ花崗岩を遠ざかるに從ひ結晶質は漸次に顯著なるざるに至り遂には普通の緻密石灰岩に移化する。

砂岩の如き多孔質なる岩石にあつては接觸變質の現象は比較的少なきも、時には變質されて砂岩ホルンフエルスになる事がある。その特に石英に富める場合は所謂粒狀硅岩になるのである。

【註二】 菫青石は前述の如く粘板岩の接觸變質を受くる時通常生ずるもので、接觸の最も甚だしい即ち花崗岩に最も接近せる硅酸礬土ホルンフエルス中にも存在するが、その時は他の鑛物と共に極めて小さい結晶なる故、肉眼にての識別は不能である。花崗岩を離れて接觸變質の度小となるに從ひ他の鑛物は非晶体となるに反し菫青石のみ大なる結晶となり肉眼にて全く判別出來る樣になる。櫻石といふのはこの狀態の岩石をいふのである。

菫青石の成分は$(Mg,Fe)_2Al_3(OH)_2(Si_5O_{17})$といふ極めて複雜なるものにて、斜方晶系の特有なる三連雙晶をなして六方柱を形成し、著しい變質斑晶をなす。新鮮なものは透明にして概ね藍紫色をなし、硬度七度乃至七度半であるが、三和村產のものは皆分解して灰色をなし、硬度はやゝ低い。比重は二・六乃至二・六六である。

2. 金山石英斑岩

太田町北方の金山は、その麓の所に僅かの古生層が存在するが、大部分は石英斑岩から出來て居る。この岩石は或る場所に於ては流紋岩になり切つて居る所より見て、深部にて成生されたるものとは全然考へられなく、むしろ火山岩として地上に流出したるものと思はれる。その霧爛を受くる事甚だしく、表面は悉く赤色壤土と化し全く堅岩を見ずと雖も、少しく地下を掘り下ぐれば容易にその形狀を窺ふ事が出來る。大部分は堅岩も赭褐色を帶び、多くの節理を存し、不齊の方形に分割する性ある故に、花崗岩の如く大塊を得る事は難く、且美觀は少ないけれども堅硬なる事は花崗岩に讓らず、各地に於て採掘されて居る。

斑晶は主として石英・長石・黒雲母・角閃石より成り、石基は正長石・石英が主で黒雲母・綠泥石・磁鐵鑛・綠簾石等を副成分に持つて居る。斑晶中の長石は正長石より寧ろ斜長石の多いのに反し石基中にはほとんど斜長石を見ないのは面白い現象である。

3. 茶臼山石英斑岩

桐生市南方小丘陵の西方の一凸部茶臼山及びその南東方入長岡部落附近に、金山のものと全く相等しい石英斑岩を產する。茶臼山のものと入長岡のものとはやゝ距たつて居るが、その間には斷層が存在する樣である。霰爛の度は金山の岩石より甚だしく、石材としての價値も少ない。しかし谷間に轉る石塊は幾分堅く、石垣や土臺石位には使用出來る樣である。

金山・茶臼山・入長岡の石英斑岩は各自相距たつて、一見別々に成生されたるものゝ樣に見ゆるも、之を覆ふ渡良瀨川南岸小丘陵に出る古生層は極めて薄いものであつて、二三百米の下方に於ては、全く連絡して居るものと考へられる。唯金山及び茶臼山に於ては過去に於て地盤が最も薄弱であつた故に火山爆發的に地表に流出し、速かに冷却した岩漿の表面が流紋岩となつたものと考へられる。

これ等の石英斑岩の凝固時期は、周圍の古成層に微弱ではあるが接觸變質を與へて居る事よりして、それより新しい事は勿論であるが、すぐ南に存する藪塚の第三紀層には例へその間に斷層があるとはいへ、全然變質を與へて居ない。之より見て藪塚第三紀層の堆積期の中新世より古い事も勿論である。この岩石を足尾山塊の北方、中禪寺湖の南東方に產する石英斑岩に比較して見るに、後者は冷却がやゝ徐々に行はれし爲、斑晶が前者に比し明瞭に見ゆるも、その成分はほとんど同じものより成つて居る。後者は花崗岩と同樣ジュラ紀末の噴出と考へられて居るものであるが、渡良瀨川南方の石英斑岩も同時代のものであらうと筆者は考へたいのである。

前記三和村の花崗岩及び金山と茶臼山の石英斑岩は全く足尾山塊中に出る火成岩であるが、この山塊の西邊及び北

邊はすべて火成岩によつて境されて居るものである。之より簡單にこの火成岩を順次說明しようと思ふ。

A 赤城火山

赤城山は上野三山の一つとして、關東平野の北西隅に聳立する名火山で主として渡良瀨の流路によつて足尾山塊と區劃されて居る。南方は關東平野の方向に廣く裾野を擴げ、圓錐形の標式的の火山で、その原形も可成りよく保存されて居る。山頂には南北にやゝ長い楕圓形に近い舊噴火口があり、更にその中に中央火口丘としての地藏嶽の噴出を見る。地藏嶽は頂上がやゝ平らで鐘狀をなし、火口底よりの高さ約三百五十米、外輪山と火口丘の間の火口原は大なるものなく、地藏嶽北方の大沼(赤城沼)、南東方の小沼の半圓形小湖がその間に湛へられて居る。

赤城山の山体を構成する岩石は、塊狀熔岩や集塊岩等その產狀には幾多の相違あるも、何れも紫蘇輝石、輝石を含む複輝石安山岩である。唯第二次的に噴出した地藏嶽その他の寄生火山の岩石は閃輝安山岩である。

熔岩は中腹以上に流れて居るが、裾野附近は主として集塊岩及び火山破裂以前にこの火山の基底をなして居た岩石が爆發と同時に破壞拋出凝固したる碎屑岩より成つて居る。

赤城山の基底をなす岩石は、種々あるだらうが、その中最も新しいものは、藪塚層と全く同じ凝灰岩より成る第三紀層で、赤城山の南東方大間々町附近に露出して居る。之より見てこの第三紀層が堆積後集塊岩が流れ、續いて熔岩を噴出して外輪山を完成し、その後第二の活動期に入つて中央火口丘その他の寄生火山を生じたものである事はわかる。故に赤城山成生時期は藪塚層堆積期たる上部中新世又は鮮新世より新しい事は勿論であるが、その時代の明確なる決定は將來の研究に待たねばならぬ。しかし從來は洪積世のものと考へられて居るものである。

通常火山はその活動期を過ぎてしばらくの間は噴氣孔、硫氣孔によりその余勢を殘すものであるが、赤城山に於ては多少の蝕化の跡を認め、嘗ては爆發余勢を存したる事を

示すも活動力は現在は全く絶滅して居る。

此の如く地質時代的に見れば極めて最近に噴出したる火山なる故に美しい圓錐形を呈して居るが、人間を標準としたる年代より見れば相當久しきに亘つて鎭靜し居たる故樹木がよく繁茂し、裾野は雜草に被はれて居る。

B 日光火山

足尾山塊の北側に中禪寺湖―大谷川の谷を略境界として噴出する火山群が即ち之であつて、南西には赤城山に、東方には鬼怒川の谷を距てゝ高原火山がある。

この火山群に屬するものは男体山・白根山・溫泉岳・女峰山等であつて、之等は大別して二回の噴出によつて居る。即ち最初のものは溫泉岳及び前白根山(白根山の外輪山)を作つた斜長石流紋岩で第三紀の中新世のものだらうと言はれて居るものであり、第二回目の噴出は洪積世の安山岩で、此の如く安山岩噴出の前に流紋岩が出る事は世界中にその例多く、特に北東日本に於ては全般的に共通の事實である。

安山岩の性質を今少しく說明すれば、奥白根山(白根山の中央火口丘の活火山)は灰色の紫蘇輝石安山岩。女峰山・赤薙山及び男体山は複輝石玄武安山岩。山王帽子山・太郎山・大眞名子山・小眞名子山は含橄欖石複輝石玄武安山岩である。

女峰山・赤薙山の複輝石玄武安山岩と男体山のものとは共に斑晶は斜長石・紫蘇輝石・輝石よりなり、石基は白色に近いものより暗色迄樣々あるが、後者の斑晶は極めて大で、通常一―三粍の直徑を有し、甚だしきは一糎もあるものがあるに反し、前者のものは直徑〇・二粍乃至〇・三粍位である事より、兩者の區別は可能である。

地形より見て男体山が完全なる圓錐形なるに、他のものはほとんど原形を見る事を出來ないのは、前者が他者に比し最新噴出物である事を物語るものである。

男体山は複輝石玄武安山岩の外に、浮石質閃複輝石玄武安山岩をも流出して居る。後者は極めて局部的のもので谷間にのみ露はるゝものである。

奥日光には幾多の湖水があり風光明眉の所も多いが、その王者は中禪寺湖である。この湖は花崗岩や石英斑岩中に發達して居た谷を、男体山の噴出物の爲に堰止められて出來た堰止湖で、湖水は溢れて東流し、男体熔岩上を越す所に華嚴瀧が懸つて居る。

中禪寺湖の北方には之より標高百米程高い所に戰場ヶ原の平坦な沼澤地がある。現在はこの所に赤沼・泉門池等の小湖水があるが、中禪寺湖は嘗てはその水面がもつと高かつた事よりして、昔の湖面は尙北方迄續いて居ただらうといふ事は考へられる。

C 高原火山(塩原火山)

高原火山に於ても安山岩噴出以前に、先驅として流紋岩が出た事は、日光火山群に於けると同樣である。この流紋岩は石英・長石を斑晶とし、石基は外部の冷却の速かであつた部分は潛晶質で白色粗鬆であるが、內部の凝固にやゝ時間を要した部分は微晶質になつて角閃石の分解による綠片を混有する。尙內部に進むに從ひ石基の結晶度は次第に高くなり、外觀も粒狀になる。

この火山の主体は二個の火山の集合した二子火山であつて、北方のものは前黑山、南方のものが釋迦ヶ岳である。

高原火山の活動は普通の火山の如く先づ集塊質泥流の墳出に初まつて山体の大部分を造り、その上に前黑山の熔岩が流出し、その後釋迦ヶ岳が溢流して今日の山体を形成したものである。

熔岩は輝石安山岩で橄欖石の有無によつて紫蘇輝石安山岩・複輝石安山岩及び橄欖石安山岩の三種に區別する事が出來る。之等の外に北方にある寄生火山富士山を造つた熔岩は英閃輝安山岩である。

富士山の寄生火山の爆裂の跡である火口底には新湯がある。之は徑一米程の噴氣孔であつて常に水蒸氣、硫化水素を出し、僅かに火山活動の名殘を止めて居る。

D 足尾銅山

足尾銅山は足尾山塊の北西隅近くの渡良瀨川右岸にあるもので、之を構成する岩石は、流紋岩と秩父古生層とであ

る。古生層は粘板岩・砂岩・珪岩・石灰岩等からなり、走向は略北四十度東、褶曲はして居るが主として西傾斜である。附近には中生層の噴出と考へられる花崗岩・石英斑岩・玢岩・石英閃綠岩等の火成岩が古生層に接觸變質を與へて居るが、之等と鑛山との間には何等關係がない樣である。流紋岩は足尾町北西方の古生層中に火山として噴出したもので、上部は削剝されて今日の備前楯山の小山を造つたものである。之は第三紀の終り頃(多分中新世?)の火山活動によつて生じたもので(即ち日光火山群や高原火山群の初期噴出物と略々同時のもの)主要な鑛床はこの流紋岩の中にあるのである。

流紋岩の出方を見るに岩塊は全体として地中に下るに從ひ細くなり、恰も漏斗の如き形狀をなして居るのである。之は岩株として下部より上昇して來た岩漿が、地表に近づくに從ひ地壓力が減少し、急激に爆發的に噴出したる爲と考へられる。

この鑛山の鑛床には(1)鑛脈・(2)流紋岩中のカジカ、(3)古生層中のカジカの三種がある。カジカといふのは母岩中に不規則に染浸した黃銅鑛等から成る鑛石に名付けられた名稱で、岩を上げし時鑛石の出る形が、恰も川の中にて石を上げし時愚鈍な小魚の鰍が身動きもせずに河底にくつついて居る有樣に似て居る爲に名付けられたものであるが、今日では鑛脈でない總ての不規則な產狀の鑛石を皆カジカと呼んで居る。鑛脈は主に流紋岩中にあるが、又周圍の古生層の中にも幾分かは存在する。主として石英・黃銅鑛・黃鐵鑛より成り、多少の磁硫鐵鑛・閃亞鉛鑛及び方鉛鑛を混じて居る事がある。

足尾銅山の北西舟石の邊りには、植物化石を含んだ粘土層がある。之は備前楯山の流紋岩噴出の後、一時この地域に湖を生じ、その中に堆積したものと考へられ、從つて流紋岩よりは新しい事は確實で、多分鮮新世のものと考へられるが、もつと多くの化石的研究を必要とする。

湖成植物化石層の上には、舟石澤にそつてその上流にやゝ廣い範圍に礫層を見る。化石的證據はないが岩質よりして洪積層であらうと考へられる。

四、地質構造線

足尾地塊南端に於ける構造線は、凡そ二つの性質を異にするものに區分出來る樣である。即ち北東より南西に走るものと北西より南東に向ふ二種類である。前者の性質を持つものを示せば(西方より)

(イ)上神梅—宿廻—津久瀨—水沼—荻原—花輪—小夜戸—松島—神戸(渡良瀨川流路にそふ足尾山塊西緣大斷層)

(ロ)大間々—淺原—瀨見—狸原—神戸(この北方にて(イ)斷層に合致す)

(ハ)山田—中島—駒形—座間(座間にて(ロ)斷層に合す)

(ニ)天王宿—小倉(一時この邊りにて消滅、再び鍛治谷戸にて現はる)鍛治谷戸—大瀧—大茂

(ホ)桐生市—久方—湯澤—二渡—入彦間(大間々・飛駒二層の境界をなす大斷層)

(ヘ)入長岡—廣澤—諏訪—穴切峠—皆澤

地質學的觀點より見たる足尾山塊附近の構造

(ト)西野—松原

(チ)(藤森の邊りにて(リ)斷層より分岐)藤森—粟の谷—猪ノ子峠—赤雪山—皆澤(この所にて(ヘ)斷層に合す)

(ヌ)三枚橋驛—古氷—藤森—松田—原向田—中井—大田和—番場

(ル)野州山邊驛—今福—大岩—行道山淨因寺—入縄—中木戸(延長は北西—南東の飛駒川斷層によつて切らる)

(ヲ)足利工業學校—月谷

(ワ)足利市本城—江川—田島—込縄(この附近にて(ル)斷層に合す。この斷層は北方にてはむしろ北西—南東斷層の性質を帶び、他のものとやゝ趣きを異にす。)

(カ)足利市助戸町—大月—樺崎—大坂—須花((ル)斷層同樣飛駒川斷層にて切らる)

(ヨ)大沼田—駒場—西根—出流原—羽室—和田(葛生、足利兩層境界斷層之は飛駒川斷層により切られず)

(タ)佐野町—富士—謠坂—石橋—田代—柳町

(レ)大田和—下津原—新里—廣戸—八幡澤—小野口—柏倉

(ソ)澁澤—古江—新里北方—立花—西山田—大平澤—平井—菌部（途中(レ)斷層により切斷さる）

これ等諸斷層は北西—南東諸斷層を切斷して、その連結も失はしめて居る事よりして、後者より新しい時代まで活躍して居た事は事實である。唯飛駒川の流路にそふ北西—南東斷層は、他の同性質斷層に比し、極めて新しい時代まで生動して居た事は、(ル)斷層及び(カ)斷層を切斷してそれ等より新しい事を示して居る事よりしても明瞭である。葛生、足利兩層の境界をなす(ヨ)斷層は尙之より新しく、飛駒川斷層に影響されて居ない事は前に述べた通りである。

北東—南西斷層の特性として(ワ)及び(ソ)を除いてはすべて北西落ちである事が注意される。この二者は前者は北方に至るに從ひ北西—南東の性質を帶びて來る事により、又後者は(レ)斷層に切斷されてやゝ古期生成にかゝる事をあらはす事により、他者とは著しく性質を異にして居る。

前述の事實より考究するに、移動に遲れたる足尾山塊は、那須火山脈の上昇により傾動して、準平原に南東へのなだらかなる傾斜を持たしめた。かくしてこの傾斜にそひコンセケントに南東に向つて諸河川は流れたが、多數の河流がほとんど平行に北西—南東流路を取つたのは、この最初の傾動のみではなく、古期生成にかゝる、その方向の斷層にも大いに影響されて居るのである。

北西—南東斷層は北東落ちあり、南西落ちあり、又互に切斷し合ふ事もあり、性質も異なつて、生成時期も各自各樣である。しかしながら凡そ之等が平行をなして居る事は幾度にもわたる地塊擾亂の原動力が略同一であつた事を物語つて居る。

かくして流路方向を確定されたる河川は、その後起つた北西落ちの北東—南西諸斷層に流路を變更さるゝ事なく原位置を保つて居た。この事は後者の生成が極めて徐々に行はれた事を示して居る。

桐生川大斷層（(ホ)斷層）は計算によれば恐らく百米以上の落差を持つて居る樣である。之は現在起る數米以下の落差の斷層を見なれて居る我々にとつては想像する事も出來ない現象である。勿論この斷層は歷史的時間にて見る時は恐らく何十回にも何百回にもわたるものであつて、その度毎に關東大震の何倍も强烈なる地震の起つた事は想像出來るのである。（初めの斷層生成と最後のものとの間に三千年や五千年の開きのあるのは、地質學的に見て同時と考へて差支へない。從つて歷史的に數十回にもわたる斷層生成も地質學的に見ては一回の同時生成と見るのである）かくして極めて大なる落差を持つ斷層も徐々に生成されて行つたものである。

足尾山塊南方にかけるこれ等の性質が果して北方迄及ぶや否やは疑問であるが、北方に於ける北西—南東斷層は、その後再び活躍を開始したものゝある事は事實であつて、飛駒川斷層が(ル)斷層、(カ)斷層を切つて北東—南西斷層生成以後にも生動した事を示して居るのはこの證據である。尙北方に於ける河川の方向も、之等甦り斷層の影響があるのかも知れない。之等の事は將來の精密な地質調査によつて明らかにされるであらう。

足利層と松田層の境界をなす小俣驛—彦谷—栗ノ谷—熊野—宮ノ入—菅田—名草—下彦間の衝上斷層は凡そ北東—南西の方向を取り、あらゆる斷層に切斷さるゝ所より見て最も古期の生成にかゝるものである。思ふに之は足尾山塊第一次の傾動の時、その傾斜させられたる方向に從つて北西より衝上げたものであつて、足尾山塊中には尙之と同性質のものが多數あらうと考へられる。

【註】最初の地表面の傾斜と、その上を流るゝ河流との方向により各種に分けらる即ち(1)傾斜の方向に流るゝ川をコンセケント(2)傾斜の方向に斜に流るゝ川をインセケント(3)傾斜の方向に反して流るゝ川をオブセケント(4)組織に從つて傾斜には略直交する川をサブセケント(5)最初はコンセケントにて、しばらく他の形態を取り、再び傾斜の方向に從つて流るゝ川をレセケントといふ。

五、結　語

足尾山塊の地質的研究は、位置が東京よりやゝ離るゝ爲と、露頭の概して良好ならざる故を以て、地質學者の研究

視野より遠ざかつて居たる感があつた。古くは矢部博士の石灰岩より見たる構造の概報があり、最近に至つて早坂博士の化石的研究があるのみ、岩石による層序學、地史學的研究は皆無であつた。

本論文は主として中學四五學年生をして郷土の地質構造を知らしむる目的を以て草したるものであつて、その層序を明らかにするを主眼とした。唯やゝ專門にわたる事は前記の目的に反する故を以て省略し、尙中學校教材以外の熟語には註を附して初學の者の便とした。勿論筆者の研究は極めて不完全なるものであらうが、地形による空想的構造論以上に將來の研究に何者かも齎らすであらうことは確信する。この論文が將來の學究によつて、大論文を書かれる爲の捨石ともならば筆者の最も喜びとする所である。

最後に本論文を草するに當り多大の御垂教を賜り、層序研究に當つては、綿密なる御指導を仰いだる京都帝國大學教授中村新太郎先生に深謝の意を表して、筆を擱く事にする。

松根東洋城

機神山
織ぞめや機神様へ窓あけて
足利學校
學問のむかしを咲きし櫻かな
長林寺
山蔭や春いま行くと鐘の聲
足利公園
春永う花の後ある躑躅かな
淺間山
峯越しやにはかに松の青嵐
岩井山
篁か千鳥きゝける几かな
白石山房
軒ふるくたんぽゝも咲け小春風
中橋
舟橋やなか〳〵雪の廣磧

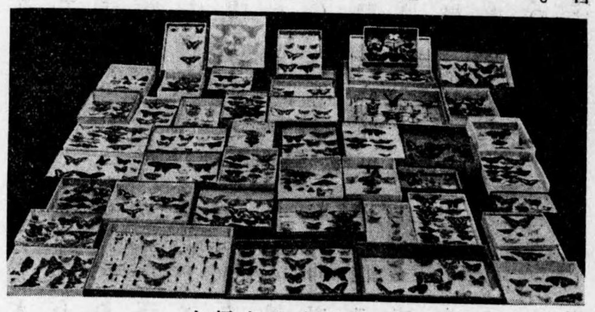
足利地方の自然界

博物教室　新田勸

蝶……

自然の循環は、眼に見えない樣な速度で進行しても、實に確實だ。無邪氣な蝶も、決して春のめぐり來る事を忘れない。未だ淡寒い中に春のきざしが、ほのかに感じられだしたと思ふ頃には、もう昆虫達が一つの完き世界の運行を始めて居る。モンキテフは越年蝶とも言つて成虫になつてから越冬するのであるが、寒い間は日當りの良い物影に蟄居して居て餘り活動しない。春の息吹が感じられ始めると、新しく生れ出た樣に元氣になつて未だ十分芽を吹かない野山を、翔廻り出すのである。すると其黄色い地に黑と橙色の斑點を持つた翅の、ぱた〳〵と空氣を打つ音に呼び覺されて、大地も昆虫も、そろ〳〵動き始めて來るのである。モンキテフで注意すべきは雌が白色の地に黑と橙色との斑點を有する事であらう。而し稀には雌にも黄色型がないとは限らない。さう言ふ處は自然もどうやら、いたづらつ子らしく思へる。四月早々からほんの一月ばかりの間、ちらりと姿を見せるだけで地上から消え去つて行くのは、ツマキテフだ。大きさはモンキテフより少し小型で、前翅の先端が黄色くそめられて居る。而し雌の翅端には此の橙黄色紋がないと言ふのだから、雌はとり難い。雄の色紋にしても飛んで居る時には、容易に見分け難い程小さい。だから十二分の注意力を集注してモンキテフの白型と見分けなければならない。數も少ないので中々手には這入らない。而し又其れだけ此を採集網に收めた時の喜は大きい。ツマキテフ――何となくみやびた名前の樣な氣がする。忽

然として春の先ぶれをしておいて、又忽然として姿を消して行く處は、何となく一抹の寂しさを感ぜしめる樣である。其うちに若芽と共にモンシロテフが姿を見せ始める。此れは春から夏にかけておびたゞしい數に發生する。春型には黒紋のない物がある。樺太から北海道、本州、四國、九州、朝鮮と到る處に發生するから、此れはモンキテフと共に日本の民俗の影の樣な物だ。モンキテフの幼虫は、みやこぐさとか、うまごやし等の荳科植物を食べるがモンシロテフの幼虫は、大根、きやべつ等の十字科植物を食するから蔬菜の大害虫だ。其れから小型の蝶にキテフがある。春型は前翅の先端が少しく黒色だが、夏型は黒色部が廣い。春型の全身黄色に見える物は單色の美しさを持つて居る。大型の蝶には蝙蝠に似た不格好な飛び方をするナミアゲハがある。而し何となく道化役者の踊の樣で面白い。幼虫は柑橘の葉を食べて居る青虫だが、一寸手をふれて見ると頭の處から變に悪臭のある黄色い二本の棒を不意に突出して驚かせる。此は内角で一つの示威運動だ。ひねりつぶさうと身構へた悪戯小僧も思はずあつと色を失つて、手を引つ込めるに違ひない。ナミアゲハに似て黄色が濃く、前翅の基部に黒條のない、赤褐色の大なる紋を後翅に有するのは此れはキアゲハだ。幼虫は、にんじん、みつば等を食べて居る。ナミアゲハはキアゲハと兄弟分の樣におどけて飛んで居る。クロアゲハは全く蝙蝠に似て眞黒だ。只後翅に朱色弦月紋があるだけだが小さくて飛ぶ時には墨の運動としか眼に見えない。昨夜の闇がぽつかりとちぎり取れて、ふわふわと動き出したとしか見えない。或は酒の醉ひにうかれ出て來た墨染めの僧衣をまとつた山寺の小僧の化身でもあらうか。クロアゲハよりも小型で、前翅の中央線から後翅の中央線に連續して青綠色のすぢが小さく切れ乍ら美しくのびて居て、地はクロアゲハに似て黒色で、後翅に青色の弦月紋のあるのは、クロタイマイ又はアオスジアゲハと言はれる。此れも時には眼の前をかすめて姿を現はす事がある。だが此は中々敏捷で見えたと思ふ間に、もう高い青葉のしたゝる梢をかすめて遠くのかなたに姿を消してしまつて居る。此れを取らうとするには全く瞬間の躍動が必要である。殆んど發作的に捕虫網をふる練習を日頃からして居ないと、此れはとり難い。敏捷な蝶と言へば山に居るスミナガシだ。六七月頃兩崖山から大岩山邊の峰づたひに捕虫網をかついで行くと、つばめの樣な迅速な飛翔力を示して木影から梢の間をぬつて飛んで居るのがスミナガシだ。全身は全く墨を流した樣に黒い。だが點々として淡い黄色と白と青色の小さい斑點が、一面に前後翅に散在して居る。前翅には黄色と白が多く、後翅には青色が多い。而し飛翔して居る處を見ると全くつばめの樣に黒く見える。大きさはモンシロ蝶より少しく大きいとは思はれるが餘り大差はない。筋肉と内臓の有る胴体は鉛筆の太さの半分に足りない物で長さは、三センチとはあるまい。其處にごた〳〵と消化管から氣管から排泄器等をつめこみ、其すきまに筋肉をすゑつけて居るのである。つばめの胴体に比すると五十分の一しかないであらう。其れでもつて廣大な面積をしむる四枚の翅を驚く可き程の早さで上下に振動さすのである。アゲハテフの樣にふら〳〵する所は少しも無く、さつさつと風を切つて進む處は、何と言ふ奇蹟であらう。人間の大きさに還元さして見れば、小型飛行機の翼を兩手に持つて空を飛んで居る樣な對稱になる事であらう。だが人間は發動機の力をからずに鳥の樣に自由に空をかける事はどうやら難しい事らしい。スミナガシの迅速さは山肌を勇しくかけ走る處から生れた物であらう。スミナガシは空の短距離選手に違ひない。其れを捕へるには全く大骨折で第三者が見れば破顔大笑する樣な滑稽さをも演じなければならない。やあ來たぞ!! と



生徒採集昆虫標本

思ふ間にもうスミナガシは數メートル先の空氣を氣持よくはたいて、あきれ顔の人間に一顧をも與へない。うか〳〵とスミナガシの翔ばたきに氣を取られて居ると石に足先をぶちあてゝしまつて岩の上によろめき倒れて、とんだ怪我をしないとも限らない。するとスミナガシは人間をからかはうとするかの樣に又さつと頭の上をかすめて通りすぎるのである。此度こそは!! とふつた捕虫網は空をけづつて少しも手應へがない。スミナガシは網の先端をひらりとよけてもう數米先に何くはぬ落着を見せて悠々ととび去つて行くのである。其處で人間は段々と、いら〳〵して落着を失つて行くのである。けしからん昆虫の分際で!! と捕虫網をむやみに打ちふつてスミナガシの後を追つかけて行つたらもうおしまひだ。何處かの岩角か木の根に足を打ちあてゝ殘念な敗北に終つてしまふ事だらう。さうしてスミナガシは凱歌を奏して悠々示威運動に翅の力の偉大さを誇るだらう。實にくやしいが空をとべない人間は只もうあきらめて、べそをかくより他に仕樣はあるまい。けれども落着いた思慮有る人間はさうした場合にもあわて出さない。いら〳〵としてスミナガシを追つかけて行く代りに、スミナガシの習性をぢつと觀察しようとする。スミナガシは短距離選手だから、決して遠くへは飛び去つて行かない。一つの目標を定めておいて、其の上を快く滑走して樂しんで居る。だから落着いてスミナガシの行動を見守つて居ると、彼が必ず繰返し〳〵して通過する一つの目標を發見するだらう。さうすればもうしめた物だ。彼の通路に待ちぶせして根氣よく捕虫網をふるのである。さうなればもう後は忍耐力の問題だ。スミナガシが人間をからかふ事にあきるか、人間がスミナガシを捕虜にする事にあきるかもう根氣比べだ。さすがは腦髓の組織の貧弱なスミナガシは人間の惡意をしらない。やがて彼は悲しいとりこになつてしまふ事だらう。さつと振つた捕虫網にばた〳〵と力强い脈動を感じさへすれば、もうしめた物だ。忽ち主客轉倒して人間に喜ばしい微笑がわき出してくるだらう。山の蝶が凡て敏捷な速力の所有者とは限らない。木から木へ幹を傳つて小

踊りし乍ら何時までも五月のさはやかさを樂しんで居るのは、キマダラヒカゲだ。スミナガシが男性的な力を誇とする物なら、キマダラヒカゲは女性的リズムを特長とする物であらう。彼女はあきない舞踊家だ。スミナガシは人間を小馬鹿にした樣に飛んで見せるが、キマダラヒカゲは何處迄も內氣だ。さうしてひらり〳〵と調子をとつて幹から幹へと踊り續けて行くのである。大休ヒカゲテフは其名前の樣に凡てが光の强い力とエネルギーの產物ではない。キマダラヒカゲは全身淡い黃色で澁い墨にぼかされて長楕圓形の眼玉の樣な斑紋を持つて居る。大きさはモンシロテフと甲乙はない。五月頃から山肌の木から木へ愛嬌をふりまき乍ら訪問を續けて居る。スミナガシ程勇しくはないが、キマダラヒカゲ程內氣でもないのはヘウモンテフだ。此れは一見して、豹を思ひ出させる物で時には美しい線を畫いて山の頂上へかけ上つて行く事もある。又キマダラヒカゲを眞似て幹から幹へと簡單に挨拶をして廻る事もある。種類は多くてまぎれ易い。最も普通なのはウラギンヘウモンであらう。ヘウモンテフ——何となく剽悍な蝶の樣に聞えるが、實際は猫に近い。見た所は赤褐色の地に黑い斑點が散在して居るので一寸勇ましさうには見えるけれど。キマダラヒカゲに性質が似て居て更に小型でかはゆく見えるのは、ヒメウラナミジヤノメだ。キマダラヒカゲも學問的に言へば、ジヤノメテフ科の一員なんだから兩者の性質の類似して居るのは當然だと言へよう。ジヤノメテフにも種類は多くヒメウラナミジヤノメの他にヒメジヤノメがよく目にかゝる。前者は小型で後者よりもはるかに小さい、ヒメジヤノメはどうやらモンシロテフより少し小型であらう。ジヤノメテフの特長は灰色の地に黑い丸いジヤノメがあるからだ。木と木の間——草と草の間——日影から日影へ兎の樣に輕い調子でとらへ難さうにひらり〳〵と飛んで行くのがジヤノメテフだ。灰色で黑い斑點が二つ三つあるジヤノメテフは、決して美しい物ではない。殆んど凡ての蝶が鮮明な色彩を與へられて居るのに比するとジヤノメテフは、全く自然から虐待された蝶だといつていゝ。キマダラ

ヒカゲにしてもジヤノメテフの親類だからどうやら古ぼけてよごれて見える。けれども此等の色彩の鈍重さは、自業自得だと言つていゝ。強い光ときつい熱との間を勇ましくとんで行く時にこそ、鮮やかな色彩はさえて輝き始めるが、暗い日影では其等は全く不調和で灰色にぼやけてしか存在しない。此等の蝶が美しくない色をして居るのは、其等の生活作用と深い關係があるのである。山肌を光から光へとジヤノメテフよりももつと快活に跳ね踊つて居るのは、ミスヂテフとコミスヂだ。少し褐色がかつた黑地に三條の白斑を持つた此等の蝶は、モンシロテフを少し横に長く引き伸した物で、兩崖山の五月にはなくてならない愛嬌物だ。少しゆるやかな滑走と、時たまひらり〳〵と翅に波打たせて、光を求めて止まぬ此等の蝶は木々の葉からこぼれ落ちた朝露の新鮮さだ。段々と強く力強くなつて行く山々の姿に取り殘された春の一片とも形容す可き物であらう。五六月頃校庭の小鳥小舎の金網にぢつととまつて、武者人形の様に端然と控へて居るのはヒヲドシテフだ。赤の地に黑い斑點前後翅共周緣に黑と空色と黃色との數條のふちとりをした姿は、全く青葉の下の若武者――緋をどしの鎧を着用に及んだ初陣の盛裝だと言つていゝ。そして武士の様に泰然自若として騷がない。此に良く似た蝶で、前翅の前半が黑く、後翅の先端を殘して大半が褐色になつたアカタテハがある。之とヒヲドシテフとは成蟲にて越冬するので長い間見られる。アカタテハは秋になつても山野に輕々と黑と赤との翅の美しさを誇つて居る。此れと同じ形をしたルリタテハは年に二回發生するルリ色の地に空色のうすい條斑を前後翅の先端近くに持つた、鮮やかな存在である。瑠璃色の蝶に大型のカラスアゲハがある。七八月頃山道の水溜、牛馬糞に集つて來る蝶だが、野の林にも姿を現はす物である。全身黑色だが青綠色の粉末に被はれて居て濃い海の色をして居る。後翅に朱赤紋が小さく存在して居る。飛び方はクロアゲハに似て餘り鮮やかな力は持つて居ない。而しクロアゲハ程澤山飛んで來ないのでよく注意して居ないと眼にかゝらない。其れと共にクロアゲハ以上に技巧をこらした色彩が人目を引くに足る物と言へよう。綠青色の凝つた翅の全表面は、一寸濃い重みをさへ表現して居て、深みのある物と言へよう。餘りにも輕やかな色彩で浮ついた物に感じられ易い蝶の仲間で、此は全く古風な金屏風式の重厚さと言へよう。只餘りにも極彩色めいて居て、我々の胸にぴたりと來ない缺點はいなめない事と言へよう。大形の蝶にはまだ此等の他に、オホムラサキのある事を忘れてはいけない。赤褐色の地に白と黃との小點が散在して居る蝶であるが、雄の前翅の基部が豐かな紫色を呈して居るのである。六月下旬より時々木々の枝の附根邊にさまよつて居るのが發見されるのであるが、うかうかと自然を深く見つめない人の眼には中々觸れ難い蝶であると言つて良からう。オホムラサキ――何となく元祿時代を想像させる様な名前であるが、雄は其名前にそむかぬ豐富な美しさを持つて居ると言つていゝ。然し前翅の基部に紫色部の無い雌は餘り美しい物ではない。蝶類で小さい殆んど蛾とまぎらふ様に草葉の中をもぐりとんで居るのは、シジミテフの仲間だ。シジミテフと一口に言つても非常に種類の多い物ではあるが蝶類で最も小型だと言ふ事はシジミテフの第一義的特長である。從つて其胴体は殆んど蠟燭の心位の太さしかないであらう。だから飛ぶ事は殆んど出來ないと言つていゝ程、空中をよろめき廻るのである。此を捕へようとするには、少しすばしこい指さへ持つて居れば、捕蟲網を必要としない程である。最も普通に眼にかゝるのは、ルリシジミ、ツバメシジミ、ベニシジミ等であらう。空色のシジミたちは非常に多く眼にかゝるが、赤色の物は少ないと言つていゝ。然し赤い小さい花瓣の様な翅がたよりなく空氣を打つて草葉の間から物音にあわてた様によろけ出てあへぎ乍ら逃げ去つて行く姿は、全く可憐と評す可きであらう。小型の蝶にはシジミテフの仲間の他にセヽリテフの一族がある事をも忘れてはならない。而も此等は多く山地にすまつて居て、スミナガシに似た勇氣と力とをさへ所有して居る様である。殆んど翅全体が黑褐色の地で、前翅の先に近く三つ四つの小さい白い斑點をスバル星の様

に集合させて居るのがダイメウセ、リだ。此斑點が細く小さくて後翅にも三つ四つ持つて居るのがイチモンジセ、リだ。イチモンジセ、リはダイメウセ、リに比して少し横に細長い。前翅は全く細い三角形である。前述の様に此等は相當に勇敢だから、捕蟲網に收めてからも油斷がならない。不器用に此等の蝶をつかまうとして居ると、指と指との間からたくみにさつとすりぬけてしまつて、後をふり返らぬあわて方で姿をかくしてしまふのである。然し此等をとらへる事はスミナガシ程困難ではない。小型であるが爲に此等の蝶は、少し飛ぶとすぐ枝や葉の上にとまつて翅をとぢたり開いたりして休息しなければならないのである。だから其處へさつと網を動かせば、此等の蝶はすぐ網の中でばた〳〵とあへいで居るのである。

蜻蛉……

蝶全体が色彩の世界である事に對して蜻蛉は、形の世界であると言ふ可きであらう。四枚の透明な翅を二枚づゝ平行に左右に長くのばして、大空を自由に飛んで行く様は、空を飛べない人間にとつては、大きな憧憬の存在物であらう。人間の作つた飛行機等は、蜻蛉の自由な飛び方に對して、多くの引け目を持つた物と言はなければならない。其程蜻蛉の飛び方は自由自在で堂に入つて居る。春の息吹を最も敏速に感じて成蟲の世界に孵化して出るのは、オホサナヘモドキであらう。体長五センチ程、翅長四センチ程、の小形の蜻蛉であつて、体は太く短く、胸部の背面にはタツノオトシゴを向き合はせた様な黄紋を具へ、腹部の背面と兩側面にも小さい黄斑がある、腹部の少し先太りのした和やかな感じの物である。從つて飛翔力は大した物ではない。強い風に吹かれると遠くへ吹き飛ばされてしまつてどうする事も出來ない様な柔弱さである。翅も弱々しく風に吹き曲げられてたよりなく感ぜられる。春の訪れを感じてあわて〻十分用意のと〻のはね間に孵化して來た爲に何處もかしこもしまりのない物に出來上つてしまつた、と言ふ感じを受ける弱々しさだ。然し此れよりも一層貧弱な体格をしてあわて乍ら孵化して來るのは、ヒトスヂサナヘだ。オホサナヘモドキが逸速く此の世の光を見た爲に、其におくれまいとして未だ十分に出來上らない体軀を、無理にふら〳〵と此の世へさまよひ出す爲に出來合ひでごまかして來た、と言ふのがヒトスヂサナヘだ。大きさはオホサナヘモドキよりも少し小さい物にすぎないが、胴の太さはオホサナヘモドキの半分に足らない程で、翅の巾も三分の二にしか出來て居ない。胸部背面の紋様は同じ形であるけれども、胸部側面が黄綠色をして居て其中央に一本の黒條があるので、すぐ其れと見分けられ得るのである。こんな間に合はせの翅と胴体では到底自由に春の空をかけようとする事等は覺束ない。オホサナヘモドキがふら〳〵し乍らも其れでも相當に高度を征服するのをうらやましがり乍ら、思ひ切つて時々飛び出して見るのである。けれども直に疲勞してしまつて草の上にくた〳〵になつた身体をあへぎ乍ら横たへてしまふのである。うか〳〵として居るとそよ風にさへ思はぬ足を吹き拂はれて、よろめき倒されるのである。すると雲雀が高い雲の上で、何と自由に高さを樂しみながら囀る事であらうか。彼は餘りにも不用意に早々と此の世に飛び出して來た事を後悔するかの様に大きな複眼をくる〳〵と廻轉させるのである。けれども翌年の春の生氣をかすかに身体に感ずると幼蟲達は辛抱しきれなくなつて早々に殼を脱ぎ捨て〻しまふのである。さうして雲雀と麥に嘲笑され乍ら、あへぎ〳〵翅をふるはせて苦しんで居るのである。其のうちに夏がやつて來て空がくら〳〵する程光り出すと、黒色の巨大な体軀に黄色の環狀紋を七つばかり美しくかざつたオニヤンマが無色透明の雄々しい翅をゆるやかに浮ばせて、大空を濶歩しだすのである。すると銀色の翅と青灰色の胸部と褐色の腹部とを持つたギンヤンマが、まけまいとして大きな身体をオニヤンマにすり寄せて競ひ乍ら飛んで行くのである。もう其頃には多くの種類の仲間が上に下に飛翔の妙技をふるつて止まない。其等の中で良く人目を引くのは、灰青色の重厚な色彩の胴体に、前後翅の基部に褐色の黒紋をつけたオホシホカラトンボであ

らう。然し雌は黄色なので全く違つた種類に見える。此れとよく似た蜻蛉にシホカラトンボがある。雄は同じ様に灰白色の粉を胴体に粧つてしやれ込んで居るが、雌は黄色でオホシホカラトンボの雌に類似した、ムギワラトンボト言はれる物である。而し色彩は雄にて雌型の物もあれば、雌にも雄型の物があり、其他に又中間型の物さへあると言ふのだから、色で雌を區別する事は難しい。オホシホカラトンボは翅の基部に黒褐斑があるのでシホカラトンボとは區別し得るのである。ミヤマアカネも又翅の美しさで人目につき易い蜻蛉である。前後共に翅の先端に近く褐色帶を有するので、一目で他の蜻蛉の仲間からは區別し得るのである。晴れた大空を透明な地に褐色帶を持つた翅で悠々と空氣を切つて行く様は、一つの自然の形の美しさの完成であると言つて良からう。ハグロトンボも又黒色の翅を小川の畔の木影や草の上にゆるやかにゆり動かしてとんで行くので一異彩であらう。此れは日本特有の種類なのだから外國では見られぬ情景の發散者といつていゝ。蜻蛉の仲間が多

くは大空への征服者であるに比して、ハグロトンボが地上への關與をねらつて居る處に、此蜻蛉の特色があるのだと言つてよからう。一名ハグロカハトンボとも言はれる様に、彼は林間の小川が好きらしい。黒色の何等の細々しい模様の無い影を木と木の間の靜かな流れの上にうつして、あきない靜けさをたのしまうとするかの様にゆるやかな逍遙を試みて居る彼の姿は、我々日本人の樂しみ得る自然の恩惠の一つであらう。シヤウジヤウトンボは胴体の眞紅の鮮やかさで人目を引く物であらう。彼が草の上にぢつと考へ込むかの様にとまり出したら、もうそろ〳〵太陽が眠ましひのする程輝き始めるのである。白いまばゆい光線の中に赤い力強い光を發見する事はいよ〳〵夏の感を深くする物だと言つていゝ。翅は透明だが基部に淡い褐色のそまりが前後翅共に見られる。彼は飛んで居る時よりも草葉にとまつて居る時の方が感じの出る物らしい。モノサシイトトンボは、グンバイイトトンボと共に小形で目につく蜻蛉である。グンバイイトトンボは最も小型であるが、雄の肢が白色に肥大した軍配狀に二本ばかりなつて居るのでかうした名前をつけられたのである。モノサシイトトンボはグンバイイトトンボに少し後れて夏になつてから出發する物だが少しくグンバイイトトンボより大型である。腹部が金屬光澤をして居るので美しい。此兩者は小型の纖細な翅と身体とをして居るけれども、其の弱々しさは身について居て、ヒトスヂサナへの如き、出來合ひの感じを起させない。彼等はもう生れつきの小さい身体を自ら樂しんで居るかの様だ。彼等は無理に大空高くへは飛ばうとしないで木影の弱い光の中にさゝやかな樂しみを味ははうとして低くとんで居るかの様である。蜻蛉の形と色との完成された物はアキアカネだ。其處にはあらゆる調和がお互に助長し合つて存在して居る。透明の翅、淡い赤色の腹部、綠褐色の胸——其等が秋の晴れた大空をゆるやかに飛び交ふ様は全くの壯觀であり美觀だ。何と言つても蜻蛉の世界は秋のさえた大空だと言ふ感を深く感ぜしめるのが此のアキアカネだ。而も此れは單なる山野の獨占物ではない。彼は大都會のコンクリート平屋根の上にさへ見事な群飛を畫き出すのだ。彼はあらゆる人々に——山の樵夫にも、炭燒のぢいさんにも野の百姓にも、町の小僧さんにも、コンクリートの上の事務員にも、——秋の訪れを告げしらせて、而も自ら其れを樂しみ乍ら飛び廻るのである。時には幾万としれない群を作つて大都會の上を横切つて行く事もある。此處に於てトンボの世界は秋の王座をしめて居るの觀がある。而も八月から十一月末頃まで長い秋の凡てを、象徴し興樂して居るのだから、秋から此アキアカネを取り去る事は全く秋の意義を失つてしまふ事であらう。アキアカネの世界にはもう、オニヤンマの如き力と体軀を誇りすぎる誇張もない。又ヒトスヂサナへの弱々しい纖細さもない。強烈な色彩にとらはれたシヤウジヤウトンボのあくどさもない。ハグロトンボの如き蜻蛉本來の空の存在を忘れた技巧もない。けれども適度に發達した体軀と翅とは十分に高度を征服するだけの強さがあり、遠距離に耐へ得る エネルギー を持つて居り、淡赤色の胴体は秋の空にあくまでおちつきを見せて美

しく、山も野も都會も顧りみない自由さにあく事をしらないのである。一年の曲線の最高調を示す物が秋なら、蜻蛉の曲線の最高度を示す物はアキアカネであらう。

蟬

……

蝶が色彩の世界であり、蜻蛉が形の世界であるとすれば蟬は音の世界であらう。從つて蟬はどれもこれも變な形で美しい物はない。色はたいてい保護色で樹皮や葉影にかくれ消える樣に青色か褐色か灰色かで、蝶の其れに比す可くもない。蜻蛉の悠々たる飛び方に對して蟬の何と言ふ不格好さであらう。蟬は只もうがむしやらに一直線に盲目的に突進して逃げ出そうとするだけである。誰も蟬の形や色や飛び方に感心する者はあるまい。けれども蟬の世界は別な處にあるのだ。彼の世界は音波の世界だ。マツムシ、スゞムシ、クツワムシ等が夜の音樂師ならば、蟬は白晝の音樂師だ。從つて蟬の音樂は日光の强さに調和した力强い物ばかりだ。蟬は凡て男性的だと言つていゝ。蟬の仲間でまづ

第一に孵化して來るのは、ハルゼミだ。山に躑躅が滿開で兩崖山も雷電山も春の裝ひが十分とゝのつた時、ハルゼミは其の小さいシムバルを連續的にうちならして、全山を音の嵐に包圍するのである。身体は黑色と空色とを混合した胸部を持ち、腹部は少し褐色がゝつて居る。大きさは三センチ位の小型の蟬である。臺灣に產するハグロゼミと本洲に產するチツチゼミを除いたら、恐らく此れが最も小さい蟬であらう。けれども其聲は大きい。松の花粉にそめられて黃色い雨のふる頃は、日がてつてさへ居れば午前中は山が振動する程彼はシンバルを打ちたゝいて居る。さすがの彼等も午後三時すぎになると疲れてしまつて、時々小鳥におひとばされた一匹二匹が、ちつ〳〵と悲鳴をあげる位で沈默してしまふのである。彼等が如何にして松の肌の世界を樂しんで居るであらうかを觀察しようとするには、從つて午前中の日のかん〳〵照つて居る時が最もいゝ。ハルゼミは何故かマツの樹皮を非常に好いて居る。彼がぎーぎーと春の光を樂しんで居るのは必ず松の木だ。彼はシムバルをたゝいて居ない時には身体も靜止さして居る。けれども一度ぎー〳〵とやり出すと、愉快さに耐へられなくなつて、金色の短毛を持つた黑い身体を少しづゝ動かし始めるのである。シムバルを振動する爲に腹部の環節を伸縮させるのは、此れは蟬全体の雄のお定りの動作であるが、ハルゼミは身体全体を少しづゝ松の肌の上に、上下に移動させて行くのである。其れは丁度人間が歩き乍ら歌を歌つて居る樣な、感にたへぬと言つた感じである。夏に出てくる多くの蟬達は、少時鳴くと聲を低くするか又しばらく休息するのであるが、ハルゼミは何か物音にでも驚く迄は何時迄も鳴き續けるのである。ほんの一寸した物音にでも彼は警戒してシムバルをたゝき止めるのである。形勢不穩と見れば忽ちにして透明な翅を武者ぶるひして無茶苦茶に飛び出すのである。彼をとる事は柄の長い捕蟲網さへ持つて居れば何でもない。よく注意して彼の存在を發見しさへすればいゝのである。彼をとつて帽子の中へでも入れてやると、驚きが消滅し始めると暢氣な物で、帽子の中でさへぎーぎーとやり始めるのである。耳の側で聞く彼の音波は頭がいたくなる程大きい。彼は短命である。とらへて來て籠の中へ入れておくとたいてい其夜か翌日あたりにもう死んでしまつて居るのである。彼の存在は春の山の大きな息吹である。彼の聲が聞え出すと、山はもうすつかり春の仕度が出來て居るのである。ハルゼミが歌を終つて夏になつて來ると、小型のニイ〳〵ゼミが姿を現はして來る。大きさはハルゼミよりも少し大きい位で、体は黃綠色で黑條紋を持ち前翅は少しばかり透明であるが殘りは暗褐、灰褐色等の斑紋になつて居る。後翅は黑色で有つてじー〳〵と變化のない聲を立てる處はハルゼミに似て居る。彼の聲が聞えると、あゝ夏だなとぴたりと來る所を見ると、彼の單調な音に暑さの表現があるのであらう。彼は夏の先ぶれの役を果す物と言つていゝ。南の國では土川の暑さを歌ふ蟬は、黑い雄大な体軀と透明な翅を持つて、しやあ〳〵〳〵と身体が張りさける程勇しく鳴く處の、クマゼミであるが、足利附近には少ない。足利附近でぢり〳〵と照りつける暑さの中で

少しもひるまずに喧しくしやべり續けるのは、アブラゼミだ。体は黒色だが腹部に白粉をつけて居り、翅全体が黄褐色で不透明なのは此種に限られて居る。ぎー〳〵がら〳〵とないてさながらに暑さ其物の様に密邊をおそつて來るのが、アブラゼミの音波だ。クマゼミ程の力強さは無いが、ぢり〳〵と澁まつた音調は、夏の一特長となり得る十分の力を持つて居る。夕方かな〳〵となくヒグラシは、アブラゼミを少し細長くした黄褐色の体軀をもち、透明な翅をもつた蟬である。ヒグラシが鳴き始めると、もう大分夏至時分よりは日が短かくなつたのを人間に感じさせる。と同時に一日の暑さが頂上を通りこして下り坂になり、やがて涼風の吹き出す夜が近附いた事を知らせるのである。彼は又早朝にもなきたてる。ミン〳〵ゼミはクマゼミを少し小さく丸くした様な割に大きい蟬である。身体はクマゼミの様に眞黒い物で空色の斑紋があるのであるが、翅も同様に透明なのである。而しクマゼミは頭の鉢が開いて居て胸と同じ巾を持つて居るが、ミン〳〵は狹くなつて居てやゝ紡錘

形をなして居るので、すぐ見分け得るのである。みーん〳〵と山で聞く此の蟬の音波は又暑さにあへいで居る様で夏の一特長であらう。ツク〳〵ボウシはヒグラシを少しく小さくした様な蟬で形も似て居る。翅も同じく透明である。而しヒグラシは腹部が黄褐色であるけれども、ツク〳〵ボウシは黒色である。而して後者は胴体が少しく細作りに出來て居る。おーしつく〳〵おうしつく〳〵となく此の蟬も又窓邊に暑さと共におそひくる暑氣の一片であらう。此等の夏の蟬が暑さと光の中に融合して行つて、暑さと光の一部分にさへなつて居る様に夏に對して積極的である事を見脫してはならない。彼等は夏を樂しみ夏を歌ひそして又自分自身も夏の一分子となつて短かい生命を終つて行く所に悔ひなき彼等の生活の意義が存在して居るのであらう。其處に彼等の音樂は纖細な技巧の世界からはるかに飛躍した力強さを持つて居るのである。彼等は單に音波を出して夏の暑さをまぎらはさうとして居るのではない。彼は力一杯に歌つて居る。單調な歌聲であり平凡な音調ではあるが彼等は一生懸命である。彼等ががむしやらに一直線に飛んで行く様に彼は只もうがむしやらに歌つて居る。アブラゼミ等は無理無體に鉦をたゝきふる様な音をさへ出して居る。歌ひ終る時と歌ひ始める時等は低いベースの合間に時々あへぐ様な痙攣する音をさへ出して居る。而し彼はさうした間に力をつけて又疲勞を回復して更に力一杯にがら〳〵とわめき立てるのである。彼等の音樂は彼等の生活其物だと言つていゝ。其處に野蕃人の音樂の様な單調さと平凡さはある。然し其れは少しもあぶなげのない力強さである。彼等は野蕃人が大鼓を打つ様に只もう力一ぱいである。彼等は力一杯歌つてさうして死んで行くのである。

雜草……

一寸見ると雜草なんてつまらないと考へる事があらうが、然し其處にも十分生物としての意義と美しさが存在して居るのである。園藝植物はなる程美しい花を持つては居る。けれども其處には人爲的なこせ〳〵した處が加はつて居る事は否定出來ないであらう。惡く言へば園藝植物は人間におべつかを使つて居る。而し雜草は只もう天眞爛漫である。雜草の價値は其處にあるのであつて、美しい花をつけないからと言つて必ずしも見捨てた物ではない。極端に言へば園藝植物の美しさと言ふ物は造花の美しさから餘りへだたつた物ではない。其處には誇張された色彩と異様に發達した花瓣がよそ行き顏をしてすましこんで居るのだとさへ言へよう。雜草の力強さと生々しさと新鮮さには及びもつかないのである。只ぼんやりと野の草だ道邊の雜草だとして注意を拂はない人には、春から秋にかけて同じ様な草が何時も繁つて居るとのみ考へて居る事だらうが、其處にも多くの變化と消長が行はれて居るのである。逸速く未だ淡寒い空氣の中に小さい白い筒狀の花をつけて春の使となる者はサギゴケだ。蔓を引いて繁殖する植物で、葉は根生してむらがつて居る。花冠は兩脣形で人の口に似て居て紅紫色である。田の畔等に長く列を作つて花を開いて、冬の去つた事を人に知らせるのである。するとナヅナがぐん

〳〵と莖を伸ばして例の三角形の三味線のばちに似た果實をつけ出すのである。其果實の形からペンペングサの名を頂戴したのであるが實に丈夫な雜草である。ペンペングサを生やしてやるぞと言ふ事は相手をけなしつける侮り言葉になつて居る程うるさい雜草ででもある。而し道邊にあつて小さい十字形の花をつけた處は、一顧に價しない事もない。かうしたありふれた植物と言ふ者は案外に我々の心には素通りをし易い物である。春の七草の一つで古風な草でゝもあるのだし又十字科植物の代表者でもあるのだから時には手に取つて花をくらべて見る事も必要であらう。ツクシはもう誰でも知つて居る筆形の子嚢体であるが、此はスギナと同一植物でもあるし、其胞子の出し方に注意する必要があらう。ツクシの大地からすく〳〵と立上つて來る樣は生命の力の春に會つてぐん〳〵と表現されて行く事を明確に物語つて居る事を忘れてはならない。他の雜草達が未だ芽を出しかねて眠つて居る時に、ツクシは春雨に暖められ乍ら元氣に飛び出して來るのである。ツルキンバイは櫻

が咲く頃になると、其黄色いバラ科の特徴である五瓣花の花で田の畔を一面にかざり立てるのである。莖はつる狀で地上をはひ廻つて居てミツバの樣な柄の長い葉をつけて居る。櫻にうかれた樣な人は往々にして此の存在にさへ氣附かないで踏躪つてしまふ事であらうが決して、見捨てた花ではない。やがて春がたけて來ると道邊に一面に生ひ繁つて來るのがコアカザだ。此れはアカザ科の植物で學者は此れを歸外植物らしいと言つて居る。高さは一二尺で葉は有柄卵狀三角形で淺い齒があり質が軟かい。一寸見て如何にも赤子を思はせる樣なやはらかさのある植物である。莖の

コヒルガホとツユクサ

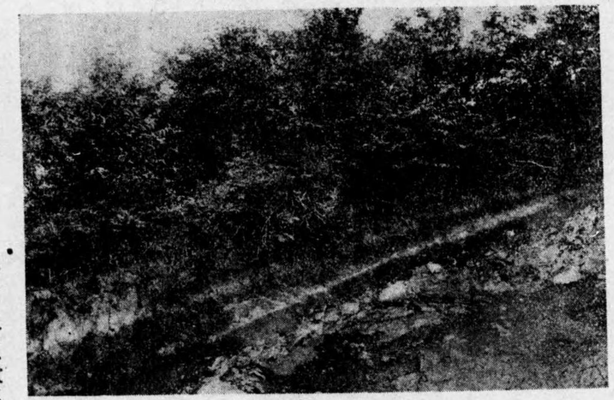
頂上に短穗を出して多數の小形綠色花をもぞ〳〵と聚着するのである。五つの萼片と五つの雄蕋があるが其れは花とは思はれない程ごた〳〵して居る。トウダイグサも路傍に多い草である。莖は春になつて數寸の高さに伸長する越年草であるが、花は分枝した莖の上に苞葉に圍まれて綠黄色の小團花をつける。莖の分枝する處には五輪生葉がある。此の花はやがて暑さの來る事を暗示する。すると大岩山行道山の谷間か樹間に、シャガがほのかな空色をうつした白い花をつける。シャガはアヤメ花の多年生草本で葉は全くアヤメに似て劍狀である。花はアヤメ科植物特有の三つの外花蓋及び三つの內花蓋、雄蘂三本、雌蘂の柱頭と花柱が三つに分れて存在して下生子房をつけろ、等を持つた物である。一つの花莖に澤山の花がついて花一つの小型をおぎなつて居る。シャガが樹間に清新な花を開く頃になるとそろ〳〵、夕立が起つて來る。驟雨にぬれ乍ら靜かに立つて居るシャガの美しさは、春の山の一つの景物と言ふ可きであらう。すると木立の暗さにさまよひ出たフクロがほう〳〵と不可思議な音を發するのである。すると人間はもう雨にぬれる事等忘れてしまふに違ひない。其の頃行道山のクマガイソウは花を終つて居る頃だ。クマガイソウは木々の根元邊に大きな扇狀をした、二枚の綠葉を向ひ合はせてつけて、一尺ばかりぬき出た珍妙な草であるが、花はラン科植物特有の豆の花を少しひねくつた樣な物で綠白色の脣片を持つて居る。此れが熊谷が母衣を背にかけた姿に似て居るのだと言はれて居るが、判じ畵をとく程の難事であらう。二枚の扇狀をした大きな葉を持つて居ると言ふ特徴で此の植物を心にとめて居た方が忘れ難い。やがて夏に近附くと路傍に澤山の禾本科植物達が穗を拔き出すのである。中で最も目につくのは、カモジグサであらう。高さ二三尺葉は麥に似て葉鞘が長い。穗は紫綠色で互生する小穗を有し芒を持つて居る。何の趣もない樣な草だが只此れは力の表現であり生活力の雄々しさで有る事を忘れてはいけない。全然飾り氣のない素朴な所に此の植物の特徴はあるのである。而し何となく餘裕のないと言ふ處に物足りなさはあら

う。其の頃北米からやつて來た、もう今では日本の津々浦々山間僻地に充滿してしまつて日本化し終へたヒメジョオンが菊科植物特有の小さい頭狀花を澤山につけて居る。此のヒメジョオンの驚く可き繁殖力と力とは實に物凄い限りと言はなければなるまい。和名は姫女苑と書くのであるが餘り其名前にふさはしい美しさは持つて居ない。只此れは其平凡な生活力に特徴があると言つて良からう。路傍、空地、山間、此れはもう到る處に新しい境地を切り開いて居るのである。其の頃校庭に一面に生ひ繁つてペンペン草の後をつぐのは、ニハヤナギだ。莖は分枝して直立する物、はひ廣がる物色々で葉は柳に似て小さい。花は小形で葉腋に二つ三つ生ずるのである。よく見ると蕚は五片綠色緣が白色で馬鹿にはならない美しさである。夏がやつて來ると、コヒルガホとヒルガホが漏斗狀の美しい淡紅色の花をつける。朝顏の美しさに心奪はれた人達は此の野の花の美しさを顧みない樣であるが、單色の中に捨て難い新鮮さを持つて居る。コヒルガホの葉は戟形で兩袖があるが、ヒルガホの葉は披針で兩袖がない。此等の花と共に忘れ難い物はツユクサであらう。葉は披針形で柄は鞘になつて莖を包んで居る。莖は弱々しくてしつかとは立てない。其の豆の花に似た然し全く違つた紫色の花は、一目見ただけで永遠に忘れ難い新鮮さである。ツユクサと言ふ名は全く此の花にふさはしい。ツユクサと共に忘れ難き夏の美しさをそへる物にオホマツヨヒグサがある。高さ四五尺になり莖は多くの枝を出し、其の先に澤山の黃色い ケシ の花に似た花をつける。葉は先の少しとがつた長楕圓形で上部に行くに從つて葉柄が短く消え去つて行くのである。此のオホマツヨヒグサは、ドフリスが偶然變異を發見したと言ふ歷史的に意義のある植物である。ドフリスはオホマツヨヒグサから偶然變異を發見したのではあるが、後になつて其れは雜種であつて分離して新種が出て來たのであつた事が分つたけれども、ドフリスのとなへ出した偶然變異と言ふ物は、實在せる眞理である事が、他の材料に由つて證明されたのである。此れは全くドフリイスの怪我の功名とも言ふ可きであらう。オホマツヨヒグサの美しさは少し少女地味で感傷的でありすぎるけれども、夕方の微光の中に單色の淸い花を開いた美しさは確かに印象を殘す物である事は否めないであらう。其の頃小さい流れの溝には一面にオホミゾソバが生ひ繁つて、小さい赤い、ソバの花に類した花をつけて居る。莖は細長くてつるの樣に水面をはひ繁つて居る。葉は戟形でコヒルガホの其れに似て居る。オヒシバ、メヒシバが校庭や路傍に一面に穗を出し始めると、もう秋の氣節には入つて來る。兩者共禾本科植物の兄弟分だから葉は麥に似て居る。其の名前の樣にオヒシバが頑强で、一名チカラグサと呼ばれる。此れを拔き取らうとするには相當な力を出してがんばらないと駄目である。メヒシバは莖も根もやはらかくて忽ちにして拔きとり得る。莖は直立し難くて橫にはひ伸びて居る。オヒシバもメヒシバも共に穗は數條に分岐して指を擴げた形狀である。メヒシバはオヒシバより其の分岐した穗が細くて長い。そうすると其の橫の方でチカラシバが紫黑色の大きなエノコロの穗を倍にした樣な物凄い穗を出して雄々しく立ち始めるのである。猫の尾の樣なエノコロ草に似て居ても此れは全く力其物に見える程岩乘である。紫黑色の芒は一寸こはいおぢさんの鬚の樣である。此奴を根から拔き取らうとしていくら力を入れて引つぱつても駄目だ。何か唐鍬等で堀り起さないと其の根はしつかと大地に食ひ込んで居て頑强にがんばつて居る。秋の彼岸が來ると喧しかつた蟬も凡て消え去つてしまつて稻がみのり始める。すると毒草のヒガンバナが佛畫にでもありさうな不可思議な曲線を畫いて咲き始める。一名曼珠沙華と言はれるのであるから佛畫地味て居る道理である。花が終つてから綠形の綠葉を出して、此れは冬を越して春枯れる。其のうちに木枯が吹き始めて草も木も冬仕度をする。一年生草本も二年生草本も其の役目を終つた物は次々と枯れて、殘つた物が木枯で最後に生命の幕をとぢ終るのである。而し多年生草本達は地上部が枯死しても根は生きて地下にあつて、來年の春が來るのを辛抱强くまち始める。一年生草本達は種子の中に次の時代の生命の胚がかくされて

居て此れも土の中で根氣よく溫度と濕氣と春の光線とを待つて居る。二年生草本達はもう敢然として芽を出して、葉綠素で貧弱な光線をとらへ乍らも勇敢に、冬を越さうとして居る。落葉樹達は皆葉をふるひ落して小さく身体を縮めて居るが、常綠樹達は斷然がんばつて葉を附けたまゝ冬を越さうとして居る。蛙はもう深く土中にもぐつてつめたく息をひそめて居るに違ひない。而し雀は相變らずおしやべりをし乍ら冬を其の儘で越さうとして居る。枯れて行つた雜草達は悔なき大往生をとげた事であらう。

風化……

くり返し〳〵創造をする世界――蝶も蜻蛉も蟬も天牛も雜草も毎年同じ様に出現して來る様に見える。而し其處にも極く徐々の變化がある。新種が生じたり或種が絶滅したりする事が數万年と言ふ長い年月の間には起つて居る。かつて不思議な條件の下に生じた簡單な一個の原生生物が複雜極りなき人類に迄進化發展した道程を考へると、生物界の變化も非常に物すごい物と言はなければならない。然し其處には驚く可き程の時間の經過がある。人間が地球上に出現してからでさへ百万年と言はれて居る。人類の歴史が長くて四千年五千年であるに對して人類の過去は實に其の二百倍の悠久さである。從つて生物の過去は數億年の茫漠さである。人類の歴史から考へると、万と言ふ數はもう永遠といつて良い。だから生物の變化は長い永遠の年月の間に行はれて行くのであつて我々の



兩崖山麓の切通し

經驗からは證明しがたい。極く徐々とした眼に見えぬ變化が昨年と今年との間には行はれて居るのであらう。其れと共に生物の立つて居る大地も又徐々に變化を受けて居る事を見のがしてはならない。其れは又生物の變化程とらへ難く茫漠とした物ではない。大地の變化はかすか乍らも我々の眼にふれて來るのである。其の最もいゝ實例は兩崖山の袖に有る切り通しである。切り通しに立つて兩側の岩石を見るとすでにもう其れはぼろ〳〵に成つて居る。而し未だ岩石である。古生層の頁岩の特徴を十分に具へて居る。地層も分明して居る。然し其の上の山肌に近い所を見ると頂上近くは一尺位、裾の方は數尺に渡つてもうすでに土壤になつてしまつた處がある。上部の土壤を風化土と言ひ下の岩石を母岩を言ふのである。上部の風化土の厚さは年々と其の巾を増加して行くのが見られるのである。其の様に母岩が段々と風化土に成り行くのを、風化作用と言ふのである。風化作用に關與する物は殆んど凡ての自然物及び自然現象と言つていゝだらう。雨、風、雪、霰、溫度、重力、四季、植物、動物、……此等自然の諸々の存在物及現象の力に由つて岩石は段々と土壤に變化して行くのである。物理的並びに化學的に變化を與へられるのである。さうして植物達が吸收して養分となし得る化合物が生じて來るのである。だから風化作用は植物達に取つては其の生活力の根元を與へる物とも言ひ得るであらう。動物は植物達及び一部の動物達の存在に由つて生活の根元を與へられて居る物であるから、風化作用は廣い意味に於て生物の母胎たる大地の暖かき血液の作用であらう。其の意味に於て我々は生物達の生活を見つめると共に、又風化作用に由つて大地が生物生活の第一歩の根元を作りつゝある事を忘れてはならない。

千　溪

初日雨晴淑景融　晨開天易献年豐
春來總得更君慧　芳草地塘色轉濃
不假雞鳴狗吠才　萬重關鎭嶺頭開
黄粱梦覺七年日　殿裡如麿一壯哉

松根東洋城

行　道　山

杉谷に杉谷青しほとゝぎす
渡　良　瀬　橋
人々や夜涼しく川涼しくと
兩　崖　山
頂や城があつたと秋晴るゝ
渡　良　瀬　川
わたらせのまがるところや秋の水
鏤　阿　寺
鐘樓より銀杏あかるき月夜かな

足利市火災報知機に就いて

理化教室　小林保二
淺村菊次郎

足利市の火災報知機は昭和四年二月建設せられ、MM百機一線式、東京報知機株式會社の製作になり、經費は、發信機六五基分二万三百四十六圓、受信機一基分三千五百圓を要して居る。

火災報知機は一般市民が火災を認めた時電信と同じ作用により消防部隊に急報する機關で發信機、受信機、電池、及連絡線路の四部より成つてゐる。公衆用發信機は丁度郵便函の様に街路の所々に設置し、受信機と電池とは消防署に置き此等を電線で連絡する。

前述百機一線式と云ふのは各發信機を丁度珠數玉を繋ぐやうに環狀の一線に直列に接續して中央受信機に導くもので發信機には發報用の押釦を裝置してあり又各發信機には夫々番號が與へてある、今發信機の釦を押せば、發信番號に相當する點數が自動的に三回繰返して送信せられ受信機には其點數符號が表はれ發信機の番號を示す。一環線に接續し得る發信機の數は線路の狀態によつて異るが大体百機位を連結し得るので百機一線式と稱せられる、尚本機には左記の裝置が備へてある。

a　自動逐次送信裝置
b　二重受信裝置
c　障害監視裝置と罹障中の發報授受裝置

d　電話通信裝置

自動逐次送信裝置

百機一線式では同時に二個所、三個所の發信機から發報される場合もある筈で、それに備へるために自動逐次即ち同時に二ヶ所以上から發報されても互に混信せず甲發信機の送信が終つて後乙發信機から送信されそれが終つてから丙より送信されるやうな裝置が設備されてある。

二　重　受　信

發信機に於て釦を押し其發信機番號に相當する點數が送信されると受信機では自動的に先づ出火信號の電燈が點火され同時にブザー及鈴鐘一點が鳴つて注意を與へ次で二重受信即ち點鐘が其送られた點數を打ち番號を知らせると共に保存のため自動記錄機を動かす、自動記錄機とは發信機よりの發報により自動的に起動し帶紙を繰出して其點數を記錄するもので送信が終れば其帶紙も自動的に停止する。

障害監視裝置と罹障中の發報授受裝置

火災報知機は發信する際障害のため通じないやうな場合があつては折角の設備も何の効も無い事になる、このMM式では閉電路式としてあつて平常でも絶へず電流を通じて置き万一線路に故障が發生した場合には直ちにブザーが鳴り「地氣」又は「斷線」等夫々故障の原因を示す電燈が點火されるやうになつて居る。それで係員はこの修理手配をすると同時に之に應じて應急轉換器を切替へれば線路が障害に罹つて居る場合でも發信機からの發報を確實に受信する事が出來る。

電　話　通　信　裝　置

これは携帶電話機によつて發信機から受信所へ通話し得る裝置である。

◈發　信　機

發信機内の主要部は左の通りで完全に密閉した防水防濕の鐵函中に藏めてある。

a押釦機構　b符號圓板と其廻轉裝置　c發動電磁石　d返信用警鈴　e電話用ジャック　f保安裝置　g試驗用轉換器

發信機から消防署へ發報しようとするときは肱又は下駄又は小石等で前面の薄い硝子板を壞し中央の發報用押釦を押すのである。硝子板は惡戯を防ぐために嵌入してある。押釦を押すと中央受信所よりの電流により發動電磁石が動き符號圓板が廻轉を始め點數符號を送出する。そして三回繰返して符號を送れば自動的に停止する。

圓板が廻轉すれば火災通報者に對する返事信號として發信機内の警鈴が鳴る。

符號圓板は發動電磁石が動いて其の抑止栓を外すと發條によつて廻轉するもので一度發報したら再びこれを捲かなければ蓋が締らぬやうになつてゐる。そしてその間は釦を押しても受信機には何も信號が表はれない。

保安裝置としては受信機内に眞空避雷器（交流三百ヴォルトで放電）とフューズ（一アンペア）とを裝置し報知機線が電燈電力線等と混觸することがあつても危險が無いやうになつてゐる。

◈受　信　機

受信機には左記の主要な部がある。

a自動記錄機　b單撞電鈴　c表示燈　dブザー　e障害時應急轉換器　f電話機　g電流計

自動記錄機には印字機と鑽孔機との二種があつて何れも帶紙に發報された發信機番號を記錄する、帶紙は發信機よりの發報と共に自動的に繰出され送信が終れば停止する。

單擅電鈴は發報された時先づ捨鐘一點を打て係員に注意を與へ次に發信機番號に相當する點數を鳴らす。

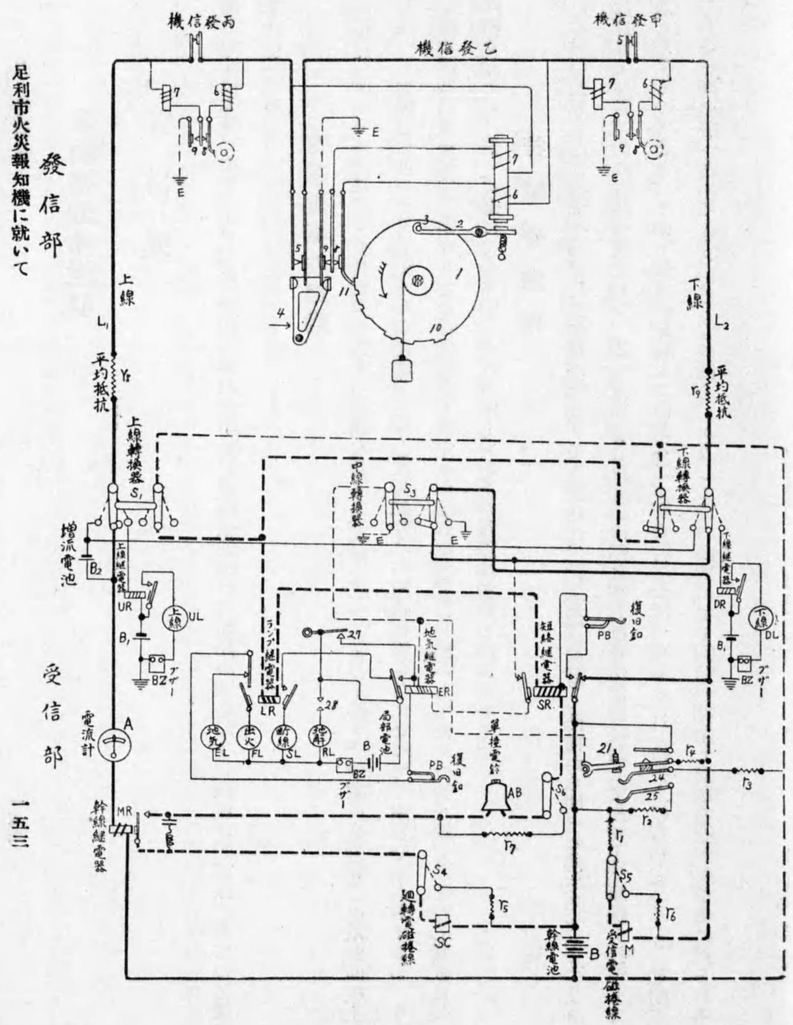
表示燈は受信機の上部に裝置せられ「出火報」「地氣障碍」「斷線障碍」「上線發報」「下線發報」「發條弛解」等の文字を記した硝子板で覆ひ平常は之を露出せず其事項發生と同時に直ちに自動的に點火照出するやうとなつてゐる。表示燈點火の際同時にブザーが鳴つて係員に注意を與へる。

障碍時應急轉換器は受信機の正面に三個並んであるもので外線が障害に罹つたとき直ちに自動的に其障害種類が表示燈で表はされるから係員は早速修理の手配をし更に地氣障碍の場合は中線轉換器を向て左方に切換ておく此の操作によつて表示燈は消えこの場合發信機より發報されゝば其儘で平常通り受信機に受信せられる。

又外線斷線の場合には三個の轉換器全部を向つて右方に切換えて置く。すると矢張り表示燈が消える。そして障碍點より上線側にある發信機より發報して來ると「上線發報」の表示燈が點火しブザーが鳴るから上線轉換器丈けを最左方に轉ずると記錄機が自動的に起動して帶紙に符號を印し且單擅電鈴が鳴つて點數を報ずる。若し障碍點より下線側にある發信機からの發報であると「下線發報」の表示燈が點火しブザーが鳴るから下線轉換器だけを最左方に轉じて受信するのである。

斷線障碍が復舊すると「上線發報」「下線發報」の兩表示燈が點火しブザーが鳴る。そこで各轉換器を常位に戻す。

電流計は平素回線に電流を流してあるから其監視用として備えてある。



◈回路動作説明

一、發信機

附圖上部は發信機を示す其内乙發信機は其詳細を示し、甲丙發信機は其回路略圖を示す。回路は閉電路で總ての發信機は平素短絡されてゐる。

符號圓板の起動

(1)は符號圓板で周圍に發信機番號に相當する凸齒を有する、(圖は一二三番)を示す。平素は槓杆(2)の爪が圓板上の栓(3)を捉へて廻轉させない。又發動電磁石捲線(6)(7)は押釦(4)の短絡接點(5)によつて平素短絡せられてゐる。今押釦(4)を押せば其短絡接點(5)が開くため發動電磁石に電流が流れ槓杆(2)を動かして圓板の抑止線(3)を外し圓板は矢の方向に回轉を始める。圖では錘によつて動くやうに示してあるが實際は發條を用ひてある。

符號の送信

(8)は送信接點(9)は接地接點で符號圓板が起動すると彈條(11)の先端は圓板の凸齒から凹部に落ちるため接點(8)及(9)は開き上線及下線の連絡が斷たれる、即ち接點(8)及(9)は釦を押した時受信機に對して最初上下兩線を接地して後斷線狀態となすものである、やがて圓板が廻轉して凸齒(10)が彈條(11)の所へ來ると(11)は押上げられ(8)及(9)を閉ぢて進み(11)がその間の谷へ落ちると(8)及(9)は開く、かうして齒の凸凹に從て回路が開閉し點數符號が受信機に送られるのである。

二、受信機

平常の場合

平常は圖中太い線で示す回路を造つてあるから幹線繼電器が働いてゐて圖に示されるやうに接極子を吸引してゐる。この接極子の接點を跨いで蓄電器と抵抗とが接續してあるのは其接點が離れる際火花の生ずるのを防ぐ爲である。

發報の場合

(イ)發信機送信接點が開いた時幹線繼電器が働きを失ひ左の回路が出來る。

「幹線電池—廻轉電磁石(SC)—單撞電鈴—短絡繼電器(SR)—ランプ繼電器(LR)」

そこで廻轉電磁石が働くため自働記錄機は廻轉を始め帶紙を繰出す。又單撞電鈴は捨鐘一點を打ち係員に注意を與へる。

(ロ)前記の回路により短絡繼電器が一度働作して其接極子を吸引すれば其保持回路を作り幹線繼電器接極子接點の離合に關係無く短絡繼電器は働き切りとなる。

(ハ)短絡繼電器が働いてゐる間は發信機回路は次の通となる。

「幹線電池—受信電磁石(M)—下線—各發信機—上線—幹線繼電器」

これがため發信機の符號圓板の廻轉が其送信接點を開閉する毎に受信電磁石が働き其點數を帶紙に印し又單撞電鈴も其點數を鳴らす。

(ニ)發信機から發報されて其送信接點が開くことによりイ)項の回路が出來ランプ繼電器が働くと同時に又發信機釦に於ける地氣接點(9)の瞬間的の閉結により接地繼電器(ER)が働き局部電池の電流により「出火報」ランプが點火しブザーを鳴らす。

この繼電器には保持捲線があつてこの回路を保持する。

(ホ)受信が終て係員が二個の復舊釦を押すと一方のものは短絡繼電器の保持回路を開く故この繼電器が復舊し平常の回路に復する。他方のものは接地繼電器を復して表示燈、ブザー回路を復舊する。

(ヘ)記錄機の帶紙繰出用發條が弛解した時には接點(28)が接觸して表示燈が點火し、ブザーが鳴り係員に警告する。係員が發條を捲けば電燈が消えブザーの鳴動が止む。

逐次送信

(イ)發信機で送信中は其送信電流が平素の二分の一となる樣に回路が調節してあるから例へば今乙發信機で送信中は甲及丙で釦を押しても其發動電磁石は働かないで內部は其儘に保たれ短絡接點は開き送信接點及地氣接點は閉ぢたまゝに保持される。

(ロ)乙發信機で送信が終り符號圓板が常位に復し受信記錄機に於て記錄が終り其回轉が停止されやうとすると同時に同機中にある彈條接子(21)は先づ彈條(25)と接觸する。すると幹線電池の陽極が接地せらるゝ事となり其陰極は上線を經て接續した丙發信機の發動電磁石の半捲線(7)を經て大地に接續する故に(7)が働いて丙の符號圓板を起動させ送信を開始する。丙の送信が終れば前記同樣の順序で甲機から送信せられる。即ち發信機の發働順序は上線側に於て受信機に近いものから逐次送信するのである。

(ハ)若し發報した發信機が下線側の受信機に近くて上線側としては受信機から遠く前記の回路では抵抗が高く發信機の發動電磁石が働かぬ場合には受信記錄中の彈條接子(21)が更に進んで彈條(24)に接すると今度は幹線電池の陰極が接地せられる事となり下線側に於て受信機に近い發信機から逐次送信せらる。

障碍監視と罹障中に於ける信號授受

(a)地氣障碍の場合　地氣障害が生じたときは下線に接續して接地してある地氣繼電器が働くため局部電池の電流は該繼電器の保持線輪を經由し「地氣ランプ」を點火しブザーを鳴らす。

地氣繼電器は抵抗が高く感度が鋭敏であるから地氣障害の抵抗が相當高くても完全に働作する。

「地氣」ランプが點火した時係員が中線轉換器を向て左方に轉ずると地氣繼電器は回路外となりランプが消えブザーの鳴動も止む。

この間に發信機から發報すると只地氣繼電器が回路に接續してゐない丈で他は常時の回路通りであるから發信機釦による送信接點の開閉により完全に受信し得られ又逐次送信も行はれる、尙この場合地氣繼電器は働かないから記錄機が起動するとき瞬間的に接點(27)を閉ぢ地氣繼電器の保持捲線に電流を通じて之を働き切りとして「出火」ランプを點火させる。

(b)斷線障害の場合　斷線障碍が生じた時は幹線繼電器が働きを失ふから、前述平常受信の場合と同樣の回路が出來ランプ繼電器が働いて「斷線」ランプが點火しブザーが鳴る。係員が應急轉換器の上線、中線、下線の三個共向つて右方に轉ずるとランプは消えブザーは鳴り止む。

幹線繼電器が働きを失つたとき受信電磁石は働いて帶紙が繰出されるが前記三轉換器を右に轉ずる事によつて回路外に除かれ帶紙は自動的に停止する。

轉換器の右轉は上線では上線繼電器、下線では下線繼電器を接續して接地させる事になる。それで今斷線個所から上線側にある發信機より發報があつた時は其釦の地氣接點のため瞬間的に上線が接地するため受信機では上線發報のランプが點火しブザーが鳴る。係員が上線轉換器を最左方に轉ずると

「發信機地氣接點—上線—增流電池—幹線繼電器—幹線電地—地氣」の回路が出來るため受信し得。又逐次送信も行はれる。この場合發信機では發動電磁石の一方丈けの捲線で働作するのである。

又斷線個所よりも下線側に屬する發信機より發報がある場合には受信機の「下線發報」のランプが點火しブザーが鳴るため下線轉換器を向て最左方に轉ずると前記の回路は下線の方に接續されて同樣受信される。增流電池は遠方で發報し抵抗の高い場合の補助で圖は上線轉換器の所に接續してある。

(c)斷線地氣障害の場合　外線が斷線して其先端が接地する事がある。この場合には先づ斷線した瞬間に前記斷線障碍の場合の現象が起るから係員は應急轉換器三個をすべて右方に轉ずる。この時斷線後接地した方の上線又は下線繼電器が働き之に相當する發報ランプが點火するから其地氣障害となつた事が判るので其側の轉換器だけを最左方に轉じておく、すると接地した上線又は下線は

「增流電池—幹線繼電器—幹線電池—地氣」の回路により閉電路となるから平常通り信號を授受する事が出來る。斷線となつた方の信號授受は前記斷線障害の場合に記した通りである。

(d)障害二個所以上の場合　前述の通り本機は外線故障があつても信號を授受し得る構造となつて居るが不幸にして二個所以上の障害が同時に生じた場合は其中間に挾まれた發信機だけは送信が不能となるのは已むを得ない。併しこの樣な事は暴風雨等の非常損害の外は殆ど起る事は無い。

(e)二重受信裝置手入の場合　記錄機修理等のため一時取りはづす必要のある場合は轉換器(S^4)及(S^5)を右方に轉じ抵抗を入れて廻路の狀態を記錄機のある場合と同樣にしておきその間單撞電鈴の點數で受信し、又單撞電鈴を取外す場合は轉換器(S^6)を右方に轉じ抵抗を入れて他方の機械働作に支障の無い樣にする。

足利と美術

圖畫教室　吉田福一

その町に誇り得る文化、誇り得る美術を持たないといふことは淋しいことだ。それは殆んどその町に歷史のないといふことに等しい。夫々に歷史は有る。然し文學美術宗教の文化的方面の歷史を持つといふことは、どれ程その町を美しく、床しく、そして高く評價するか分らないのだ。又それ等がどれ程その町の後輩をして、有形無形に感奮せしめ、激勵せしめるか、良き溫床は軈て良き芽生を促し、將來の美果を約束させることになるのだ。

産業の都足利は他面偉大な文化の都であるのだ。往時の文化の先驅者であつた足利學校は余りにも有名であるが、美術方面を眺めたゞけでも、如何に多くの寶が目の邊にあり、それが堂々天下に誇り得るものであるか、吾々は泌々と身の幸福を想はざるを得ないと共に、夫等を殘して呉れた先人に深甚の感謝を表せざるを得ないのである。

近鄕近在に局限された程度のものは夫々に何處にもあるものである。然し天下に著名のものを持つといふことは容易ではない。由來關東北地方は兵馬の由緒は深い。けれども文化の恩惠には寔に薄いのである。爲めに何處に行つても見らるべき美術は極めて僅少である。然るに足利に於ては繪畫に建築に彫刻に工藝に、何れも天下に誇り得る著名のものを有つのである。自ら快哉を禁じ得ないではないか。

左に夫等に就いて略述して見ようと思ふのである。唯工藝が頁の關係で次號に割愛せざるを得なかつたのは遺憾である。

繪　畫

狩野興以

興以また興意とも言ふ。桃山時代より江戸時代の初期に居つた人である。足利本町の人で姓は松尾氏、名は定信、通稱彌左衞門、又彌兵衞といひ、興以はその號である。永祿八年(紀元二二二五年)に生れた。

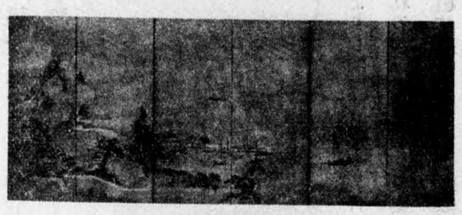
【扶桑畫人傳】

白衣觀音像　狩野興以

興以。狩野氏名ハ定信、興以ト號ス。通稱彌左衞門トイフ、野州足利ノ人ナリ。畫法ヲ右京進光信ニ學ンデ能クス。後牧溪・雪舟ノ畫風ヲ慕ヒテ、一格ヲナス。人物草花ヲ巧ニス。其ノ筆意風致アリ。探幽(守信)・尙信・安信ノ幼稚ノ頃、興以ノ家ニ養ヒテ畫學ヲ研究セシムルコトハ世人ノ知ルトコロナリ。後兄弟三人、畫學上達シテ世ニ稱譽セラルヽモ、全ク興以ノ盡力ニ依ルナリ。其功ニヨリテ、三子ヨリ氏ヲ贈リテ狩野ト稱ス。晩年好ンデ宗祇ノ像ヲ畫キ各名家ノ贊詞アリ。

之に依つて其の造詣の程も察知出來ようと思ふ。京都に上つて狩野永德の長子光信の門に學び、後牧溪、雪舟等の畫風を慕ひ、遂に一格を成して法橋に叙せられたのである。後陽成天皇の慶長十三年(紀元二二六八)恩師光信歿し、その弟孝信また後水尾天皇の元和四年(紀元二二七八)四十八歳を以て歿するに臨んで、守信(探幽)十五歳・尙信十一歳・安信八歳の三子を興以に託した。興以元來品性高潔で頗る義に富んでゐたので、託孤の重責を痛感し、心を盡して三子を救養し、遂に克く

大名を成さしめたのであつた。探幽が狩野派中興の英資であつて狩野派をして千歳の重きにあらしめたのは余りにも有名なことである。その力は又興つて興以に在るといつても過言ではないのである。故に後年守信等は其の恩誼に感じて、興以に贈るに狩野姓を以てしたのである。かくして狩野興以の名は當時の畫界に一段の光彩を發揮するに至つた。興以は名利に恬淡であつたもの丶如く、其の遺墨の世に存するものは極めて少ないばかりでなく、其の命名も亦比較的簡甚ではなかつた。慶長七年京都二條城造營に際して、興以は命を拜して奥上段の白書院に、眠雀を畫き、同十四年名古屋城本丸納戸書院に、雪中梅の大作、大奥書院(通稱御湯殿書院)に室町時代に流行した扇流しの繪を畫いたが、何れも皆當世の名家たる岩佐又兵衞・土佐光起・狩野永德・山樂・松榮・光信・貞信・守信等の名品大作に對照して些の遜色が無く、最もよく雄渾高韻の筆致を浮動せしめたのであつた。



山水屏風圖　狩野興以

興以、刑部少輔に任じ、法橋に叙せられた。晩年紀州家に聘せられて三百石の知行を受けたが、明正天皇の寛永十三年(紀元二二九六)七月歿した。享年七十二。東京赤坂區丹後町三部坂種德寺にその墓がある。(足利市史に依る)

興以の出現が當時の畫壇に與へた影響中特に注意すべきは前代永德に依つて創められた勁拔の畫風が一變せられて清曠淡雅の体となつた事である。蓋しこの傾向はその師光信の代より表れ始めたが顯著となつたのは全く興以の時からである。これ戰亂漸く收まつた太平の世の反映とも見られるが、又畫家その人の個性にも依るであらう。前圖白衣觀音像(長野縣建福寺藏)は左右龍虎と三幅對となすもので、構圖絶妙、筆墨秀潤、まことに水墨畫の觀音像として上々のものであり、其の描法には正に牧溪を想起せしむるものがある。その他の遺作を見る

とき興以が如何に古風を參酌して氣格清秀なる自己の藝術を大成したかゞ明にせられて感興が深い。（世界美術全集第二十一卷秋山光夫）

田崎草雲

傳記に就いては前編に於て相當悉しく照會されてあるから、茲に於ては主として草雲の畫人としての立場及び作品を擧げて述べて見ようと思ふ。

晩年の田崎草雲先生

先生は、畫家らしくない畫家だつたさうだ。身の丈六尺に近く堂々たる偉丈夫で、劍を揉し、武を談じ、その尊王護國の至情、嘲世罵俗の意氣、到底今日の所謂畫家美術家なるもの丶範疇を脱してゐたといふ。先生の生涯最も記念すべき年四十五歳、この年夫人松井氏が發狂して病死した悲痛を極めたと共に、明の盛茂燁の山水畫の大作を得て感奮し、寢食を忘れて其の皴法を學ぶ事五十余日、それより心機一轉して、曩日の粗豪の狂態を一新し、「あばれ梅溪」で通つた先生は、打つて變つた謹厚の君子になつたと稱せられる。是れ併し乍ら愛妻の死から受けた深刻な感銘が源となつて、豪快の一面からのみ見て居た人世を、更に他の側から見直す時機が到達したのであつた。先生が盛茂燁の作品に、深く悟入する事の出來たのも、恐らくは、かうした心の沈潛が、助緣をなしたのであらうから、配松井氏こそは二重にも先生を活かした貞女なり恩人なりである。先生が糟糠の妻をして一日の安を得せしめざりしは我過也と稱して一生再び娶らなかつたのも、洵に所以ある事である。

傳記によると先生が足利に退隱し、次いで時世の急を鑑みて彩管を抛つて戎軒を事とせんとするに至つたのは、文久元年、先生四十七歳の時である。それから明治元年五十四歳にして誠心隊司令を辭して、亦元の閑雲野鶴に還つて、專心丹青の道に從うに至るまで、約八ヶ年間、先生は日本臣民の一分として、將又男子の本懷として、身を鋒鏑に曝して君國のために馳驅されたのである。先生が單なる畫人でない所以は、そして藝術家が單に藝術家として、周圍の世界から隔離して獨善自樂の阿羅漢主義即小乘主義を守つてゐられない所以は、實に茲に在るのである。

先生の畫技は、初めは父君の南畫風を模するに端を發し、文晁門の金井烏州、四條に出た梅翁、更に文晁自身からも益を享け次いで崋山、靄崖、南蘋、仇實父、等の粉本も模し、やがて又前述通り、吳派の盛茂燁に私淑して研精に努めた上、誠心隊辭任後は更に、沈周、徐熙、を宗として南北合流を試み、隆古の大和繪風をも併せた上、竹田、蕪村の長をも並び學んだ。故に先生は、諸派綜合の上に更に獨自の境地を作つたものであつた。

秋山晩暉　田崎草雲

先生が明治十五年六十八歳にして、第一回內國繪畫共進會に出陳して、「得宜」銀印賞を得た『春山曉靄』『秋山晩暉』の二幅は、恐らくは、この獨自の畫境を物語る最大の作品であらう。天に沖して、そゝり立つ懸崖の下に、一清流あり林叢を通して潺湲の響をたて、前景に一巨岩横はつて、その上に、ぬるでの紅葉眞紅に燃え、落照は薄く山頂を一抹して千羽烏にも似たる群鳥山角に亂れ飛ぶの圖は、即ち『秋山晩暉』の一幅である。紫匂ふ筑波の頂のみ、上部に漂渺として暈染されて、四五羽の曉烏の眞白き雲烟の間を飛翔するの外、亦他の一物をも着けざる明朗な畫面、簡楚な構圖、これが即ち『春山曉靄』である。

自分は、先づ最初に前圖を觀て、その構圖と色彩の清新に撲たれた。何となれば、其處には所謂樣によつて胡盧を描く南畫家一流の支那的舊套が一つもないからである。願愷之の所謂『實對』を失はぬ描寫であつたからである。ぬるでの色彩の感覺的なる、大懸崖と後の山の自然なる、亂飛する群鳥の實景的なる、秋山の『リアルな姿』は確實に把握されて居る。

春山曉靄　田崎草雲

同時に其處には又、些細なるものゝ省略があり、擇まれたる誇張があり、色彩上の對照均衡があり、線の上の意識的な統一と變化とがある。就中、天際から落下するやうな大きな斜線に對して、ぬるでの樹幹の大きな直立線があり、それ等の斜線と直線をしつかと與へて畫面の安定を保たせてゐる大きな岩石と土坡の横線がある。此三つの線の交叉に依つて、此圖の與へる印象は、頗る豪快なものとなつてゐる。一方この豪快の『線』の印象を、鮮かなぬるでの臙脂が有力に補勢して、土坡と岩石の濃い暈色が、凡ての重力を色彩的に保持してゐる。

併し乍ら、かうした寫生的畫面はやゝもすれば四條圓山の卑俗に墮し易いものだが、全体の調子の高さまで、此圖はよくそれを救つてゐる。

されば、此圖は、或意味に於いて先生の南北合流の好代表的作品であると同時に後に來つた新南畫運動の前驅をなすものとも云へる。

『春山曉靄』は横幅である。（註　出品畫は縱幅であつた）、自分は、最初一瞥して、其畫面の余りにも簡略で、無雜作なのに一驚した。併し更に落付いて、それを諦視して居る中、自分は今度はその神韻の漂渺たるに二重の驚きを喫した。

而して、この驚きは、曩きの『秋山晩暉』以上の驚きである。自分は此圖の前には無條件で頭が下つた。夫は實に普通の巧さに對する歎美以上の歎美である。

自分の驚いたのは、作者が大自然を形象を通して表徵化したその深徹した直觀力である。十數羽の烏と山頂の一角、タツタそれ丈けの描寫で天地に漲る朝の色も、關八州の平野の大きな空間もが、一つの焦點に纒められてゐるのである。

就中自分はその烏の手法の大膽さに打たれた。これ恰も生死の一摎を無我の刄先に收めた劍法の極意にも似てゐる。先生此年七十八歳の生涯に屢々生死の間を潜つて、悠々としてこれを超脱し來つた面影が、正に自分には、這裡に認め得られるのである。

聞くならく、先生此圖を出陳して銀印賞を得るや、知己門人白石山房に集つて之を慶す、一人あり曰く『秋山晩暉』の圖は當代の白眉、銀印の賞尙慊らずと。然るに先生は頭を掉つて言ふ。否、秋山の圖は苦心の作には違ひはないが、創意の作ではない、唯『春山曉靄』に至つては、眞に我が苦心の創意になるものだが、世に之を認むるものがないのを遺憾とすると。然るに其後フエノロサが此圖を見て、日本畫家にも紫色の曉山を描くの巧手あるかと激賞した時、先生後に之を聞いて我が一知己を得たりと悅ばれたといふが、自分はこの曉色の寫生に配した烏の描寫の大省略法に於いて、先生と其の養ふ所の深さを窺知せんとするものである。これこそ先生獨自の畫境獨自の心印とも言ふべきではなからうか。そして『秋山晩暉』にも增して、大きな問題を後の南畫道に貽したものと自分は見たいのである。（河野桐谷、草雲先生を憶ふ）

川島理一郎

國畫會の重鎭にして當代隨一の色彩畫家と謳はれる洋畫壇の權威川島理一郎先生は明治十九年三月、當市の舊家、五百年の歷史ある川島家に生れたのであつた。祖父川島榮助は戸田家の家老であり、明治時代に於ける南畫の巨匠田崎草雲は先生の